

第二回小学校・幼稚園

教育研究協議会集録

— 1953・12・5, 6 —



金沢大学教育学部

序

一昨年第一回の研究協議会をもちましたところ、県下教育関係各位の御支援と御協力とによりまして予想外の成果をおさめたのでありますが、このたびの第二回協議会におきましても各部会とも終始熱心に研究協議がすすめられまして多大の成果をおさめて終わることができましたことは会員各位の御尽力の賜と深く感謝いたしております。

おもいまするに教育学部がこれまで主として附属実験学校を通して教育の現場を理解してきたのでありますが、県下教員養成の大任や県下教育界への奉仕的役割を自覚いたしますとき、ただに附属実験学校にとどまらず、常に県下教育にどんな問題が、どのように考えられ、実践されているかを知り、今後の動きを洞察し、それに適した教育を学生に施すべきはもとより、もっとつつこんで、共に現場の問題ととっ組み、共に悩み、共に苦しみ、現場で解決を要求している困難な問題に対して、すすんで実験実証し、資料を提供するほどの動きをしなければならぬのであります。

このように考えますとき、県下の熱心な教師各位と共に打って一丸となり、現下教育の重要な諸問題について研究協議をいたしますことは、誠に大切なことであると思うのであります。

もちろん設けられた十二部会では、小幼教育の全面を網羅するものではありませんし、それぞれの問題もまた会員各位の要望のすべてを尽してはいないとは思いますが、ここに研究の成果を集録して御批判を得、更に各位からの御教示により充実した研究協議会たらしめて県下今後の教育復興の基礎といたしたい念願であります。

終りに、この会によせられました県教育委員会並びに県教職員組合の御後援に対しまして厚く御礼申し上げます。

昭和二十八年十二月

金沢大学教育学部長 徳 光 八 郎

各科協議主題

部	協議主題	司会者	主催者側出席者
小学校経営	1、教育計画の再検討 イ道徳教育を中心として ロ基礎学力を中心として 2、小学校における生活指導 イ学校教育と社会教育の限界について	石川県指導主事 富沢友治 石川県笠岡小学校校長 北川伝栄 金沢市瑞生町小学校校長 細川喜由 河北郡花園小学校校長 西利作	神力甚一郎 大平 勝馬 小松 周吉 新谷賢太郎 増永 良丸 加納 心治 本田 貞一 堀内 義雄
幼児教育	1、個々の幼児に即した幼稚園の一日のカリキュラムはどうしたらよいか 2、幼児の社会性を育てるにはどうしたらよいか 3、特に指導を要する幼児の取扱いについて	金沢市木花幼稚園教諭 中西 幸 金沢市川上幼稚園教諭 大住 弘子 金沢市藤花幼稚園教諭 藤岡 外茂栄	薄田 司 沢田 忠治 新山 澄子
健康教育	1、健康調査をどのようにすべきか 2、危険防止について学校環境を如何に管理すべきか 3、健康な学校生活は如何にあるべきか	石川県主事 高森 正雄 河北郡森本小学校校長 徳 応 潔 金沢市材木町小学校教諭 大矢 喜久男	村上 賢三 桐元 武一 卯野 隆二 岡崎 康夫 竹中 武雄 沢 鳩江
特殊教育	問題児について イ 問題児について ロ 診断するには ハ 指導法について	金沢市芳篱町小学校校長 永井 馬朝 石川県指導主事 土井 盛夫	沢田 幸平 倉橋 勝 北野 栄正 塩梅 俊夫 荒間 八郎
国語科	1、読みの指導 イ音読と黙読 ロ文学的教材の味わい方 2、作文の指導 イ題材の発見 ロ作品の処理	金沢市此花町小学校校長 高 昌 文太郎 金沢市指導主事 宇 多 周一郎	密田 良二 岩井 隆盛 藤田 福夫 吉田 定雄 室木弥太郎 深井 一郎 野村 敏夫 上口 映治
社会科	単元構成の方法と吟味 イ単元展開に伴う地歴の内容とその取扱い ロ政治経済に関する単元の取扱い ハ教科書の取扱い	金沢市指導主事 川上 重次 河北郡外日角小学校校長 東 中 幸作	永守 良二 浅井喜久雄 若林喜三郎 木田 浅男 石原 善龍 沢田 清 三由 信二 矢ヶ崎孝雄 泉屋 清 架谷 一男 洲崎 明 山本 進

部	協 議 主 題	司 会 者	主 催 者 側 出 席 者
算 数 科	1、問題解決の学習について イ生活の中の問題解決について ロ書かれた問題の解決について 2、教具について イ時間・時刻・分数計算・測定図 形等の教材について	金沢市長土堀小学 校長 曾 谷 茂 金沢市味喰蔵町小 学校教諭 中 条 米 吉	翠川 潤三 佐藤外喜雄 新保彦四郎 菅村 敬 寺田 正夫 浅野 正
理 科	1、簡易な理科実験及び観察を理科 の授業に如何に取り上げるべきか 2、児童の実験及び観察をどう取り 上げるべきか	石川県指導主事 平 野 昌 平 金沢市浅野町小学 校長 腰 垣 福 松	小西 英一 古谷健太郎 天羽 良司 塚野 善蔵 福井時次郎 北野 貢 金崎 肇 山本弥一郎 北原 龍 瀬嵐 哲夫 森田 春樹 丹羽 修平 太田 芳美 井下 爽
音 楽 科	1、歌唱における発声と表現 2、リズム反応の实际的指導法 3、器楽指導の進め方	金沢市立中村町小 学校校長 立 野 与 市 石川郡枯野小学校 長 中 西 与 二	佐々木宜男 石本 一雄 今井 松雄 川口 恒子 八十田歳雄 神佐茂外吉 川西 和夫 中野恵美子
図 工 科	1、美術教育と生活指導について 2、美術教育における構成をどう考 え、どのような指導をしたらよい か 3、立体表現活動の不振の原因とそ の対策	金沢市松ヶ枝町小 学校教諭 森 高 芳 金沢市指導主事 南 万 三	遠田 運雄 林 健造 米林 勝二 高杉 正実 松島 清次 池田 正義 南 勝治 高島千代子
家 庭 科	1、低学年の家庭生活指導内容の再 検討 2、高学年における家庭生活指導内 容と取扱い方	県教育委員会嘱託 東 知 子 金沢市新堅町小学 学校教諭 沢 田 穠 子	吉村 和子 木越美和子 出石 康子 田中 順子 紺谷ミネ子
体 育 科	1、学校生活と体育指導との連関を どう考えるか 2、雨天時及び冬期における多学級 の体育室の活用法 3、リズム運動の創作についての段 階的指導法	河北郡町小学校校長 河 合 幸 治 金沢市主事 藤 江 喜三次 石川郡出城小学校 教諭 半 田 弓	竹中 玉一 佐々木 茂 桜井栄七郎 山本 義雄 東 正雄 笹本 正治 石田 保之 東 正子 徳田 喜平 森田 茂男 大関 たか 木戸 喜一 正元喜久男 石川 久子 北本 和子

小 学 校 経 営 部 会

1 教育計画の再検討

イ、道德教育を中心として ロ、基礎学力を中心として

2 小学校における生活指導

イ、学校教育と社会教育の限界について

1 教 育 計 画 の 再 検 討

一、道 徳 教 育

右の問題に対して司会者より次のような討議の進め方を提示されたので、此の問題を研究する手順の参考として次にあげる。

1 理 念（考え方の問題）

人間像（道德観・道德基準）

a 求める道德律

b 道德教育観

c 道德の不変の面と変わる面

d 人 間 観

2 道德教育実践の方法（具体化の問題）

a 児童の生活実相

b 社会の実相と学校教育の立場

c 教育計画全体の中における道德教育の位置づけ

d 道德教育目標の具体化

e 道德教育の学年的系統

f 道德教育の評価

と示されたのであるが、このように順序だてて討議することはこの集会のような短時間にはできかねるので、全体にわたって自由な角度から論議を進めることにした。

（A）徳目主義教育の是非

第一に取り上げられた問題は徳目主義の教育に対する可否論である。

徳目主義の教育は世に云う修身科復活の問題と関連して父兄間や社会の一部から、しばしば要望される問題である。徳目主義の教育と云うのは徳目をいわゆる説教によって、あるいは例話によって理解させ、児童の道德的知見を開き、道德的心情を練り、道德的意志の発動を促そうとする方法で、従来の修身教育の形態がそれであった。

この問題に対して、賛否両論が生じたので討議の内容を要約して次にかかげる。徳目とは何かと云う点では賛否両者共大體次のように了解できたようである。

徳目とは人間形成の目標をさすので、したがって戦後に於ける民主社会の建設を旨とする場合は従前に比して徳目の内容に変化があるべきものとの考えは一致したようである。

徳目主義教育に反対する意見

a 特別に徳目をとり立てなくても、社会科の指導や、その他の生活教育の中に充分含まれている。

b 徳目のような抽象的な言葉に要約せず、その徳目が具現されている多くの実践行動の中に道徳的分野を見出して行くべきである。

c 抽象的な徳目の解説は、以前の修身科のように理念の空転になり、道徳を実践するよりは、むしろ観察として覚える道徳となる。

と、云うような意見が出た。

これに対し、徳目教育もまた可なりと云う賛成論の方では

a 徳目をかかげても、その教育の方法によっては従前の教育の缺陷を補うことができる。

b 徳目そのものが悪いのではなく、徳目にしばられて、児童の生活実態から余りにもかけ離れた指導が悪かったのである。

と、反論されたのであるが、大勢は徳目主義の教育に対しては反対の意向が強くなって行った。したがって此の論議の裏には修身科の特設に対する反対が強く働いていたようである。この論争の終り頃には、徳目主義の教育には反対するが、徳目そのものの研究は教師として大いにやるべきであると、意見がまとまって行った。

教師は自分の道徳観を確立すると共に、児童の道徳に対する考え方をみとって行かねばならぬのであるから、道徳性そのものの本質や構造を明かにするため徳目の研究をすべきである。即ちここには徳目主義の教育と徳目の研究とを区別して考えられている。

(B) 道徳律の問題

第二に取り上げられた問題は、道徳律(道徳基準)についてである。かつての教師の立場は教育勅語によって、その基準を持っていたのであるが、現代の教師は民主主義の原則、平和憲法の原則にその基準を求めなければならぬのであるが、いずれも言葉に表現されたものは抽象的で、容易に具体相をつかみ取り難い。

真の道徳性は、自律的でなければならぬのは勿論であるが、幼稚な少年(特に小学校児童の場合)に於ては、果して大人のように自律的態度のみを要求しただけでよい。そこには何等かの道徳基準を求めて行こうと思うのは教育をする者の側から見ると自然に行きつくところである。

教師は児童と接する場合、自分だけの道徳観で律して行くだけでは完全な道徳人

とは云えぬのでこの悩みが生じて来るわけである。

現今のわれわれの持つ日本の社会には、道德に対する「ものさし」がはっきりしていない。即ち道德観がそれぞれに異っていて動揺しているのではないかと云う問題が生れて来るのである。これに対しては次のような意見が出た。

- a 政策的・一般社会・知識層・老年層・青年層と云うように、それぞれの立場から要求されるものを見ると、その度合がちがっている。
- b 現実には自分達も実践はできないが、何か高度な道德基準を示して、大人さえできかねることを子供達に押し付けようとしていないか。
- c 道德の基準とか、ものさしとかは現在の子供達が、今の実社会の中にあつて、自分の生活を通じて打立てて行くべきである。
- d したがって教師自体も、自らの人間改造に努めなければ、児童と共に新しい道德を實踐していくことは困難である。即ち教師自らが道德的修養につとめ倫理的教養を身につけねば道德基準の問題は解決しない。
- e 道德基準の目盛は、子供達がよい社会を目ざしながら進む時、自然に生まれ、きざまれて来るべきであるが、そうした児童を見守り育てて行く教師の道德観は教育の實踐上重大な問題である。

と云うように、よく似た意見が堂々めぐりをして容易に新しい時代の道德観は生まれ出なかつたようである。道德の本質は不変であるけれども、道德の具体的内容は時代に應じて変り得ると云うことは認められたようである。即ち新しい時代には新しい道德が生まれて来るので、今日の生きた現実ととり組み、これを解決する過程に於て新しい道德観を確立して行くべきであると云う考えが強い。

(C) 道德教育實踐の方途

第三に取り上げられた問題は、道德教育實踐の方途であり、学校経営全体の中に、道德教育がどのように位置づけされるべきかが活潑に論議された。

ここでは小学校における實踐の立場から、道德の知見と實踐の一致しない原因、社会環境の不道德から来る倫理、道德に対する児童の不信、指導目標の具体化、指導内容の体系などが主として社会科学習を背景として論ぜられた。主な意見は次のようである。

最初に道德教育と生活指導の関係を明かにする必要があるとして、生活指導は充分身につけて習慣化されねばならぬのだが、道德的考え方はどこで指導すべきかと云う点が問題になった。

- a 特に小学校に於ける生活指導を、道德教育と云う高次なものにまで指導すべきかが疑問である。
- b 道德的考え方は育てるべきであるが、小学校に於ては抽象的な徳目の講義を取り込んで育たない。知的理解よりも行動にうったえた理解に進むべきで、高次な道德感情を伴う指導は無理である。

- c 知っているけれどもできないと云うことや、知っていたけれどもやってしまったと云うことは我々の生活に常に起るのであるが、知識的に注入された結果が現実の生活に対して如何に無力であるかの証明になる。
- d 父兄の要求は多く嫌の面が多いので、モラルはもっと高い処に位置するものと見るべきである。
- e 生活指導といい、行動による理解と云うが、高学年になるとそれのみでは割り切れないものが残されて来るのでないか。
- f 生活指導のやり方に二面ある。生活指導の行動的なものを月別に割り当て繰返し何年もやって行く面と、モラル的な考え方を社会科の中に打ち出してやって行く面とがある。
- g 月別割当の生活目標を立てるやり方に従前でもよくあったが可成押し付けが多く教師の一方的な考え方が強くて不合理な点が多かった。
- h 月別割当もやり方があって、児童の実際生活の中から、子供達のよい社会建設をはばむものを彼等の考えや経験から割り出させ、そのいくつものの中から各自のもっとも痛切に感じている項目を取り出して一カ月、その改革に努力していく方法をやってみたが相当効果がある。
- i 児童会や学級会などで、生活目標をよく取り上げるが、その尺度をどこにとって次の目標にうつって行くのか。

ここで月別割当の是非について賛否両論にわかれた。

月別計画と云うのは、児童の生活に現われて来る重要な問題を前以て事前に計画配置して行くやり方で、児童の実際生活の中から生々しい問題を取り上げて来るから最も身近で効果があるとする意見である。

反対論は発達段階を無視した一律的な方法で、評価などにも自然無理が来るから各学級別（発達段階）で児童会にとりあげ、時期的課題と、通年的に生活に現われて来るものを取捨選択して取り上げる方がよいとするものである。

後者の場合は、一週間から一カ月位の時間で重要な問題で不徹底な場合は何回でも繰返す方法をとっている。多くの場合全校的な生活目標として児童会に取り上げて、その結果は六年生に要求する度合も一年生に要求する度合も皆同一にして評価している。その結果何年生が悪いと云い一年生にも六年生と同様の無理な要求をして、うまく行かぬと歎いていることがある。ここに発達段階に応じた評価と云う問題と取り上げる課題の相違が生じて来るのである。

評価について、いろいろ話し合いが持たれたが、22項目の行動基準を定めて、その基準に近づけるように努力していると云う意見もあった。

学年別に配当した生活行動の基準を定めて、これを教科外活動や社会科を始め他の学科の中にも、それぞれに組み込んだカリキュラムを持ち、こくめいに実践にうつしている例もある。

二、基礎学力

右の問題について、司会者は提案理由を整理し、次のように討議を系統的にすすめるように提示した。

- 1 基礎学力とは何か
- 2 基礎学力は低下しているか
- 3 基礎学力低下の原因究明
- 4 基礎学力振興の対策

と四問題に区別したのであるが、これに対し討議時間が少ない理由で、自由に系統立てずに、最も身近に起っている平易なところから論議をするようにとの希望が多かった。しかし討議に入ると提案の通り第一の問題から取りあげられてきた。

1 基礎学力について

主なる意見を要約すると次のようになる。

イ、基礎学力とは、学習を進める為に事かかぬ能力を云う。しかし以前は学習の範囲が狭かったから読書算でよかったが、今日の学習は従前よりも相当複雑になっているから、基礎学力の領域も広がっていると見るのが至当と思う。以前は基礎学力と云う言葉を使わずに基礎学科と云うふうに云っていた。

ロ、学年的に見ると、その学年に應じてこれだけは是非知ってほしい、できてほしいと云うのが基礎学力である。

ハ、子供が大人になった時に必要なものを基礎学力と云うのではない。子供達が次の学習に事欠かぬ為の学力を基礎学力と云うのである。

ニ、基礎学力は国語算数の漢字や計算能力ばかりでなく、社会科にも理科にも、その他の教科にも、それぞれ次の学習への基礎になるものを含んでいる。

ホ、基礎学力と云うものに対して、その他の学力、或は学力一般と云うものが考えられるが、今日云うところの理解・態度・技能と区別されているうち、理解と技能の二面は基礎学力で、態度の面は学力一般と考えることができると思う。

このような考え方からすれば、基礎学力は読書算に限定されているように見るのは間違っていると思う。態度の面を学力として重視するようになって来た点は以前の教育と比して考え方の違って来た点ではなからうか。

ヘ、新教育の立場（経験主義的教育）における学力は、主体的に能動的に生活を実現していく力でなければならない。だからこの内容を分析すると、問題解決の学力と、問題解決の学力のための基礎学力に区別できるわけである。このような考え方は以前の教育には見られなかったことなので、新しい学力構造と云うべきである。このような立場から基礎学力と云う言葉が生まれて来たのではなからうか。

ト、問題解決学力と云う問題は戦後の民主教育から発生したので、我々には問題

解決学力そのものが容易に理解できなかったのであるが、その性格が漸次明確になって来ると、その基礎になるものと区別して、しっかりその基礎を押えて行かなければ適確な授業にならないと云うことに当面したのである。

チ、新教育が発足した頃は、問題解決学力と云うものの理解に努力したため、自然その方に重点が向けられ、基礎になるものの取扱いが軽くなったため、新教育の盲点として大きく取り上げられ批判されたのである。

と云うように、大体従前の教育に於ける基礎と見られるものと、現代に於ける基礎と見られるものとを区別して基礎学力とは何かと云う問題は終わった。

2 基礎学力の低下について

イ、我々が小学校を卒業する時も「今の子供は学力が不足している」と云われた。今日も同じように大人達は「今の子供は学力が低下している」と非難している。どの時代にも、同じことを漠然とした考えで大人が子供に云うのではなからうか。何かしっかりした資料を持って此の問題を見なければならない。

ロ、ある学者の発表によると、昭和3年から4年にかけては、日本初等教育の基礎的な学力が最高水準に達して、当時の世界に誇るべきものであったのだが、それから漸次低下して来たと云う。

即ち現代の大人で以前の小学校六年生を卒業した者と、今日の六年生を卒業した者について計算能力を比較して見ると以前の卒業生が63.6点で現在の子供が60.6点を得て3点だけ低下していると発表している。

ハ、この意見は信頼できない。第一に義務教育三カ年の延長で指導内容が以前から見ると大変革を来たしている。したがってテストの形式だけ同一でも、質がズレているから正しい検査とは云えない。

ニ、それはどこまでも現代のカリキュラム本体にして検査すべきで、国語で言えば現代かなづかいを取り上げたら現在の普通の大人ならば零点に近いものになる。

ホ、以前は形式的な学力さえあればよかったので、ペーパーテストの上では、その形式面だけ取り上げると、あるいは劣っているかも知れぬ。

けれども応用の面、即ち生活を切り開いて行く力の面では今の子供は非常にすぐれている。

ヘ、最も具体的に缺けていると父兄の云うのは裁縫である。これは地域と階層によって云うことが大きな差があって一般的なものではない。

ト、最底基準量と云うものは時代によって変わるのでなからうか。それが変わるものとする、今の教育の基準を明確にしないで新教育の学力を批判するのは無理であると思う。

チ、まとめる力、処理する能力などは父兄もよく向上していると認めている。低下していると指摘するのは、漢字の筆順とか習字とかを云う場合が多い。しか

しこれらは、終戦後の混乱期の指導の不徹底と制度の不備と云う点があるので昨今は相当これ等の点が是正されている。

以上のように学力の低下は、わずかに部分的には認められるが、現代のように経験主義の教育からみると決して劣っていない。低下しているとみられる諸点も順調に恢復し生長しつつあることを認めている。しかし現状より以上に基礎学力を振興することには異存はないので、いくつかの角度からその向上策が論ぜられた。

3 基礎学力の振興について

イ、現在のところ基礎学力についての標準尺度がないので、それぞれのカリキュラムによるより外ないのが、一学級の50パーセント位がもつ能力を一つの尺度としてはどうか。近頃云うレディネスを取り上げてみてもよい。

ロ、社会の要求する人間像と、基礎学力の關係に於ては、過去の教育のように受身の立場にばかり置かれる場合のように、形式的な点のみの学力では充分でない。

意見を正しく発表する、自分の気持を他人にわかるように綴る、よく聞きわけて整理が出来る。と云うように、国語に例をとってみても基礎の面が相当変っている。

ハ、振興をはばむものとして経済的な面、設備不充分の点、単元学習の困難性、指導技術の拙劣等があげられる。

ニ、基礎学力の不振の一例として、社会科の地理的教材のうち、県名を知らぬとか、地名を知らぬなど云われるのはグループ学習の取扱いに缺陷があるのでないか。

ホ、グループ学習の中で、担当した部分をそのグループだけがよく知っていると云う缺陷は指導法の改善によって充分に補えると思う。

ヘ、反復練習の必要はあるが、従前のように機械的に繰返えさなくとも、カリキュラムの中に何回か出て来る反復の場を正確に押えて行けば、自然に身につけて行くと云う力の養い方が大切でないか。

ト、児童にメモをとる力をつけて置くことが大切である。

チ、読書算以外の基礎学力では、どのようなものを押えて、どのような機会に習得させるべきかを工夫すべきである。

リ、単元学習の終末に一応ドリルをやって、養われた基礎学力の上に立って次の単元を進めて行く方法もある。

ヌ、基礎学力の根本的な問題として

1. 質と分量が変わっていること
2. 単元学習がもつ弱点を補うこと

の二つがあげられる。前者は今日の教育課程の内容と以前の教育における教材配当表の内容とを比較するとよくわかる問題である。後者のためには単元学習

の間に教材単元をはさむ方法をとったら如何なものであろうか。単元学習だけでは断片的に陥り易いからこれを救い、整理するために教材単元を含める必要がある。もっともこれをやるには、相当指導技術も進んでいないと混乱する恐れがある。この方法には相当異論もあるからなお吟味する必要がある。

ル、学習能率を高める為に、指導技術を大いに研究する必要がある。例えばテストを行う方法でも、そのやり方によっては非常に能率的な方法を研究している者もいる。

ヲ、社会科の場合、歴史的見方、地理的見方と云うものも基礎学力と見るべきでないか。低学年に於ても何等かの形で、それがやり得るのでないか。そうした力が後に高学年に行って基礎学力となると思う。たとえば歴史に対する理解であるが、低学年に於ては先ず「変わる」と云うことの把握から始め、やがて「変り得る」と云うことを知らしめる。こうした事の理解が小学校の基礎学力として必要ではないか。

2 学校教育と社会教育の限界について

第二日目になって、学校教育と社会教育の限界について講ずる協議グループが設けられた。

集まった人々は、学校教育に従事する主として郡部の教頭校長級10名余りに、平素社会教育に携わっていてわざわざこの会に出席して頂いた金沢市警の中村氏、金沢PTA代表の吉木氏、十一屋少年連盟の柿茂氏、市の公民館事務の牧氏等であり熱心にして真摯な討議が重ねられた。以下主な点について述べる。

1 問題の提案理由について——大学側より

子供は、どこで育成されるか考えてみると必ずしも学校に限っているとはいわれない。社会における影響が甚だ大きく広く、この方面からうける人格形成面を重視しなくてはならない。ここに学校教育の限界の問題が起っている。このことについて学校教育に従事する人々と社会教育に携わっている人々が十二分に講議して頂きたい。

2 学童の生活指導に関する市警側の見解（生活指導上の問題は如何にして発生するか）

中央青少年問題協議会なるものが昭和24年に生まれ本年8月法制化して県では設置条例を作って青少年の防犯について考慮している。

対象は小学児童より満20才特別のものは25才までである。

これらの少年は、学校、家庭、社会の三つの場に於て生活しそれぞれの保護機関によって育成されているが、

この三つの場の比重がアンバランスになった時に問題が発生しているこれを図示すると



△印それぞれの保護機関

3 生活指導に関するPTA及び子供会側の意見

いわゆる問題児といわれる者は、10人が10人とも家庭側に欠陥がある場合に多い。PTAとしては、子供の自発的活動をまわっているがそれにしても親は子供に手本を示すような態度でありたい。私は自分の子供の友人に対しては“お早う”と私から呼びかけるようにしている。かく考えると成人の反省、親の理解を要望したい。

また子供会側の意見として、子供の生活指導については、学校の先生は、積極的に子供会少年連盟と連絡を保つようにして欲しい。即ち学校で校外生活指導の町内担当の先生が、子供会の世話する人々と相談されたり意見を聞いたりして指導に当たられたい。

4 児童をいかに見るか——児童観の問題

教育者同志の意見交換は活潑だが部外者との場合は不活潑になり易いとの問題より、警察側の児童をみる眼と教育者のそれとに相違があることについて討議が重ねられた。

市警側より——以前の警察は、そのような感じがしたであろうが、今では青少年の罪を暴くとか裁くとかするのではない。青少年問題協議会の生まれた所以もここにある。警察が児童相談所や家庭裁判所と共に児童を保護し、教育関係者による育成に役立つ為にできたのである。したがって児童を全体的にみようと努力している。

その打開策として警察という語感を取り除くことに努力していて児童を警察へ連れていくのは適当でないから派出所で処置している。京都市警はこの点は進歩していて少年課があり少年補導所もあって警察と全然別の建物で補導している。

世論調査で“現在の警察に何を望むか”と尋ねると46%まで青少年犯罪防止を望んでいる。

5 問題児の具体的事例についての取扱いの限度

学校側より——警察側の趣旨はよくわかったが、その考えが下部まで徹底していないのではなかろうか。森本附近におきた児童の列車投石事件について、あやまちを犯さない少年に誘導自白させる事例と、これに対する警察官の態度、教育者の児童に望む態度について意見があった。

市警側より——国警などの下部にいたっては取扱いの誤ったものはないとはいえない。警察では新しい警察官の養成ということを考えていて在来の警察意識のない人を養成してこのしごととに当らせたい。またこの種の事件について学校側に要望したいことは、警察に立入って貰いたくないという学校側の見解を打破したいことです。これは警察に対する信頼度の厚薄によってきまることであるが、たとえば、ここに児童の盗みが発生したとする。校内でおきた場合は教師によって善導処理する。デパートで万引した場合は、デパートは警察に知らず。警察ではありのまま調査してこれを両親や先生に知らず。警察は調べるだけで児童の責任追究は学校教師

に委ねることになっている。

6 問題児とは、不良の基準はどこにおくか。

会員より映画に出入する児童は果たして不良であるか否かの論議より警察側の見解として

未成年——14才未満で法にふれるが刑事上の無責任者である。これは法的に罰せられない。

犯罪少年——満14才以上で20才未満で刑事上の責任は追究される。

虞犯少年——a 正当な監督に服しないものとして（学校教師や生徒自治会のきまりなど）b 家によりつけない。（無断外泊人、家出人）

の三つに分けて、これらを補導しうるものを問題児としている。

7 社会が学校教育に便乗している為、児童の不良化をまねくものはなかろうか。

司会より、最近子供銀行の表彰や何々週間、何々デー、共同基金などの政策面で学校教育を利用してはいないだろうか。

警察側の見解として——表彰は弊害のない限りよいと思うが、これは学校に統一すべきだと思う。

校外連盟の表彰は逆境に負けず伸びている子供を学校を通じて推薦して貰っている。その他人命救助の場合も表彰している。

ポスター募集などは、交通安全の如きそのこと自体に目的があって子供に安全を意識させるような場合に児童から求めている。

今では印刷会社に美大卒業生などがいて、ポスター募集など行う必要がなくなっている。

郡部の会員より——とはいいいながら小学校に依頼されるものが多い。県教委などを通じてよくくる。

子供会の方より——金沢市では太鼓行列、七夕祭、商工まつりなどの行事参加に利用されているのが現状である。市公民課などでは断り切れない程である。これは老年層の人々の無理解が学校を利用しているといえるものである。

学校側より（付属）——営利会社の催している展覧会などには、学校として一切出品しないようにしてはどうだろうか。出したい児童は個人の自由としてこれを認める。たとえ受賞しても、学校として他児童の前でこれを表彰したりしないこととする。

8 不良化の限界点

学校側の教師の立場として児童について責任があると児童を包容するとかいうも恰も病人が出たら医者に渡すように、病人といえるまでに不良性が全般にしみこんでいたら教育者は児童相談所や警察へ渡すべきだという結論がでた。

9 児童生徒の映画館出入の問題

警察側より——金沢市では教師引率とか父兄同伴の場合のみ入場して差支えなし

と定められて警察方へ協力の依頼があった。この線は夏休みがすぎてくずれて来た。映画そのものの批判はぬきにしても、映画館のもつ雰囲気と、父兄の経済的負担からも入場を制限したいとの考えが有力であった。パチンコ、映画など、だれでもが独りでいきたいとか、友人といってみたいとの不良性がひそんでいる。

子供会側より——父兄同伴ということは、教師が父兄に責任を転嫁したことだ。正月を控えて、どんな映画がよいか推薦して貰いたい。またPTA側より映画館に交渉して「父兄同伴でなくては、ごえんりょください」と掲示をして貰ってはどうかという意見があった。

学校側より——父兄同伴の意義を認めなくてはならない。教育では世間の悪に対して児童の眼を塞ぐわけにはいかない。親は子供とともにその映画を見て児童に説明してやるという。親でなくては、できない面のあることを知って頂きたい。

PTAの見解——30年間映画事業に携わっていたが、今の映画は昔と異なりハッピーエンドでなく、あとを考える問題が多い。父兄同伴となれば、あとの部分について適切な説明がなしえて、ここに始めて善悪の判別ができる。

結びとして限界点の範囲内のみを十分にするのではなく己の領域を広めて交錯した点について指導育成すべきではなかろうかという意見が出た。

10 人権ようごの立場から

人権擁護委員会として問題としている点は自由の束縛はく奪、教職員の人権侵犯公務員の人権侵犯の三点にある。羽咋の断髪事件などは、教育の問題として慎重に取扱うべきものを人権委員会やジャーナリズムが取り上げたことがよくない。

体罰について——今日、教壇の上から直接道徳やしつけを話さぬから今の教育は手ぬるい、もっときびしくしろという父兄や社会の要求がでてくる。体罰などをする教師はかえって熱意のある積極的な人に多い。また精神薄弱児や特殊児童などの指導において堪忍袋の緒を切る場合もある。教師に対して社会の声が必要以上に遠慮させているのではなかろうか。社会人も教養を高めてほしいというような意見があった。

11 結 び

学校教育と社会教育の限界状況において発生する種々な問題の実態及びその解決方法について真摯な意見が交換されたことは真に有意義であった。勿論、結論を出すことは不可能であったが、これはやむをえないところである。とにかく学校教育に従うものは、もっともっと社会における児童がいかに形成されているかを知る必要があるのでなかろうか。

幼 児 教 育 部 会

- 1 個々の幼児に即した幼稚園の一日のカリキュラムはどうしたらよいか
- 2 幼児の社会性を育てるにはどうしたらよいか
- 3 特に指導を要する幼児の取扱いについて

1 個々の幼児に即した幼稚園の一日のカリキュラムはどうしたらよいか

各園に以ける保育カリキュラムが個々の幼児に即するように、日々幼児達の上のように活用されているか各園の一日の保育の実際をはなしあって

- (1) 一日の時間的な配列と
- (2) 保育形態のあり方を検討して
- (3) 幼児達のためにどのような考慮がはらわれて一日が展開されていったか
- (4) 自由保育と一斉保育との時間的比率
- (5) 活動と休息との調和など

具体的な諸問題を通して、それが正しい方向に向かっているかどうか理論づけていきたいということになり、各園のディリープログラムを発表しあうことにする。

◇十二月四日（金）の保育の実際を発表されたものを次に要約して掲げてみる。

1 キリスト教系幼稚園

A 幼稚園

今月の単元 クリスマス

今週の主題 冬の生活を知らせる

保育形式

火、木、土、合同礼拝

その後各級に分れて仕事をする

水、金、分級礼拝

昨日のプログラム

8.00～9.00 自由遊び

9.00 礼拝前の集合

9.45 分級礼拝

幼児の話し合い（こぶとり、桃太郎を十分位でする）

そこへ楽器屋が鈴を届けてきたので、幼児達の要求により
楽隊遊びをする。

11.00 全員ホールに集合

遊び其他ゲームをする。

11.30 帰宅

カリキュラムは、幼児達の興味と必要に応じ、または天候によって、適当に変更することが大切である。

B 幼稚園

近日新園舎へ移転のため昨日は休園

大体のプログラム

70人の級を二人で受持つ

年長、年少組にわけたいが、園舎の都合で一緒にしている。

礼拝後、話をしばらくして、リズムや身体の運動をする。

天候がよければ半分は庭に出る。その後部屋に入り仕事をする。

できるだけ幼児達の興味を善導し、暗示を与えてさせる。

ごっこ遊びなどは全部で仲よくできる。

天候のよい時は半分宛交代で公園などへ行き、その留守の間に広く部屋を使うようにしてきた。

もう一度集ってゲームなどをし、

さよならをする。

お弁当の日は一時半迄保育をする。

弁当後は、みながすみ終る迄、ぬり絵をぬらしたり、絵本を読ませたりする。

C 幼稚園

お天気のよい時は戸外遊びを奨励している。

9.15 ホールに入り礼拝

礼拝をする時は静かにすることをきびしくしつける。その後幼児達の生活態度についてはなしをする。

今週は、動物、植物、人間の冬の支度についてはなしあいをする。

10.00 ミルク ミルク後は話しあったり、絵本を読んだり、手技をしたりする。

特に心がけていることは、

部屋の遊びと外の遊びの区別をさせている。(部屋の中では走らせない)

朝のお集りのとき、カレンダーによって数の遊びをさせて、文字や数に興味をもたせるようにしている。

2 仏教系幼稚園

9.45 集合 朝の挨拶

一週間に一回二つの組にわけて

仏さまにおまいりする。

あとの日は組毎にする。

昨日は郵便記念日だったので、

今週の単元は、郵便ごっこ、

絵はがきをつくらせ、隣の子におくる。

郵便局、ポスト等を見にいく。

年少組はごっこ遊びはあまりできない。

3 普通の幼稚園

A 幼稚園

210人を三組にわけて、6人の先生が二人宛で一組をうけもっている。

父兄の要望により、お弁当の日を多くしたので、自由遊びがゆっくりできるようになってよいと思う。天気の良い日は砂場でゆっくり遊ばせる。それから、リズム、唱歌、天候しらべ、温度しらべ等観察をし、またぬり絵、絵画などをして午前中を終る。食事後は全部終わってから、自由遊び、お話、紙芝居をし、二時過ぎ帰宅。

B 幼稚園

最近郵便はがきが売り出されているので郵便ごっこをしている。

幼稚園へくると、その遊びはすぐ始まる。

人蔘、大根でスタンプをこしらえたり、始めはけんかも多かったが次第におちついてきた。

9.30 朝の挨拶

9.45 各級に集り、自由画、粘土、歌など幼児達の自由にしている。

天気の良い日は戸外に出て遊ぶ。

11.00 全員集会 お話、紙芝居等する。

昨日は「三匹の子豚」のレコードがきたのでそれをきき、紙芝居とあわせるよう幼児達が要求したのでそれをして、その後 おどったり、家を作るまねをしたり、歌ったりして遊んだ。

4 公立保育所

A 保育所

生活指導、保健指導、環境整備に重点をおいている。

園児 210名、朝出席カードを来たらすぐ出させ印をおして、健康診断をする。

9.00 一斉に集り、朝の準備体操

天候、月日、朝のできごとで注意すべきことなどはなしをする。

組別にわかれて、畳の部屋では歌、紙芝居をする。

部屋では、手技、絵画、ごっこ遊びをする。集会場では遊びをする。

10.00 おやつを渡し、その後しばらく休んで静かな活動をする。

11.00 部屋に入り、組の先生の指導を受ける。

11.30 帰宅する子供は帰らせ、午後にとる幼児は給食をする。

11.50 手洗いをし食事、食後レコードをきく。

1.30…2.00 自由遊び

午後は指導的なことは全然しない。

B 保 育 所

カリキュラムは立てているが仲々そのようにできない。

七時半から九時までにこども達が集まる。

早出の先生が、朝こども達がくると、一人のこらず健康しらべをし、塩水でうがいさせる。

10.00 全員集合 一年保育から四年保育まで全部一斉にする。

◇次に実際発表による質問と意見によつてカリキュラムのはなしあいをする。

1 幼児の成長発達からみて、そのような宗教教育はのぞましいことであるか。

宗教教育はそれぞれ経営者が儀式的にやっているのであるから、特によいとかわるいとか深く考えないで、それぞれ家庭で食事の前に「いただきます」をいうような風にみてよいのではないか。心配することはいらない。我々の意識の奥には宗教的なものがあり、その芽生えを育てていくことは大切だと思う。

宗教意識を教師が無理強いするのではない。たとえばクリスマスならば精神的な教育意味で、人を愛するという感謝の気持ちを幼児の程度でうなずけるものを話してきかせるのであって、毎日の礼拝においても感謝をし、帰るときには反省させるというようなものである。

宗教教育はしないが、寺の本堂を使用しているので毎朝合掌させている。そんな問題にこだわる必要はないと思う。

本当の意味においては幼児期には宗教教育はできないと思う。幼児にあまりに大きな理想を抱かせすぎることはいくない。小さなこどもにあまり罪悪感をうえつけないようにした方がよい。

2 今までの発表をきいて、保育をしていく上は、三つの方向があるように見受けらるが、

(1) 子どもの興味や天候によってカリキュラムを変更していく方向

(2) 一度立てた計画をその通りに実施していこうとする傾向

(3) カリキュラムを立てないで自由に遊ばせていくもの

どれがよいのか、結論を知りたい。

教師は幼児達をよく見て、幼児の個性を知り、その一日の生活が自由に美しく遊びの中に展開されるようにしていくことが大切で、自由遊びをもっと重要視していきたい。

はげしい活動のあとに静かな時間をつくってよく休息させることが大切で、一日のうちに最も見逃され易い問題であるが、活動と休息の調和はよく考えなければ

ならないことの一つである。

幼児の幸福を考えての保育カリキュラムであるが、毎日の保育は枠の中にはあるべきではなく、幼児の生活に応じてカリキュラムをつくっていくべきものである。

- 3 学校教育でも幼稚園の保育でもおなじことだと思うが、一日の保育が律動的に強弱をもってなされることが必要だと思う。

静と動が交互に動いていることが必要であり、それによって幼児の興味関心が活潑になるのであって、一色になると平坦で活気がなくなってしまう。

- 4 幼児のひとりびとりに注意を向けて、必要な示唆を与え、個々に適切な指導をして、身心共に健かに発達するように、日々保育者は幼児と共に成長していきたいものである。

2 幼児の社会性を育てるにはどうしたらよいか。

幼児期は人生の出発点ともいわれ、この時期に型づけられた習慣が、やがてその人格の基礎となるともいわれている。幼児の一言一行がすべて習慣から生まれてくるのであるが、この人間的なよい性向や習慣の基礎づけはどのようにして指導したらよいか。我々が毎日幼児と共に生活して日々の実践に当ってなやんでいる幾多の具体的な問題をとりあげて、その問題点を追求し、そこに指導の態度と具体的な方法とを研究してみようということになり、各自のなやんでいる問題をはなしあうことにする。

- 1 幼稚園や保育所の生活と、小学校の生活との間にギャップがあって、保育経験児でも小学校の入学当初は不適應を示すことが多いからお互に密接な連絡が必要である。そしてカリキュラムの研究をしたらよいのではないか。（同感の声が多い）

- 2 社会性の欠けている幼児は、家庭に原因のあることが多いので、家庭と密接に連絡し協力していかなければならない。また母親の教育が是非必要である。

- 3 乱暴なことば

近江町から来ている子どもが多いので、ごっこ遊びのときなどさかんに近江町のことばでやりとりしてさわぎたてるので困っている。こんなのはどうしたらよいか。

特に野卓なことばでない限り、方言的なものは却って親しみがある。あまり強くと子どもが話さなくなり、言語教育の面でわるくないかと思う。

乱暴な野卓なことばは、ききにくいわるいことばだということを一応理解させて、かわりによいことばをはなしあわせる。

「アジャパー」、「ムチャクチャデゴザリマスワ」などはやりことばも得意にまねをするが、只禁止するよりも、はなしあって子どものよいことばでないといわらせて、先生もまわりの友達も興味をひかぬよう無関心のように注意していくと

自然にあまり話さないようになっていく。

- 4 お遊びの後の片付けは、社会性を育てるよい習慣が養われると思うが、この態度づけの方法はどうしてられるか。

年長組では、お片付けの仕方など子どもと時々はなしあって、片付ける順序や片付け方をわからせる。はじめは、そばについて一つ一つ指導しながら片付けさせ、よくできたことをほめてみとめてやる。よく片付けのできる子どもはほめてみんなにもはげましたり、片付いた後のすがすがしさを一しょによろこぶことが大切である。はやく協力してするように、時には、男女別に分組をわけてしたり、グループ別にするなどして結果をみてはなしあいすることもある。

年少組では時間をかけてゆっくりさせるとできる。

私の園では一日二人宛の当番制にして、その二人は周囲の子ども達に片付けるように注意する。幼児が大勢なので当番制にしてその日だけでも責任をもたしている。

お片付けの問題は幼稚園のみではいけない。もっと家庭と連絡することが必要である。幼稚園で自分のものだけ片付けても全体のものは少しも片付けない子がいるが、一般は長子や末っ子の甘えるかわいがられ子に多いのは一考を要すると思われる。

年少の幼児に「自分のことは自分でしなさい。」と独立心を強くすると、他人の手助けをしなくなって何か用事をたのむと「〇〇さんも自分のことは自分でしなさい。」というようになるがこれはどんなものか。

社会性は独自性からはじまると思う。自分のことがよく自分でできるようになって後他の人のことも助けるようになるので、当番制もよいと思う。

- 5 北陸の冬は外で遊べなくて室内遊びが多いが、室内遊びに起る具体的な問題をはなしあってみよう。

保育所で室内遊具が少いので椅子を持出して遊ぶのをやめさしたいと思うがどうか。椅子の使用を禁止すると家からベッタなどもってきてはやらせる。いくらとめても仲々やめさせられない。

何にも遊具がないのにただやめさせるのはよくない。椅子をいためないように使うか何かかわりの遊びをみつけてやる。

ベッタはやりとりがわるいので、園に備え付けのようにして与えてやらせてみると、興味は何時までもつづかないでやがて遊ばなくなってしまう。

幼児達はよくけんかをする。ある子どもの我がままから起るのもあり、子供なりにそれぞれ自己主張の理由が衝突して起るものもある。また子どものけんかは動機よりも結果を重んじ結果で判断するので、わけもきかずにまわりの子どもがどちらかに加勢して大勢のけんかになることがある。そしてけんかの原因をただしていくと、時々正しい主張をした方が反対に大勢からいじめられていたりしておど

ろくことがある。けんかを裁くときはその原因をたしかめて、子ども達のいい分をよくきいて動機を重んじてどの子も納得できるように仲裁しなければならないと思う。

- 6 壁や腰板にクレヨンで落書をする幼児があつて、黒板に白墨で描かせるようにしたり、紙とクレヨンで自由に描けるようにして、しないようにといいきかせているが仲々やまないがどうしたらよいか。

私の園では幼児と一しょにペンジンで一々消してまわってからあまりしなくなった。

理論的には禁止してはいけない。要求が阻止されると抑圧されたものがいつまでも心に残る。また幼児は愛情を要求している場合とか、先生の注意を引こうとする場合にいたずらをすることがある。しかし幼児は親や教師に権威を認めているのであるから方向転換をさせることは可能であろう。

- 7 幼児のしつけをするに当り、基本的なことは忍耐をもってすることが必要である。幼児はいわば動物的なのであって、それを文化人にすることが教育といえる。あせらないで忍耐をもってすることが肝要である。

禁止的言葉を用いないで、誘導的言葉を用いた方がよい。結論的には家庭との連絡を密接にすることである。

- 8 幼児の自律性について

祖父母と母親だけの家庭の女兒で、毎日のように洋服を着かえてきたり、何をしても興味のつづかない移り気な子をどう導いたらよいか。

私の園でも祖父母に大変甘やかされている女兒が、依存心が強く自分で何もしない。何か気に入らないことがあったり、母親に注意されるとすぐ祖父母のところへいく。

母親がその子をもう少しきびしくしつけようとするとうと祖父母は母親を叱るので母親と祖父母の間も面白くないらしい。

その幼児は典型的に甘やかされて育った性格をそのまま出している。西洋では「母親のエプロンの紐にしばられた子」とかいう。

家庭教育、特に祖父母教育が必要である。

祖母に幼稚園へ参観に来てもらったり、家庭訪問して家庭のみんなとはなしあうことが大切である。

幼稚園や学校に出ても少しもよくならない子どもは、それまでに育ててきた母親の育て方がわるいともいえるので、母親の知性のこもった愛情の不足が原因である。

- 9 躰の一貫的環境構成から考えて、社会、学校（幼稚園）、家庭が一貫性をもって幼児教育を振興させていくように何か組織的に働きかけたい。

- 10 父親の協力について

幼稚園で幼児のしつけをしようとする場合姿勢など注意すると「うちのとうさんこんなにして本をよむよ。」というし、御飯をたべるとき本を読んでいるので注意すると「おとうさんは御飯たべて新聞よむよ。」などという。おとうさんもう少し気をつけて子どもの躾をこわさないようにしてほしい。

11 幼児の社会性を調査する方法として、次のようなやり方がある。

アメリカのパーテンという人が、四十二名の幼児について調査したものであるが朝登園後一時間位の自由時間に一人一分間宛幼児の遊びを観察して、次の六項のどれにあたっているかチェックするもので、一ヶ月継続して記録していく。

- (1) 何もしないこども
- (2) 孤立的なこども
- (3) 傍観的なこども
- (4) 平行的遊び
- (5) 連合的遊び
- (6) 協同的遊び

時間見本法により、この記録を通して個々の社会性を知ることができる。幼児の生活指導に当り、このような基礎的な科学的調査が必要だと思ふ。

12 アメリカのある心理学者が次のように言っている。「行動は言葉よりも雄弁である。」と、深く味わうべきことばだと思ふ。

子どもが父親の模倣をするというのは、ただ単に子どもが父親の性質を受けついでいるのではなく、それは環境の模倣である。

過去に於て遺伝は重視されてきたが、現在ではむしろ環境に重点がおかれている。しかし遺伝と環境は相互に関連しあうものであって、どちらか一方のみによる影響は考えられない。

欲求不満の解消の方法に二つの型がある。

一つは不良行為になることによって解消し、他は神経症になることによって解消する。

同一の条件における欲求不満であっても、かように表われ方が異なる。こういった点からみても、遺伝と環境の二つの複雑な交点にあって、将来の人間の在り方をきめる幼児期こそ教育の必要性が叫ばれるゆえんである。

3 特に指導を要する幼児の取扱いについて

各自が日々心をくばって指導しなやんでいる事例を話しあつて、具体的な指導の方法を研究していくことにする。

1 注意散漫な子ども

絵や製作はよくするが、話をきく時や他の人の歌や遊びを見る時など、どれだけ注意してもおちつきがない。注意すると一時やめるが、すぐ靴下や洋服、エプロンをいじったり傍見をしたりして少しもちゃんとできない。

二年保育の女の子で知能は悪くない。お寺で裕福な家庭、祖母がいて兄弟は上に三人下に一人いる。

家庭に原因があると思われる。家庭はこの子に無関心か甘やかし過ぎたのではないか。

兄弟関係では、家庭の関心がこの子にあまりむけられていないので、家庭人に愛されないで先生の注意をひきたいのではないか。

ほめられることよりも悪いことをする方がよけい先生の関心をひくのでする事がある。

先生が目をかけても一時悪くなることがあっても根気よく少しずつほめた方がよい。

あまり叱ってはいけない。

偏食の傾向がないか、身体が弱いのではないかと考えてみる必要がある。

「先生がそんなことをいわれたの。」「先生にそんないいお話をきいたの。よかったわね。」と子どもの話し相手になる母親になってもらい、子どもが先生のおはなしやお友達のことを母親に話したがるようにしてもらおうとよくなっていくのではないか。

自覚的によくなっていくように間接的なほめ方をして根気よく導いていくとよい。

2 何もしない子ども

返事だけするが絵も描かず遊びもしない。

二年保育の男の子、左ききで食事でも左です。家庭では、祖母がきびしくいいすぎるので神経質になっている。

私の園で遊びも何もしない勝気な男の子がいた。「眠くてできない。」とねたふりをしてはみているので「ぼくだって遊びはよくできるよ。」といってほめながら、その子には無理にさせないで様子を見てみると、できる自信がつくと一しゅに入ってしまうようになり、「とてもよくできるね。」とほめるとよろんでだんだんみんなと一しゅに何でもするようになった。勝気な子にはあまりやかましくいわぬ方がよい。

劣等感をもっている子には、はやくそれをとりのぞいてやるようにやさしくほめてひきだすとよい。あせってはいけないし、何でも上手にさせようとかだわってはいけない。気軽によろんで仲間入りをするようにはげましながら導いていきたい。

3 放浪性のはげしい子ども

四十分位の通園距離を二時間以上もかかっている。道草がひどく朝八時に家を出ても十時過ぎないと園に着かなかったり、どうかすると途中で弁当をたべて午後になってくることがある。帰りも四時に園を出ても六時頃でないと仲々家に帰

らない。

二年保育の女兒で父親はいない。母親は養護教員で伯母の家に同居している。伯母もこの子をよくかわいがるし、この子は人みしりをしないはっきりした子で園へくるとリーダーになって遊ぶほどの勝気なしっかり者である。園へくるのがいやでもないらしく来るとよここんで遊んでいる。途中には特に興味をひくようなものはないが、ぶらぶら店をのぞいたり自動車通行人をながめているらしい。

私は道草をする子どもに父兄と連絡して出席簿をつくり、家を出た時刻、園へついた時刻、園を出た時刻、家についた時刻を記入して根気よく一ケ年続けたことがある。一カ月程で大分よくなったがまた逆もどりをすることもあり、三ケ月程で殆どなおりかけたが、幼児から続けてくれというので一年やり通した。ほめてはげまして根気よく続けるとよくなっていくと思う。

友達と道連れにして往復させたらよいのではないかと意見に、友達の母親から文句が出てやめてしまったとの答がある。

もっと家庭と連絡して母親や伯母に送り迎えをしてもらったらどうか、子どもの気持になってみながもっとあたたかく考えてやってほしい。

園も家庭もその子にとってはマイナスなのであって、往復の道が誰からの制約も受けられないためプラスなのであらうと思うと実にかわいそうである。あたたかな愛情に包んでやりたい。

その幼児には、家庭的不満としては父がいなこと、母の留守勝ちのこと、園にきては友達と比べて自分に注がれる愛情が問題となっている。先生は母代りになってもっと欲求をみたしてやってほしい。

園で友達がその子を監視的にみないように、仲よく遊ぶように先生は注意していったほしい。

4 精神薄弱児と思われる子

五才十カ月の男児、絵は全然まとまらぬ。陰険で内気で何もしない。部屋の走り方もあばれるようで普通児と違っている。人のいうことは聞くが、はずかしがりや劣等感をもっている。何もいわないが、家でも父母にも話を殆どしないそうで、来年学校へ出るのだから家庭でも精神薄弱児といっている。父は日傭で酒乱の風があり、母親も勤めている。弟は普通児である。

児童相談所に相談したら、経済的問題もからんで家庭に不和が絶えないから、家庭環境をよくするのが第一で、知能は次の問題といわれた。

その子が精神薄弱児かどうか先ず見てもらうべきで、父母の問題は第二である。

5 乱暴な子ども

性格のはげしくて何でも一番さきにしなければ気がすまない。乱暴で注意散漫、友だちを叩いたり、石をなげてガラスをわったりする。すぐけんかして友達をい

じめる。

五才の男子で父親のみ、母はこの子の二才半のとき離婚、兄はいるが会社に勤めているので年令的にはなれていて一人子のようなものである。某アパートに居るが、近所でも評判の乱暴者らしい。

それは愛情の問題につながっている。根本は母親がいないという為であろう。四才頃の反抗期というものはあるが、一人子で甘やかし過ぎたのでいつも親分のようになっていたのに幼稚園ではそれができなくて欲求不満が生ずるのである。

乱暴な子には動植物飼育の方へ関心を向けさせるとよい。何か特殊な機会に興味を他の方へ向けさせることができた例がある。

6 仲間にはいらぬ子

皆と行動を共にしないで、いつも一人だけちがったことをする。椅子にこしかけるときも座るときも一人だけ隅に立っている。

おやつを与えてもだまって手にもっていてたべない。ごはんも一しょにたべない。

四才の男の子で家は百姓、父は変人で時々母親と子どもを虐待するらしい。入園後八カ月でようやく少し宛仲間に入るようになったが、どうしたらもっと早くなおるか。

気長に根気よく不安と不満をほぐして親しみをもたせるようにして導いていけばよい。

7 左きき、どもりの子どもをどうするか

右、左どちらでもよいわけであるが、社会生活をしている以上、左は少しみにくい。

毎日の食事のとき、スプーンにして少しでも直すように気をつけたり、他の子と比較させてなおさせる。

愛情が欠けると、左ききやどもりになるといわれている。なおそうしてあまりやかましくいうことは子どもに劣等感をもたせて、

また原因となっていることがある。

小さい子はなおるけれど、来々年学校へ出るような年令の子は仲々なおらないがなおすべきか。

一般に無理してなおす必要はないと思う。他に障害を来すおそれもあるから、子どもに劣等感を抱かせぬように自然になおすこと。

どもりの子どもには常に情緒の安定感が必要である。家庭の人達とも連絡して、本人にはゆっくりいうように気をつけさせて、まわりの人が神経質になって矯正しすぎないようにしてほめながら注意していくとなおると思う。

8 話をしない子ども

母はインテリでやや冷い感じの人で、父は飲食店をしているが病的なほどよく子供を叱る人らしい。四才の女の子

家庭での愛情が足りないと思われるので、先生の方から話しかけたり、遊びの仲間に一しょに入ったり、園のいきかえりにつとめて一しょに道連れになって、愛情を注ぐことに心がけてきたが少しよくなってきたように思う。

話をさせるとき、ただ返事を求めるのではなく、ふだんの話自然にはなし出すような機会と方法をみつけることが大切である。

インテリは子どもを型にはめすぎる傾向があり、却って反抗的、攻撃的になることがある。母親の愛情の表現が子どもにやさしくうけとれないような感じを与えている。

- 9 親の子どもに対する要求水準があまりにも高かった為、その子は人に勝てない以上、自信をもてなくなりあきらめてしまっ て怠け者となってしまうということがあるが、怠け者には二つの原因が考えられる。

(1) 甘やかされて努力することがなくなって怠けるようになった。

(2) 始終「お前はだめだ。」といわれて劣等感をもつようになり怠ける以外になくなる。

家庭の子どもに対する要求水準が、子どもの性格形成の上に大きな問題となる。

10 泣く子ども

五才二カ月の女兒、園で殆ど毎日のように少しのことにも泣いていつまでも泣き続ける。大声で泣くので困っている。

この子の三才のとき、父親が精神病となったので、母親は離婚して子どもと実家へ帰ってきた。祖母はこの子を溺愛し子どものいいなりにするので甘えている。「泣いても叱ってくれるな。父親のように頭にきては困る。」という日頃の生活ぶりが影響していると思うが困っている。

情緒的悩みが影響している。安定していないところへ過度の愛情が加えられるから、泣くより他にない。あまりこちらで神経質になると子どもの方でも神経質になる。

忍耐強く、一貫性をもって、余り気にかけないで指導していくとよい。泣く子どもは祖母からはなす以外に方法はない。

ジャン・パウロという心理学者が「幼児が一年間に経験することは、大学の三年間に経験する以上のことを学びとる。」といわれているように、子どもは大人の生活を模倣しながら自分の生活の仕方をつかみとろうと努力して育っていくことを思うと、如何にこの幼児期の教育が重要かということがわかる。個性もちがいが、育つ環境もちがっている個々の幼児が、心身ともに健かに生い立って幸福な社会人となることをめざして、また子どもを通して家庭の人々にも正しい生活指導を理解してもらい、共に実践していかなければならない。

幼児を導くには、先ず教師自らの修養、教養を積むことが大切で、高い知性と燃える教育愛、しがもそれが深い道義感をもち、つつましやかなものが望ましい。温いにじみ出るような愛情が、子ども達には安定感と信頼をもって快く導いていかれるのである。

参会者一二二名、どの部会よりも多い参加人員をもって、二日間にわたり終始熱心に、また和やかに日々の実践を通しての真摯な研究協議がなされたことは大きな収穫であったと思う。

健 康 教 育 部 会

1. 健康調査をどのようにすべきか
2. 危険防止について学校環境を如何に管理すべきか
3. 健康な学校生活は如何にあるべきか

1 健康調査をどのようにすべきか

健康調査については種、目的、内容（項目の選び方、集計の方法、時期、評価活用）等に分類する事ができるが、最低限度に、是非必要な物から進めて望ましい物にと腹立たない意見の交換を行う方針で研究討議を行った。

各学校では健康調査の実際的な項目について如何ような調査研究がなされているだろうか。其の中で先ず問題となるのは身体検査（定期、臨時）である。

身体検査に就いては計測と、疾病異常の検査が主として問題となって来るが、其の背後に有る環境、生活行動については次の協議題目で討議する事にする。

(1) 計測について

計測に際してはなるべく正確を期すべきは当然の事であるが、今日なお技術上其の他のミスが多くしばしば誤の結果を生じている。しかもこの計測は調査の為の調査となりがちで其の結果が余り有効に活用されていない感がある。

市内某中学校の過去三十年間に亘る統計資料に依ると児童生徒の身長、体重、胸囲の変遷には拾年間置きに大きな山があるとの事である。それは興味ある事実であるが何に起因し何を意味するかは今の処判然としていない。

(2) 身長、体重、胸囲の発育について

○胸囲

都市や町には農山村に比し、形態上狭い胸郭の人が多い事実は、今日迄多くの人々によって指摘せられている処である。

名古屋大学医学部平田博士の研究発表に依ると石川県の女児の身体発育状態は全国的に見て優秀であるといわれているが、それは平均的のことであって、羽咋郡の山間部の児童は其の身長が標準身長に達していないという事は如何なる原因によるものであろうか。此れは矢張り正常な発育を遂げていないからではないか。また一般に、山村の児童生徒は晩熟型であるという事も何か健康教育上意義があるのではないかと取り上げて討議せられた。また此の地方では今だに血族結婚が多くおこなわれているのに起因するのではないかと考え調査してみたが、そのような傾きは見当らなかったとの報告もあった。

発育の標準をいずれに置くかという事は大変むづかしい事である。それはすべて

の児童を理想的な環境で育成するという事は不可能な事であるからである。単に平均値より上廻るか、下廻るかで大体の判断はしているが此の良否とても問題となるものである。

標高の高まるにつれて身長が低くなるが坐高には余り影響がない。結局身長の高低は脚の長さに依って決定するものとみなすべきである。足の短いのは正常な發育をしたものとはいいい難い。短いより長い方が日常生活上よりいって良いのが当然である。

また人間の發育は生活環境（衣、食、住）に密接な關係を有するもので重荷を負って山坂を上下する処ではいわゆる短身となる。

山間の児童達は相当過重な労働が家庭で科せられる為に労働衛生を加味した健康教育が必要となつて来る。此の故に發育期にある児童に過重な労働を負担させる事は正常な發育を阻むもので逆力避くべきである。

身体の發育は遺伝的要素と共に後天的要素により支配される事が大きい。ここに健康教育の重要性が痛感される。

○胸圍の測定法について

これは測定誤差の割合に大きいもので其の實施に當っては入念且熟練を要する。胸廓前後径、胸廓左右径を加えれば胸圍のみならず軀幹部の發育をよりよく知る事ができる。

3 疾病異常（健康調査上どんな項目を取りあげて行くべきか、最も問題となるものから順に討議した。）

○視聴力検査法について

両者共に環境設備に依って多く左右されるものであるからその点の考慮が肝要である。

試視力表はなるべく新しいもので表面の汚れていない事が必要であり、何枚もの表を用いて検査をおこなう場合は試視力表を一定のものに統一して置くべきである。異った表を使用した時には其の結果が異つて出て来る事が往々にして有る。

視力検査装置のない場合は光度二百ルクス以上ない処で検査をおこなってはならない。また検査の時のみ試視力表を貼り不用の時はかたずけて置くべきである。

検査の結果視力が1.0にみえない時直ちに此れを近視ではないかと判断するのは早計であり、かかる児童生徒は努めて更に専門医に依る視力検査を實施することなどが必要である。

聴力検査もまた視力検査に劣らず困難なものである。学校は教室不足で聴力検査をなし得るような静かな部屋が得がたい上に、個々の児童について精密な検査を實施しがたい現状であるから實際に児童に接している担任教師が常に耳の聞こえの余りよくないような注意散漫な児童を選び出し、その者に就いて嚙語法、音叉法等に依って検査した上異常ありと認めた場合は専門医の診察指導をうけるべきである。

視力、聴力の悪い児童の教室に於ける座席については充分の考慮をはらうべきは、

いう迄もない。

○結核対策について

年二回乃至三回のツベルクリン反応検査、BCGの接種、定期的なレントゲン写真撮影等があげられるが、平常の観察が最も大切である。これらの事が結核の早期発見に如何に役立つかは今更いう迄もない。

○腸内寄生虫の対策（主として蛔虫、十二指腸虫について）

金沢市に於いては年二回（五月、十月）寄生虫検査を実施している。

検査法は同一条件の下に、淨遊法、塗抹法の二つの方法でおこなっている。その結果淨遊法での虫卵の陽性率は7.5%、塗抹法では5.6%と出ている。結局淨遊法で実施した方が虫の種類も塗抹法に比して多く出て来るし、百分率の多い処から見ても正確であると判断される。

石川県の山間地帯に於ける虫卵保有率は60. %、海岸地帯のそれは46.0 %位である。保有率40%以上の学校に於いては県教育委員会より一回分の検便代が支給される事になっている。

寄生虫対策としては駆虫剤を服用させると共に日常生活上の指導、たとえば、**手洗訓練、爪切り等の教育**をおこなわなければ効果はあまり期待できない。また駆虫剤の副作用については前以て十分に検討して置くべきである。副作用の少ない薬剤として従来用いられているものには海人草サントニンがある。また検便の結果虫卵を保育している児童に駆虫剤を服用させるは当然の事であるが、虫卵を認められない者にも服用させる事に就いては考えるべきである。

要するに此の対策の第一義は虫卵が体内に入らないように常に注意する事に有る。

手洗いの実行、爪切の習慣づけは最も経済的で簡易な然も適切な対策である。更に家庭の食生活上の衛生的処理も大切な要件である。

要するに駆虫と共に、**先ず生活指導**に重点を置くべきである。

○健康調査としての機能検査について

精神的、身体的機能に分類して考えるべきであるが、機能検査に就いては検査用具、機械が必要なので仲々経済的に実施が困難である。また検査し得たとしても、ただけの事で其の結果の評価活用に就いては困難な実状である。故に結果の処理に就いて適切な指導が望ましい。

子供の健康生活を如何ように指導すべきかは重要な問題である。先ず健康なる習慣形成と理解を如何にすればよいかといえは健康教育を先ず全教科を通じておこなう事が第一で、生活指導に立脚した健康活動をなし得るように少くとも週一回以上健康教育の時間を特設して健康教育を実施する方がより効果があがることは他府県の学校に於ても実証している通りである。

カリキュラム構成上健康問題について各学年毎に児童が各自の健康についてどのような事に興味と関心を有しているかを生徒の話し合いより、あるいは持っている

疑問等に依り担任教師が観察し記録すれば甚だ有効であると思われる。更に地域社会、気候等の相違に依り研究すればなお興味深いものとなる。

最後に健康教育を文部省の指示した枠内のみでおこなうべきか。またはもう少し現実に即応して何か健康に関する特別な教科を設置すべきかは課せられた重要な問題である。

2 危険防止上学校環境を如何に管理すべきか

- ・非常の場合もあるが何といっても子ども達が平生安心して通学できるようにすべきである。その為には校地、校舎、校具などについて考えられねばならない。
- ・学校環境のみでなく、もっと広く考察すべきであると思われるので、社会環境、家庭環境を含めていった方がよいのではないか。
- ・校地の問題などでも教師が長くその学校に住みなれるとその環境に満足して気のつかないことも多い。石ころが多くてもなれてしまって危険なことを忘れている。そこで第三者の観察を尊重し子供の活動の観察、子供の生活を通して指導すべきである。
- ・時期や行事を通して一カ年の安全教育を行うべきだと思いカリキュラムの構成をしてみた。非常時に際しての避難訓練も月に一回以上実施したい。
- ・子供が教室から運動場へ出るとき余り時間がかかるので、広い運動場を持ちながらうまく利用せられない学校もあるのではないか。運動場への距離が長いと遊び時間の関係もあって、つい狭い教室内で遊ぶ傾向になって危険が起ることも少くない。
- ・運動場の管理上、多くの子供が一斉に遊ぶような時間には野球のような広い場所を占有する運動は禁止したい。
- ・冬期などで寒さが増してくると子どもがじっとして居れないのでよく廊下を走ったりすることが多くなるので、教室内の保温を考えてやらなければならない。走って便所にいく子どもの実態をいろいろな点から見てやらねばならない。
- ・下駄箱は非常の場合混雑するので危険である。学校にもよるが、各クラスの廊下に下駄箱や雨具かけを設けるとよいと思うが。
- ・教室の中に下駄箱を設ける場合もあると思われるが、砂が入ってくる点や雨の日などに問題があるのではないか。
- ・理想的には下駄箱を三カ所程設ける必要がある。その為に校舎への昇降口も三カ所つくらねばならない。
- ・危険防止の点から二階の窓ふきなど非常に危いことがあるのではないか。余り古い校舎や設備の不備の校舎では、窓ふきを児童に要求するのは無理である。
- ・とにかく古い校舎程危険防止上一応調査してその対策を考えておかねばならない。否考えておくでなく、計画的積極的に管理を実践しないと大失敗をするものになる。

- 窓などには棧をつけ子どもには二階の窓はふかさないことを本体にし、どうしてもふかす必要がある場合は先生が戸をはずしてからふくようにする。
- 学校内における児童の外傷の多い時は、時間的にも曜日にも山が見られるようで午前十時頃や午後のある時間、それに始業前などが数的に多いといわれている。その時間の監督や指導の在り方を重点的に研究するのも一方法ではないか。児童会の活動や看護当番などを研究してみる必要がある。
- 火気取締については廊下にバケツに水を入れたものを二、三個おくこと。
- 非常訓練は月一回は行うべきで、階上より屋外まで全員が避難し終わるまでの時間は三分以内であるべきである。
- 管理には必ず指導がくっついておるべきであるが、健康管理即健康教育ではない。今まで、健康管理即健康教育と考えがちであった所にあやまりがある。健康教育とは健康指導と健康教科学習とを合せて云うのであり、これ等と健康管理とを如何に関連せしめて、その効果を上げていくかが今後の研究努力を要する点である。

3 健康な学校生活は如何にあるべきか

- 朝早くから午後おそくまで子供の活動時間の大半を学校という集団の中に生活し教室という天井のある部屋で然も机と腰掛という制約を受けながら過すことは発育途上の子どもにとって精神的にも身体的にも大きな影響をもつのは当然で、そこに学校環境をどのように情緒的、健康的にととのえるか。一日の時間の流れをどうするか、それに関連して宿題なども問題になってくるのではないか。
 - 子供達が健康で楽しい学校生活をするためにも寝けるものがたくさんあるが、小学校の子どもの年令が最もやんちゃをしたい盛りで自由にとびまわりたい時代である。そこで自由と寝の矛盾なども考えられるわけである。
 - 寝の上に自由があるのではないか。それで初めて学校での自由が認められると思う。
 - しかし何もかも寝けなければならないと思うと非常に大きな圧迫になる。寝にもその時代の子供の発育年令に応じて無理なくずっと入れる基本的なものが考えられないだろうか。
 - 基本的な寝があってこれを各学年の成長に応じて学習展開の中に入れるべきだと思う。
 - 寝についての考え方、子供を教育していく上に将来社会に出ていく時よく適応できる人間をつくらねばならない。各学年に応じた寝というものがあると思われる。今の学校では、児童の自由を尊重しすぎて寝の面があまり考慮をはらわれていないのではないか。
- 大切なことは教師の行動を通して寝を学ばせる。その為に学校内での教師と児童の緊張感をなくしてやるべきだ。

・躰は大人の冷い要求であってはならない。子供の成長を尊重すべきである。躰は成長しなければならない。基本的躰の最も大事な一年生について、最初の一週間にどのようにしたかの実例を重点的に申してみると

(1) 子どもと早く親しみ不安定な心を除く為に子供達の名前を三日以内におぼえてやる。

(2) だまって手をあげるようにする。これは必要以上の競争心をかりたてない上にも大事なことと思われる。他人に迷惑を平気でかけたり、「ハイ、ハイ」の声で教室内が騒音で終始したりすることは考えてみなければならない。先生の声がしみこんでいんげん気にする。

(3) 遊び用具の与え方として、先ず教師自身が最もよき遊び用具で次が自然物である。

最初は必要以上のものを教室におかないで遊び時間には外で元氣よく遊ばせるようにし、動的な遊び用具を種類を少く数を相当多い目に（少いとけんかのもとになったりする）用意し、あとしまつの指導をする

(4) 子供達よりも出来るだけ先に教師が登校して彼らの来るのを待ってやる。消極的な子供を指導してやる。個別的に子どもの健康観察をする大事な時間である。

(5) 帰りは門の外まで送って出る。そして笑顔でわかれる。

これらの躰の基盤をしっかりおさえて、次に、落し物をないようにするか。手を洗う習慣、便所のし方、外へ出る時には椅子を入れて出るとか次第に発展し成長させていく。

・私の学校では「きょう一日楽しく暮します。」となえる。低学年に於ては教師の行動が問題となる。

・実際に躰は教師の身についたものだけしかできないという感じもするので教師自身の責任を痛感する。

・躰や行動の面で生徒の自治活動を如何にたかめるかが大切でこれが一番効果的であると思われる。

・しかしへたにするといろいろなことを知っている子どもができて実際に言う子どもにならない。自治会などの時には大人も顔負けする程細い事まで気がつくが実行になるとさっぱりという子供が少くない。

・躰は身を通して得られるものでマンネリズムに陥ってはならぬ。現実には即して地についたものがなければならぬ。お互にしていることに責任をもって身につけるところまで喰い下るべきである。

・学校は躰の大事な場であるが、子どもにも親にも先生の気持がわかった上でその協力がなければ真の躰ができない。

・小さい時にうんと躰しておくことが必要で大きくなるにしたがって漸次自主的に

なるようにすすめていくことが望ましく幼児教育が大切である。

- 基本的な躰をしっかりと身につけておくこと、家庭教育で行わねばならない、睡眠時間や便通に至るまで、
- ある程度の設備が躰をつけるのに大切で、教師自身も身についた良習慣があることが必要である。
- 学校としては全職員の躰教育についての関心があって、その上で協力がなければならず、知的なものとしてだけでなく、あらゆる機会を捉えて指導していかなければならぬ。
- 模範的にやっている学校の組織なり方法を研究し、また他の学校にも呼びかけていくことがなければ、全体の水準は上らない。
- 子どもの自治活動を活潑にする為になにか考慮されていることがないか。
- 清掃については優勝旗をつくって奨励している。清掃についてだけでなく他のことについても表彰をしている。
- しかし表彰があるからしっかりと清掃をする。それがなければいけないというマイナスの面が考えられないか。
- ただ単に競争意識のみに止まらず、美しく掃除出来たあとの快感と良習慣の結果から感ずる楽しさを充分味わわせるところまで徹底すればこのマイナスの点がカバーできるのではないか。結果だけを問題にすると確かに危険な方法である。
- よく衛生検査などでも表彰制にしますと、不正な報告ではないかと疑われることもあって時々何の為にしているのかわからなくなることがある。
- 定期的な検査の機会をつくって、その時に清潔について反省し心がけていくようにするのがよいのではないか。
- 躰はある程度始めの段階として強制し、漸次その枠をはずして自主的な面を育てていき身についたものとしていきたい。
- 健康に対する自己評価の必要がある。
- 「宿題と健康」の問題、又一日の学習の流れ、日課表をどのようにしたらよいか。

◦ 低学年の一例（附小竹中学級）

一限 ひとりの時間（健康観察及びかき方図画、リズムの総合）

二限 力いっぱい「学習」の時間

休憩 あそびの時間

三限 力いっぱい「学習の時間」

四限 表現の時間

昼食 楽しい童話とあそびの時間

五限 自由学習「個別」の時間

第一限の「ひとりの時間」は先ず当初の五分程は朝の健康観察をし、次にひとり

で書く時間をつくっている。簡単な一年生向の歌などが中心になっているので早い子は五分程で写すわけでそんな子はその帳面にその歌詞の意味を含んだ絵を書かせます。絵はとても喜んでかくので他の邪處にならないばかりか画材を拡大させる自然なきっかけにもなります。遅い子がそろそろ歌詞を書き終る時分に教師がオルガンでその歌のメロデーをひきます。そして後半はリズムに移行していくわけであるが、歌詞なども中心教科と連関あるものをえらぶと社会科の導入にも役立つわけであります。

第二、三限は精神を集中させて学習させるので算数、国語、理科、社会などの教科が中心となる。二限と三限の間に休み時間を十五分とっている。

第四限は、音楽、体育、図工などを中心とした表現中心の活動的なものを中心としている。

午後はグループによる個別指導にあてている。宿題としては教師側の強制的なものを出さないが、子どもが自分でやった事に対しては、時期を失わない中にみてやるようにしている。

- ・どの教科をどの時間に持ってくれば疲労がより少なくて効果的かということを考えなくてはいけないのではないか。
- ・中心科目は能率のよい二、三限にして、第一限に健康観察をとることが大切で、その方法の中には自己評価も加えていくようにしなければならない。
- ・理想と現実とは一致しないことがある。現在のように沢山の子どもが少い施設を活用しなければならないのだから、特別教室の時間割が色々複雑になってきて理想通りにいかないことが多い。
- ・一限二限の間の休み時間を五分にしている学校もあるが、この時間は子供達にとっての遊びの時間と考えるべきか。単なる生理的なものの用をたす程度でよいのか。
- ・これは各学年によって異なるのではないか。
- ・団体生活には、この休み時間を自由に設けることができないし、結局学校設備の問題にもなってくるので困難である。
- ・どんなに少くとも五分の休みは無理で最低十分はいるのではないか。
- ・休み時間の児童の管理をどうしたらよいか。
- ・学校の過番が行っているところが多いのではないか。

ま と め

健康教育は教科としてはっきりしていないので困難な点もあるが、単なる知識として把握しているのではなく完全に実践に移すように指導すべきである。

明年度の研究協議会も他の会との関係を考え時期、資料を準備する期間を充分考慮に入れて、より実のあるものにしたいと思う。

特 殊 教 育 部 会

問題児について

- イ 問題児とは
- ロ 診断するには
- ハ 指導法について

特殊教育の研究協議内容として大学側は

- 1 問題児とは
- 2 診断するには
- 3 指導について

と一応協議の内容を提案したのであるが、一部の異常児の問題のみに限らず、会員が日頃抱えている現場の問題をどのような角度からでも取り上げ自由に意見を交換し、研究することによって（先の協議内容も包含しつつ）発展して行くことになり、先ず、最初に会員の研究発表を中心にして進出した。（発表要項は梗概を記す）

H児の事例研究

江沼郡那谷小学校 大島敦諭

1章 資料の概要

- 1 H児は六年生で十一才である。
- 2 問題概況は学習に興味がなく注意すればなお反抗する。些細なことに感情を荒げ暴行を働くが平常は独りでこつこつ工作をするが完成したことがない。
- 3 発育について
幼時、消化不良から肺炎になり身体発育不良となる。為に体力を要するものは好まず。好き嫌いが多過ぎ、寝つきも悪く、小便も近い。独り遊びが多い。
- 4 学習面では読書力乏しく、思考推理の意欲もない。協同作業も好まず、図工のみに興味を持つが、完成はしない。
- 5 情緒面では家庭内の不和が本児の落着きをなくし、常に何かに恐れ、あばれる。
- 6 交友関係は極めて悪い。
- 7 家の手伝いを気のむいた時のみやる。
- 8 家庭環境は祖父、祖母、父、母、兄で祖母と母と仲が悪い。経済的には中流で教育には理解がない。
- 9 心理的検査

知能はI.Q七九、クレペリンでは異常曲線向性検査は内向性……（以下略）

2章 診 断

家庭不和から愛情の要求阻止となり情緒不安定を起しそれに劣等感の複合が神経質の素質を強め乱暴を起すものと思われる。

3章 指導方針（略）

4章 指導経過（抜き書き）

四月末日 家庭訪問で陰気な雰囲気を感じず。

五月十七日 教師が近づいてもうちとけぬ。

五月二十三日 図画を賞めたら熱心にやる。

七月九日 先生に認められると思ってか乱暴行為が少くなる。

十月十八日 H児にいじめられる子がいなくなる。

二月三日 暴行をしないようになって二月（以下略）

質疑内容の要旨

指導方針について最も重点を置いたことは、家庭訪問を度々行い、祖父母、両親が児童に対して理解を深め努力するようにたのみ、学校としては絶対に叱らぬようにし、愛情第一に考えて来た。

K.O児の指導事例

県立錦城学園 出口教諭

K.Oは十三才で精神薄弱児であり、家から金品を持ち出し且つ徘徊して家に寄りつかぬという不良の行為により入所した。

家族は父、継母、姉二、義姉二、義弟二で豆腐屋である。

入所時は掃除、作業は勿論ちょっとした用事も手伝わない。衝動的な行為が多く、また落着がなく他人によく妨害する。学習にも熱意を全く欠き音楽と図工に幾分興味を持つ程度。指導方針として次のように計画する。

- ・保母との協力による本児に対する愛情——安定感
- ・集団対集団及び個人対個人との競争——持続性
- ・興味的な教科指導を主体的に取扱う——学習意欲
- ・常に知識を必要とする雰囲気におく——体得
- ・信賞必罰は必ずその場で即座に行う——道徳心

実際指導に当っては学園の指導組織全体を通じて行った。（略）

二年間指導の結果生活能力は九才児級から十二才児級となった。（牛島義友氏「社会的生活能力検査」による）性格、行動面に於ても著しい進歩が見られ特に安定感、人と協力をする。仕事を好む。持久力等の面で著しい学力もかなを二十八字だけ読み書きできたものが、小学三年程度の読みと二年程度の書く能力ができた。また五十迄やとと数える程度より小学四年の初期程度の計算と問題解決能力がついた。

質疑内容の要旨に対して如何に指導したらよいかとの質問に対して、発表者より盗

癖のある子供のほしがるような物となるべく無いようにしておくことが大切だ。なぜならば、盗癖は回数は減じても完治しないと思うからである。また父母と一諸に感情に訴えるように説諭することも非常に効果的である。

普通学級における問題児の指導の一例

金沢市立長町小学校 道下教諭

1 序問題児Hは不良化傾向児でも性格異常者でもなく、どこの普通学級にでも見られる精神遅滞児である。私の学級（五年生）で算数計算の基礎調査を行ったところが四年までの能力のない不振児が六名いた。その中でHが最も不振なのでこの児童を算数教育の面から指導したいと思い取り上げた。

2 H児の実態

家庭環境—父母兄弟の日稼。生活程度下、教育に熱意なし。

身体的状況—発育は普通だが胃腸が弱く非常に小さい。

行動性格—注意散漫、耐久力に乏しく女児にふざける。授業中呼ばれても返事できず。

知能程度—劣等、読みはかなの拾い読み程度、二位数と二位数の加法がやっとである。

3 指導の実際

(1) 指導のねらいとして授業中発言できるように、またその児なりの算数の力によって如何に生活能力をのばして行くかにねらいを置いた。

(2) 指導過程—診断テストによる個人表を作成。加法、減法、乗法、除法、混合算、分数、小数以上をそれぞれ二年より三年四年と系統的に調べ、H児のひっかかっている個所を知り「不振児に対する個別指導記録」によって、つまりきの原因を掘り下げた結果 ※ 加法は基礎が解っているが、数が大きくなると困難度を増して違える。 ※ 乗法は九九の活用不足 ※ 何度もして自信を持たせる ※ カードの使用……等々

4 現在の状況

五年末までに四年までの計算力がつき「やればできる」の自信が発言もできるようになった。算数によって級友の仲間入りができたHの姿は喜ばしいが、これ以上の要求は無理と思い、今後はこの力が実社会に於て利用できるように六年の指導を向けている。

5 今後の指導

国語力も家庭と協力して延ばして行きたい。また学級全児がHに協力し、Hも級の一員として活動できるようにのばして行きたい。

質疑内容の要旨

問題児指導の為に特別な教材や教具を使用したかとの問に対し普通の教材を特に時間をかけ熱を入れて指導することが平凡だけれど大切と思った。また算数で加法、減法の問題は繰上りのところに問題があり除法、乗法では九九の学習不十分が

根本になっていた。

学業と性格からみた環境上の影響

中央児童相談所 山崎指導員

1 何がどのようにして児童にひびいているか、問題児は原因なくして生まれるものではない。原因には二つある。

- 1 生活不安定
- 2 愛情不満

この為に学業を低下させ、性格をくるわすのである。次は本所に問題にした児童である。

事例1 A児の場合は中学一年、I.Q.七三、成績下位でしかも父は戦病死、母、姉と本児の三人である。金沢で就学～三年生、市内転校（四年）大聖寺転校（四年）小松市転校（五年）金沢市転校（五年）そして現在に至る。その間絶えず住居は移動し生活が不安であった。

事例2 B児の場合は小学校五年、I.Q.九六、成績はよくない。両親は健在で姉二、兄一、生活は豊かである。ところが、父が本児に小言をいいすぎるため、児童は自分だけまますのようだという感じをいだき始め、成績不振、性格不良児となった。

2 共通のあらわれとして

- 学習意欲を失っている。
- 無気力である。
- 依頼心が強く、できる事もしない。
- 叱ってもほめても感動がない。
- どんな名言も馬耳東風である。
- 忘れん坊である。
- 計画がない。
- 夢をもたぬ。
- 周囲に無関心である。
- 小心で、僅かなことを非常に苦にする。
- 押切ること努めず逃避的である。
- 悪党にもなり切れず……………善行もない。

3 問題はどこにでもひそんでいる。

良き社会人育成のためにもっと身近な所を見て、問題を早く解決してやるべきである。その為には家庭と学校そして社会が、お互いにクロスして協力することが大切だ。

質疑内容要旨

家庭環境調査の最も良いと思われる方法については、家庭訪問のみでは充分ではない。周囲の人から聞いたり、子供自身についても一緒に遊んだり字を書かせたり作

業をすることによって調査することが大切である。

以上で発表とそれに対する質疑を一区切り、発表に関連しつつ協議テーマに入る。

一、問題児とは

普通学級に於ける問題児を大別して次の三種に分類して考察した。(盲、ろう、肢体不自由者等を別として考えた)

- 学業不振児
- 精神薄弱児
- 社会的不適応児

学業不振児とは知識が高くて学習成績が良くない児童であり、精神薄弱児とは知能の低い児童を指し、社会的不適応児とは反社会的行動の多い児童、即ち盗癖、強情、悪口、反抗心、反道徳的行為等のある児童である。(その他に知能は余り低くないが、社会的環境から学業に欠陥を生じている児童も一応問題児として考える)このような児童は一学級に必ず二～三名いるのであるが、一体この児童達はどのようにされているのか実態であろうか?一例として児童相談所員は問題児を持つ学校家庭に対して次のように考えている。

「児童相談所は問題児の幸福を考えてやる所なのに問題児をとりのぞく役員と思いきや違っているようだ。相談所の性格・機関を学校や一般社会の方々に今少し理解して頂いておれば、問題児は問題児となる以前に問題をなくしただろうに……。」

しかし一方、金沢市では、校長会に於て早くより問題児の問題を採り上げ、人数や性格、実態の把握、指導方法等を常に研究し反省しているような例もある。

二、診断するには

問題児の診断には

- 1 観察記録によるもの
- 2 事例史によるもの
- 3 心理学的検査ならびに身体検査その他

以上の三種類がある。本会に於ては主として第三の心理学的検査を採り上げた。この検査には知能テスト、学力テスト、性格テストがあるが、問題児は知能と関連して環境への適応が困難な場合、その具体的な表現として反社会的行動として現われる性格を重視し、新しい性格テストを紹介して頂いたり、性格と学習面特に図工の場合についての関係を協議した。

問題児に図画(自由描画)を描かせてその結果の分析と精神分析(ゾンディ・テストによるもの)を平行して診断するのも一方法である。客観的診断をした結果は問題児に於ては社会に対して圧迫を強く感じその為の恐怖感は大に現われている。図工教育部会の報告の中にも引用してあるように、父親の盲愛に育った独り息子は父の死後二年目にもなお父への思慕の念を強く「火山の爆発」に現われ、常に競争し圧迫感を受けている友達に絵でメチャメチャにやっつけて喝采し、継母にい

じめられ、父に溺愛されている独り息子は一軒家の中を希望・平和の色と恐怖、不安の色にきちんとぬり分けているし、また、常に美しい富士山（父なる者の象徴）を描く。ふとんを着て寝ている絵を描いた子を調べると母は居なくて叔母さんがいるけれど、あまり可愛がってくれぬから淋しいという。

このように描画・書字・粘土細工等によって子供の欲求や恐怖観念を判断できることが多い。

診断は欲求阻止で問題児をみつける精神分析の考え方、これも一方法であるが、診断方法としては、発達心理、ゲンタルト、精神分析の三つの方法をとりたい。疑問が解決されない時は、客観的な観察が必要である。学習興味などという問題にしても、どんなものに興味がいか、やはり客観的な観察が必要である。

事例研究に於ては、現象面を強調して、主観的な判断が多いのではないか。しかし現場の場合、一人の子供でも良くなって行くと云うことは良いことだと思われる。

ケース・スタディの主観性の問題であるが、問題行動を診断しようとして、一つの問題のみを考察して行こうとする傾向がある。問題行動は複合的な原因が非常に多い。たとえば道徳的な欠陥の児童を診断しようとして、道徳面のみを診ようとするが、これが知能の点と密接な関係のあることが多い。だから種々なテストを実施して、客観的に診断し、最後には必ず観察しなければならない。

しかしケース・スタディの根本は研究すべきで、総合的な診断の適格性が必要なのであって、問題児に対する指導方針を立てるためにも、ケース・スタディはやらなければならないことである。

三、指導について

問題児の道徳行動についての賞罰は現場に於て具体的な事例について、子供の道徳的な感覚を生活の上に現わさせることが大切である。時期を失した指導というのは、余り効果がないように思う。もちろん知能の低い子供が多いようであるが、現場に近い時の指導が効果的であるように思われる。しかし場合によっては時間の経過したあとになす事がかえって効果的のこともある。例えば喧嘩をした場合は興奮がさめてからの方がよい。

盗みはあらゆる子供に現われる現象であって、物の不足よりも、それ以外に原因がもっとある。

子供なりの悩み、不安のはけ口を求める場合もある。あらゆる方面から子供を客観して問題児に陥入らせないように指導しなければならない。これは一例であるが、すべて問題児の指導はあらゆる角度からの客観と長期の観察及び指導の繰返しであり、指導する者とされる者とが一体になって行われるものでなければならない。

以上の記録は協議会当日の話し合いに出た主なものの要約であって、それぞれその一端が出ただけであって、その点を附記して記録を終わる。

特別講演要旨（金大医学部精神科佐竹助教授）

問題児とは、問題を含んでいる性格児であるが、それは同一に教育されることは本人自身にとっても不幸であり、非能率的であり、全体に対しても不幸である。そこで問題児の早期発見により、それをピックアップして治療すべきである。軽いものは単なるいたずらをする程度であるが、潜在的に異常なものをもっていて、近い将来にそれを現わす子供がある。これをいかにして発見し、またどう処理するかは、最近の心理学、特にアメリカの心理学が盛んになっているので、これを科学的に処理することに努めている。殊に最近臨床心理学の発達により科学的メスが向けられている。その中にいろいろな心理学的テスト（精神測定——投影法）が用いられている。

(1) 言語連想 自由連想と刺激語連想とがあり、自由連想法は精神分析学を取り入れたもので、反応語の分析によりその人のパーソナリティを知るのであるが、この反応語の分析ということは難かしいし、また一つの反応語からのみではよくわからない。そこでその後余り研究されていない。

(2) 視覚刺激

イ、ロール・シャッハ・テスト

10枚の無意味図形を答えさせ、その答を分析する。

ロ、T.A.T.（視材解釈テスト）

30枚からなり（男女共通10枚、男10枚女10枚）物語の主人公が外的圧迫によってその結果は内的にどうなるかを見る。即ち物語の分析により被験者が主人公になりきるか、またその他の反応を見るのである。これは大変良い方法であるが、多大な時間を要した、表現能力のない子は適用できない。そこで少数の問題児の診断にはよいが、多くの場合には不便である。

ハ、ゾンデイ・テスト

ゾンデイは現在の心理学に於ける人間は環境によって支配されるという開拓論とその反対の変らないものとする宿命論とのみぞである治療心理学と遺伝論との対立をつなぐ橋渡しをして、人間は変わらないもののの中に於て環境の変化により、変って行くという立場に立つ。従来、意識心理学のよせ集めであったが、これはもっと深く人格に根ざしている。これを基本的欲求といっている。そして従来の意識精神病学に対して欲求精神病学を築くといっている。このゾンデイ・テストの結果の信頼性について議論が出たが、それはテストそのものよりもテストの実施方法の欠陥によるものと結論された。

フランス、アメリカでも紹介されており、歴史は浅いが、広く行われている。これは今迄としては理解し難いテストであるが、これを盲従するのではなく批判しながら用いて行くことにしたい。今迄このテストの基となっている精神分析の批判の為に私はゾンデイ・テストを行ったが、その結果一応精神分析に対する否定的な気持が解消した。

その他視覚刺激テストとしては、シュテルンの「くももようテスト」やローゼンベルグのマンガのテストなどがある。

(3) 表現運動 今日広く行われているもので、表現されたものを分析する。

(4) ブレイドラマ 子供がなりたくないと思う役をやらせ、その際の態度を分析する。またどの役を行った場合にどうであるかを分析する。これは日常生活に近いテストである。

以上四つのものがあるが、現在最も広く行われているものは(2)の質問紙法による視覚刺激である。

最近フランスのツエデックテスト(道徳判断テスト)があり15の仮設場面により人間のパーソナリティの分析をする。これは正か不正か又はその根拠を要求する。正しいと判断するには二つのカテゴリーがある。

(i) 論理的正義判断 (ii) 感情的正義判断

正悪の判断には全人格が必要である。

このテストの答は五つに分類される。

① 道徳的判断 { 総合的道徳判断
 { 感情的道徳判断

② 二重判断 善悪をはっきりわけられない判断

③ 社会的功利的判断—国家主義者—犯罪者

④ 事実認容—自然主義的判断

⑤ 不正判断 非人道的判断

この五つの判断をT.Q.で表わす

$$T.Q. = \frac{\text{道徳判 (総合的道徳判 + 感情的道徳判)}}{\text{二重判 + 社会的功利的判 + 事実認容 + 不正判}}$$
$$T.Q. = \frac{15}{0} \sim \frac{0}{15} \infty \sim 0 \text{ まで}$$

T.Q. 14から2位までが普通であるが、14に近ずくと欺瞞的傾向がある。(76以下は問題となる)

ゾンディ・テストの方法

8人6組の計24人の人の顔の写真の中から各組それぞれ好きな人2人、嫌いな人2人を選び、十回テストする。そして被験者は好き、嫌いを問題とするが、実際は①好きでもなく、嫌いでもない人②好きでもあり、嫌いでもある人を無意識の中に選ばせるのである。

盗癖の人は十回のテスト中、九回まで、それがテストにより現わす。

しかし以上のゾンディ・テストによりすべての診断に頼り切り、それを断言し切ることとは出来ないが、将来もし、それがあっても知れないから早期に治療したらよいと警告することはできる。

これによって、犯罪者類型が作られているが、これらは頭が悪くないが、普通の社会生活が出来ないのである。完全に治ってから再びテストをして見るとこの類型に入っていないことが分る。

特別講演要旨、市村先生（金沢脳病院）

テストにはパーソナリティを反映して且つ参考になるものとして、運動表現の型がとられる。ウイスク積木デザインテストなど信頼性の高いものもある。

モザイクテストは個人テストで1cm～7cmまで黒い正方形七枚の紙を使って自由に模様を作らせる。この分析によりパーソナリティの分析をする。これにより人格の発達と崩壊の状態の分類を次の如くする。

A——最も独創的なもの

B——大小組合せ（独創性小）

C——対称型……………J等AからJまでで、Jに近づくに従って人格が崩壊して、精神病と見られる。グループテストにより問題児の分析をする。これは個人の心の底のパーソナリティの分析でなく、現在のパーソナリティの分析である。ゾンディ・テストとかロールシャッハはいろいろむづかしく、長い期間がかかるが、このモザイクテストは簡単に結果が出る。

その理論を省略して某小学校、高校での実施結果を紹介

・独創性のある作品

形の上からの刺戟と黒色との刺戟に対する反応同じ船の作品でも独創的なものと、そうでないものがある。

また造形力の自由度により、黒と白との利用したものもある。また作品の中には、独創性が強く、そこに無理なものもある。（高校生）それは抽象的になっている。

これは将来問題を起す可能性がある。

ただしグループテストでは、その作った際の本人の気持をきけないので場合によっては個人テストにした方がよい。

このテストに対して、始めから造形意識を持っている場合と、偶然に意義づけした場合とがあるが、後者の場合には異論もある。

精神病の人の入院時から完治した迄のモザイクテストによれば始めはバラバラタイプであるが、最後は普通のものにもどっている。

以上私がモザイクテストを実施した結果、このテストは精神測定の一つでパーソナリティの一面をつかみ、しかも簡単なものであるので紹介した次第です。

国 語 科 部 会

1 読みの指導

イ、音読と黙読 ロ、文学的教材の味わい方

2 作文の指導

イ、題材の発見——特に低学年における——
ロ、作品の処理

開 会 の あ い さ つ

戦後の国語教育は、大きな変革に見まわれ、一時はその形式的な新傾向に押し流されているかと思われる面も見られたが、昨今ようやくその反省から、立ち直りの様子がうかがわれ、進むべき方途も、おぼろげながら見えて来たようであります。この反省から自覚への過程において、なまなましい経験の現場に活躍なさる皆様に おかれては、より一層問題も多いことと存じます。大学と云い付属と云い、教育理論と、規範的な実験をうけもつ者として、いろいろの現場に生ずる問題に対して、残念ながら経験を持たない。理論の独善的なからまわりを喰い止めるための、広汎な現実的経験の不足になやんでおります。又一方、現場に即応した諸経験は、単にそれだけに止まる時、しばしば視界のせまさ、その場主義におちいる危険をとまなっている。この両者が、それぞれに長所をもって助け合い、短所を正し合って、はじめて理論的、実践的教育がなりたっていくものと考えます。本日からの協議において、理論の場、実践の場、その他貴重な経験を基礎に、活潑な発言の中から、汲みとれるすべてを身につけていきたいと念願いたすものであります。問題を抽象的にすらすることなく、一つ一つ具体的にとりあげていきたいと存じます。私共として、ここに提出いたしました問題は、国語教育全般にわたって、そのすべてが重要な問題を含んでおりますが、その中からいくつかを選んでみたわけであります。問題としてとりあげました理由は、後程それぞれ説明があることと存じますが、皆様の活潑な討議を期待し、いづらかでも成果をあげる事ができますよう願っております。

議 題

1 読みの指導

イ 音読と黙読
ロ 文学的教材の味わい方

2 作文の指導

イ 題材の発見
ロ 作品の処理

1 読みの指導 イ、音読と黙読

提案理由説明

音読と黙読は、抽象的に類型的な取り扱い方は、いろいろと示されているが、実際にあって児童の国語能力の面から、また学校の施設の面から、あるいは、地域的、年齢（学年）的配分の点から、どのように取り扱われているか、そして、その結果についての反省から、どのようにあらねばならないかと云う問題への解決にもっていきたいと思う。

・音読と黙読の功罪について

音読が低学年において、正しい標準語の習得のための言語練習の場として重視されねばならないことは云うまでもない。特に地方において、日常共通語に接する機会の少い場合は、より一層重要性を増す。また高学年に進むにつれて、詩歌、演劇などの教材を扱うに当たって、音読がその鑑賞理解、更には創作意欲への発展に資する所は大である。ただこの際国語教育の本旨を逸脱して、特殊技能の習得に終始する。危険性を内包していることを注意せねばならない。

一方音読は、その弊害としていわゆる「ヨミカタ」として、固定化した棒読みを生じ、児童の自由な言語活動を阻害する。一人々々の個性の伸張から、それぞれに社会人への完成に導くための教育の手段として、その個性を失わせ、固定化させる齊読は、やはり原則的には否定すべきであると思う。ただし、低学年における児童の集団心理や、特に発表意欲を持たぬものに、機会を与える意味において、手段的に用いる事は是認したい。

黙読については、その理解の速度と、正確さにおいて、音読にまさること云うまでもない。大人の世界において読みの分野がその大半を黙読に負っていることを考えるならば、黙読の重要性は当然認められるであろう。更に、人間の言語活動そのものの根拠をなす思考作用を育てあげる上からも、考える読み方と云われる黙読は、大きな問題であろう。しかし、黙読はその重要性にもかかわらず、その習得がむずかしく、更に、習得の度合を評価するに当たって、より困難な問題を持っている。黙読の特長とする速度は、正確さを伴ってはじめて長所たりうるのであるが、その正確さは、これを音読か、文字表現によるかのテストを経なければ、期待しえない。また、音読は低学度において特に強調されるに反し、黙読は低学年においては、実施すること自身困難である。この音読と黙読の長所、短所を理解した上で、次は、この学年的展開、使う場が考えられなければならない。そして、いわばこの使う場、学年的展開の具体的実践が、両者の功罪を限定する最も大きなカギなのである。

・音読と黙読の速度と、その学年的展開

音読が、低学年の発音是正の場において、特に価値を有し、黙読がある程度の段階に達して、速度が物を云う時に有効であるとの見解は正しい。しかしそこで問題

になるのはこの両者が、具体的な教育の現場で、児童の能力、環境などの考慮の上にたって、どのように配分され、手段として用いられるかと云うことである。まず、黙読が学習の上に課せられる学年について見ることにする。指導要領では、一学年から二年にかけてすでに黙読が課せられてくるが、果してどんなものであろう。興水氏の調査によれば（二四年度）黙読は四学年から、微音読は三学年からと報告されている。本県においても種々の調査が、それぞれの現場において行われていることと思うが、二年生についての報告では、黙読は五分間位しか実行されず、いつのまにか唇読、微音読やがては音読といった形になって了うとのことであった。また五、六年の速度、内容理解の調査報告もあったが、いずれも黙読が、所期の発達を上げているとは思われない現状であった。勿論、実践の現場は、その個々に就いて異なり、画一的ではありえないわけであるから、まず地域別に、更に学校別に、クラス別に、と云う風に教師にどっての具体的な場の分析調査を行い。その確実なデータの上に、現状即応の配分が、音読と黙読の効果を最も大にする唯一のものであると思われる。おのれのたつ教育の場を、しっかりした分析調査によって、その実体をとらえ、それに適した教育手段をとる事が、最大のつとめであることは、云うをまたない。黙読開始の時期についても、単に与えられた指針に従って、一学年、あるいは四学年と定めることなく、各自が、おのれのたつ環境を理解して、定めるべきである。ただ、何時からはじめるにせよ、児童の能力差は常に不同であって、黙読、唇読、微音読など、児童の可能な段階の混用を許しながら、徐々に進まねばならないと考える。黙読への導入過程と、その発展段階とを画一的に区分することなく、黙読そのものはヨミの究極目標ではなく、手段であることを知って、実践の場にたたなくてはならない。一般に黙読はその速度において、音読の一、五倍乃至二倍と云われている。今回報告された例においては、いずれもこの比率に達していない。

例(1)付属小学校、五年、教科書外の新教材

説明文、時間—3分間（内平均1分）

- 第1回（音読—300位
黙読—500～600位）
- 第3回（音読—270位
黙読—400位）

註 後程数字が少なくなったのは、初めは不用意に行われたが、次回からはその後テストのあることを意識した為かと考えられる。

(2)此花小学校、四年、教科書外の新教材

物語文、時間—音読5分、黙読7分（内平均1分）

- 音読—300位
黙読—600位

註 音読、黙読の五分、七分は、疲労を考慮した為。なお、平均一分の速度は、該当五分乃至七分中、時間的経過に順って差がある。これも調べるべき問題だと考える。

例に示された調査について、調査に採用された教材の内容によってデーターが当りうること、また時間、活字かプリントか、縦書か横書か、などが問題として考えられる。これらは、決定的な類型を見出すことはむずかしく、それぞれのデーター資料として用いるに当って、その基礎となった要因を考え合わせなければならないと云うに止まる。なおこれらの調査において、欠くことのできないことは、単に速度のみを調査目的とすることの危険性である。かならず、対象教材の理解度の調査が併行されねばならないことは、云うまでもない。

・視覚の指導について

ものを読む能力が、ある段階にまで達すると、ヨムと云う活動の分野において、黙読の占める比重は音読のそれにくらべて、遙かに大きくなる。そして、黙読の技術習得が進むにつれて、視読の領域に入ってくる。即ち、我々は通常ヨムと云う活動において、その文字を一つ一つ進ることなく、また漢字においても点劃のそれを見ることなく、或程度のカタマリとして把握する。それが、単語であったり、文節であったり、節や文であったりする差はあっても、少くとも一つ一つの拾い読みをすることはしない。この段階を視読と称するわけであり、能率的なヨミとしては究極的なものである。この視読の段階へ、児童を導入するに際しての考慮すべき問題を考えようと云うのである。まずローマ字教育において、「文字板」を用いて効果をあげていることが注目される。また低学年教材に分ち書きがとられていることも、この意味から考えられたものと思う。また日本語の語法的な組み立て、即ち文法をよりどころとして、文としての統一の仕方や、文相互の接続などが留意されねばならぬ。具体的には、文節意識。文中の副詞の呼応。肯定否定表現。代名詞。接続詞。などの理解が、視読の進展を助ける大きな力となる。また今の日本語は漢字仮名交り文である為、或程度の漢字使用の能力がつかないと、視読の成果を期することはむずかしいと考えられる。

ロ、文学的教材の味わい方

提案理由説明

文学といっても範囲が広い。指導要領には四学年辺りから詩の教材を取りあげているので、四年の諸種の教科書から、詩の例をプリントしてみた。（「川は流れている」「川」「小さな芽」「夜あけ」「べえごま」）これに即して、具体的な討論をつづけたい。一体に文学教材を扱う場合、生徒のマドがどこに開かれようとしているか、またそのマドをどうして開かせてやるかと云うことが、大切な問題である。作品の郷土色、作者の年令、親近感といったことや、作者が大人か子供かなど

の問題、あるいは、修辞上のこと、（たとえば比喩擬人など）また、作品の長さなど、いずれも大切な問題と考えられる。こういった面から、体験を通じて一つの方向にまとまりうれば、これに越したことはない考える。

・文学鑑賞とは何か

文学鑑賞の場において、戦前までは、美しいことばづかいや適切な表現、力のもったことばなどと、いわば修辞上の表現技術の習得に重点がおかれていた感が深い。これに反して、戦後の新教育は、これらことばの遊戯を否定し、内容的な面が強調され、特に生徒自身に即することが要求されているが、このことは、云うにやすく、なかなかむずかしい問題である。文学鑑賞が作者の文学経験を児童自身、追体験し、そこから新しい創作にまで発展していくことが、のぞましいことであっても、本来、芸術体験は個人的なものであり、集団行為としての教育の場における、適切な方法は見出し難いものである。芸術作品の鑑賞は、それに対する共感があって始めて、作品との一体化が実現するといわれる。児童には、その一人一人の中に、それぞれ小さないくつかの小世界をもっている。その児童内部にある小世界の中から、与えられた作品にもられた世界の幾分かが合致したとき、児童は、自分自身の内部に作品との一致点をもつこととなり、これを足がかりとして、より発展的な理解と追体験をもつことができるわけである。この児童の内的世界と、作品にもられた世界との分析から、両者の合致点を発見すること、このことが第一の問題として考えられる。具体的には、それが、主人公に対する人間的な共感であったり、自分達に身近なことばづかいであったり、風土的に共通性を見出したりすることである場合もある。この児童と作品とをつなぐ足場を見出さないかぎり、適切な文学鑑賞への導入は困難となるだろう。即ち文学作品を与えると云うことは、児童自体に対して、全く無関係な新しい経験の注入ではなくして、児童自体の内部世界の新しい発展でなければならないと考えられる。そこで次に、それではどのような作品が与えられ、どのように扱われることが、最も効果的であるかと云う問題が起る。

・教材の扱い方

まず、教材の選び方であるが、考えようによっては、どのような作品でも、その扱い方によって教材となりうる性格をもっていると云うことができよう。しかし、この考え方は、実際的ではない。一般的に云って、文学教材は大きく次の二つに分けられよう。

- 1 伝統的文学作品——大人の手になり、生徒に対して、一種の目標として、掲げられるもの。
- 2 児童の生活の中から、にじみ出て来た作品——児童自身の作品。更には、文学的であるか否かを問わず、生徒の日常生活の中で好んで読まれているものを、一種の手段的な意図をもって採用する。

この二つの考え方は、それぞれ対照的な立場にあり、概して排他的な性格のものである。しかしながら、共に教育的見地からすれば、捨て去ることのできぬ両面であり、両者の適切な配分が望ましいのであるが、むずかしい問題である。前者の立場において、教師の独善的な注入に終わる危険から逃れようとするれば、必然的に後者の立場からする手段方法をかり、その意図する所を借らねばならず、後者の立場に立つとして、人間形成のより高次の発展を望むとすれば、その進路の上に、前者の進路を踏まねばならない。現今の児童中心の教育においては、あるいは生活即応の後者の立場が根柢をなして、伝統的文学の受入れは、児童の生活体験との対比の上に、持ち込まれるのが妥当かとも考えられる。

次いでその扱い方について考えてみたい。いわゆる伝統的文学、大人のつくって児童に与える作品は、本来自由に伸びようとする児童の芽を枯らし、模倣をこととする傾向、類型化をまねくおそれが多い。また社会人としての完成、自主独立の性格への指導を根本とする教育の中にあって、常に新しい創造への留意がなされねばならぬとするならば、未完成の児童に、一種の目標的な与え方は、確かに危険性を有している。殊に低学年においての児童は、作品に接した第一印象（全く未分化であり、突発的であるが）のみが、すべてであると考えられ、これを大人ののもつ既成の文学概念でもって、直接的に矯正することは、間違いであると思う。生徒自身の内部に発した何物かを基礎に、無意識体験を意識させ、できれば、未経験世界への進展を考え合わせるべきであると考えられる。児童中心に考えるならば、内面的に見て、未知の世界にふれると云うことと、生活態度を新しく造り上げていくと云う、この二つの面が、文学鑑賞の作業の中で行われていかねばならぬと思われる。具体的な作業の例として、二、三あげておこう。

- 1 数多くの教材を集中的に与え、大きく経験的にとらえさせる。また異種教材をそれぞれ集団的に与え、比較検討の上で、体験的にとらえる。
- 2 教材を何度でも読ませ、読む調子から感覚的にとらえさせ、次いで個々の表現について考えながら内体験させる。最後に、作品にあらわれた作者の意図を考え、話し合い、反省させる。
- 3 読むことから、雰囲気をつくらせ、絵、押絵などによって、立体的な考えを補い、更に読むことによって、個々の表現に当意させ、これを場面的に構成させ体験させる。次いで、以上の操作を含んで、清音を含みつつ読ませる。最後に総合的な感想を話し合う。読みと考えることとを入り交えて、体験の確かさはかる。
- 4 日常児童の読みたがるもの（たとえばそれが講談、冒険もの、マンガであろうとも）を教材としてとりあげ、その中に児童の共感と呼ぶ何物かを探り出し、その共感に立場をおいて、創作への意欲を導き、その作品から、他の児童作品へと発展させていく。

・文学作品一般について教材の扱い方

留意されるべき点のみを、箇条書にする。

- 1 文学作品を扱う場合にも、内容的な問題を取りあげる前に、文字、ことば、事柄、心と層を追うて進むことを忘れてはならない。
- 2 文学作品は、特殊な才能を有するもののみの所有であってはならず、普遍的にとりあつかわれるべきものである。真に作者の体験そのものの追体験はできなくとも、逸脱しない範囲までの導入はなされなくてはならない。
- 3 文学作品に於いて、その周辺のあつかい方、即ち、作者の履歴、文学史的考え方、などは、作品の理解を助ける為に行われるべきであって、本末てんとうの誤りをおかしてはならない。この周辺の問題から、なお発展させるべき問題が生じた場合には、それを扱う場を改めて考えねばならない。

2 作文の指導 題材の発見（特に低学年における）並びに作品の処理

提案理由説明

低学年の題材発見を持ち出した理由は、戦後の傾向として、絵日記、口頭作文が、強くとりあげられて来たが、これに関しては、マンネリズムに陥って行こうとしている。この際、もう一度検討してみる必要があると思われる。また生活指導に連なる作文の問題として、その時間配当が大きな悩みとなっていると思われる。種々な経験を討議し合って能率的な進め方を見出し度いと思う。

・口頭表現から文字表現へ

まず、付属小学校から実験記録からの試案が提出された。以下項目をあげる。（詳細はプリント）

- 1 作文は一年生の生活がはじまった時から生まれる。
- 2 生活語の記録。生徒のおしゃべりを記録する。
- 3 いたずら帳をもたせる。
- 4 おはなしの会。（口頭作文）
- 5 絵ばなしの指導。
- 6 絵日記の指導。
- 7 手紙で話し合う。
- 8 おはなし帳を育てる。
- 9 記述文の指導。

即ち、1 2 3 の段階は、児童自体にとっては無意識の段階であり、児童に対する教師の態度の問題である。児童に何を書かせるかを考える前に、親近感、安心感をもたせ、どれだけふかく児童の中に喰い込んでいるかと云うことが、大切なことである。一般に児童は、特別に生理的欠陥がない限り、話すこと自体に不自由する筈はない。ただその話す場が、児童の言語活動を封鎖することが多いと考えられる。次いで文字表現の段階に移るに当って、児童は大体において、一学年の前半を終わる頃には、平仮名の習得は完了するものと見られる。所で作文指導の面においては、表現過程と、表現内容の面とが認められ、余り早期の文字指導は、返って児童の表

現内容の発展を妨げる結果となるおそれがあることに留意すべきである。しかし進んだ文字表現の能力をもった児童を手がかりとして、可及的すみやかに、文字習得に実をあげねばならぬ。この音声、文字、両面にわたる基礎的な表現過程を習得した上で、表現内容との関連を考えねばならない。(勿論、表現内容は、表現過程の習得以前にも、自らの進展をもつものであり、この指導もゆるがせにはできない。)低学年の児童においては、大人のそれのように言語活動において、ハナス、カク、等の要素が独自的に分離していない。その為、作文指導においても、話すことと書くこととは、それぞれに分離されるべきものではないと考えられる。単に実用的な意味において、話す、書くと言う能力についての問題ではなく、作文と云う創作活動のワク内においての、それである所に問題がある。何を、どのように、書くかと云う一つ一つのことに對して、児童は自分なりに、何等かの基準をもうけたがる。即ち作文は先生に提出するものであると云う本質的なものを知っている。この隔てを破っていく時に、作文指導の目標があると考えられる。児童にたくましい生活の意慾をもたせ、その中から自己を見出させるように導かれねばならず、更にその児童と教師との人間的なつながりが、問題解決の大きな力となると思われる。

・絵日記の指導

児童は、絵をかきたがる。これは凡てに通ずる性格である。(尤も、環境、能力はどうこれを阻害することがあるけれども。)この絵は児童の気分を中心とした思想絵である、小世界の表現である。単なる平面的なものから、立体的なものへ、更に時間的な推移へと、表現内容が発展するにつけ、児童は単純な絵だけの存在に不満を覚える。そこに断片的な文字表現が挿入されてくる。これが本来の絵日記の発展過程であろう。絵日記の中に、児童は自己の体験の再現を、または創造的な意慾のすべてを燃焼しつくしている。そしてこの燃焼しつくした後に、更に再びそのことについての説明をつけ加えさせているような、現今の絵日記の様相は、本来的な教育目的を失ったものと云わざるをえない。事実、夏休帳などに課せられているそれを、児童達は、絵だけは自発的に書こうとするが、下の説明文は仲々筆を下ろそうとしない傾向がつよい。その結果として、相当に文字表現の能力がついて後までも、この説明的な調子がぬけないようになってしまう。結局、現在の教育の場に利用されている絵日記は、本来の必要性にもかかわらず、その方法において、検討し直されねばならぬ問題を含んでいる。マンネリズムに陥っていると云われる所以も、この辺りに原因があると考えられる。即ち、児童の持つ表現能力が、時間空間的に未分化の表現内容を、適切に表現しえぬ段階において、はじめて絵日記の重要性が認められるのであり、相当に表現能力を具えた後では、弊害こそあれ、効果あるものとは考えられない。この問題の解決としては、やはり、児童の上にかかるこれら能力の段階を適確にとらえることが、最も大切なことではないかと思われる。

・カリキュラム・生活指導との関連

特設時間を設けることについては、可否両論があろう。即ち、意慾的に作文指導

を行う場合には、特設の要を認めず、一方、作文指導に熱意を示さぬ場においては、特設の時間でも設けなければ、実施されないと云うおそれと考えられる。しかし、たとえ特設の時間をもったとしても、その時間内のみの指導でことたれりと思うわけにはいかない。特に、生活指導のコースにのっとって進む場合、時間外の時間を考えないわけにはいかない。これについての具体案を二、三あげる。

- 1 日曜日に定期的に書かせる習慣をつける。
- 2 教師、生徒間の手紙通信を利用する。
- 3 休暇中の工作その他の課題に、その説明感想等の作文をつけさせる。
- 4 他教科の内部に、関連をもたせて、広げていく。
- 5 文集編集などにおいて、集中的に行う。

なおこの際時間外時間を考え、これを押し進めていくと、教師の過重負担となるおそれがある。生徒への愛情と、教育への趣意が、これ等のすべてを超越すると云う考え方も出てくるが、ある意味に於て危険性を持ち、合理的に、能率的にの趣旨を忘れて、観念的な盲愛に陥ることを、特に注意せねばならない。

次いで、生活指導の問題であるが、基本的なコースとして、これを否定するものはあるまい。ただ、生活指導を唱えつつも、生徒自体の生活が根拠となつての生活指導であるべき筈が、いつのまにか、既成の大人の概念でもって、大人の生活を見聞の生活へ、注入しているおそれが多いと思われる。生徒の生活に根ざし、その生活の発展に資せられる為のものであらねばならない。

なお、生活指導、並びに作品処理に関して、林中小学校から、資料提供があり、生徒の内面生活、生徒同志の問題、生徒会の問題などが、連続的に、生徒内部の問題として取り上げられつつ、作文と生活の発展につくされている現況の報告があった。(詳細はプリント)

・作品の処理について

時間の切迫の為、十分な討議に入りえなかった。ただ、作品の処理が、作文教育の本質的な存在性を左右する、大きな分野であることを再認識したことを記すに止める。

社 会 科 部 会

..... 單元構成の方法と吟味

- 1、單元展開に伴う地歴の内容とその取扱い
 - 2、政治経済に関する単元の取扱い
 - 3、教科書の取扱い
-

社 会 科 の 授 業 に つ い て

— 5 年 工 業 の 発 達 —

生活單元か教材單元か

子供の関心から入るべきか、それとも生活から入るべきか。この問題は常に論じられる事であるが、それをはっきり区別していくという事は困難である。單元に応じ、その両面を考えていく事が必要である。

農村で導入の際、子供に作文を書かせ、*「きものを買ってほしい」*などのような事から出発する事が多い。日本の一特に農村の一貧困という問題がそこにあるが、町の子供にどのように認識させていったらよいか。この問題に対しては5年生位では、どれ程の事が話し合えるか問題である。こうなのだから制説が買えないのだ。というような安易な結論を出す事は疑問である。この授業でも大工場で働く人がどこから来るかについて、米の単作地域だという点で止めるか、更に進んで何故農村からそれらの人達がやって来たのかという所まで深めるかは問題である。しかし特徴のある地方の耕作面積を調べるとか、反別の資料から結びついて農村の貧困性はある程度理解できよう。また綴方風土記などに出て来る子供の姿を通して生活の実態を認識させる事もできよう。農村の正しい理解がなされなければ、日本の民主化はおぼつかない。結局のところは、町の子供に農村の実態をみつめさせる事は必要だが、(素材として与えることは必要) 限度をどこにおくかが問題になってくる。とにかく日本の農村の貧困性の問題は学界の大問題でもある。一般はこれを生産力に結びつけ、他は生産関係に結びつけようとする。ともあれ世界一貧乏な農民であることは確かだが、国内的に比較すると、失業者、低廉賃銀労働者が都市にあふれている。都会の小学校の子供に農村の貧乏を理解させるのに反対はしないが、取扱いには手心がいると思う。あまりにしつこくいつて暗い感じを与えることには反対である。

大工場と小工場の比較をする時、どのような意図でするか。授業は子供の観察に基き、年令(若い人と年よりの人)遠近(市内からくる人、県外から来る人)の事から日本の経済という面を一応考えた。この比較について重点をどこに置くかの問題は、やはり工業の発達との関連からなされるべきものである。授業では主として

労力構成の相違という点から取り上げ、これがきょうの時間の中心にもなっていたわけだが、単に県外か市内かではきめ難い。その労務構成の長短をもう少し見究めてやらなければならない。

工業の発達では織物—せんい工業—に重点をおいて行ったのは良く、さきの生活単元か教材単元かの問題もここにある。ここでは手工業から機械工業への転換に重点がある。この工業発達という単元をとり扱ったのだから、経済生活という事を歴史的発達段階の中に捉える事は大切である。故に平面的に取り上げる事はいけない。発達の中にみつめる事によって基本的発達段階というものをはっきりと子供に認識させる必要がある。

具体的な問題として、「働く人」を深く掘り下げて行く意図はよい。工場へ参観にいった子供が、働いている人達自身どんなにして織物が織られていくか知っているのだろうか、単に命じられて仕事をやっているに過ぎないのではなかろうかという感想を書いているのは注意すべき事である。

1、単元展開に伴う地歴内容と取扱い

地歴の共同課題として「基礎的知識について」「歴史より」「歴史意識の問題、学年に適した教材、問題史か年代史か、歴史教育に伴う道徳的なもの」「地理より」「地誌的取扱い方とその意義」が提出され討議が行われた。

問題史か年代史かについては、原則的には問題史にいくべきである。しかし問題史か年代史かというのではなくて、問題史を中心にしての立場から入るのではあるが、実際の取扱い方は年代史になると思う。時代の流れの中に断片的に事象を並べたのでは歴史意義は養われない。歴史学習にあっては問題は問題史か年代史ではなくてそれは歴史意識の問題である。

歴史意識というが、たとえば民主主義をとりあげると、封建時代というものは悪く取扱わなければならない。封建時代にも良い点は勿論あるわけだがそれをどのように学習していくべきか。時代の意義は重視せねばならぬ。ただ過去を無条件に賛美するのは非常に危険で、その為にこそ歴史意識が重要となる。

歴史意識が一番問題になるのは、「私達の生活と政治」あたりからだと思う。政治というものについては、子供会、選挙という身近いものから導入して日本の政治、過去の政治へと問題が進む事になるだろうが、そこに今迄の歴史をふり返るという事が生ずる事になる。歴史の学習にあっては内面的発展というものが必要だが、小学校ではそういうものは直接に理解できるか疑問ではあるが、年代史というものにかなりの重点を置いている。「貿易」とか「交通」というものについての年代史でなく総合されたものとして考えた方がよい。ばらばらの形で頭に入っているものを系統的にするという事が問題になると思う。6年の終りで各時代をまとめるとする場合、二つの方法が考えられる。一つは今まで学習して来たばらばらの事項を一括する方法、たとえば「生活」のうつり変りを中心として年代史的にまと

める、もう一つはまとめる為にそれを 附加的要素を与えるという事がある。しかし生活の問題解決学習という事からみれば、中学校で行っているような年代史というものを特別にやるという必要は認め難く、政治という単元をやっている中に子供に歴史意識が出てくるのでなかろうか。

問題は小学校での問題解決学習の狙いはどこにあるのか、どのように展開させるべきかという事に関係しているわけだが、現在、系統的知識がない、茫然としているという意見をよく聞く。それならばそれを補うものとしてどこでどのようにとりあげるべきか。一方政治、工業、交通等の面にその時代の特色が出てくるわけだが、学童の頭ではそれを統合する能力があるのかどうか。それも問題である。

きょうの授業に県名が出ていたが、そういう基礎的知識というべきものがなかったら、その単元の展開はおぼつかないのではないだろうか。地誌的、また通史的知識というもののない子供に対する単元の展開はどのようなになるものか。そういう諸点を考えてほしい。

最低知識一余り多く教える社会科を直す上に一を分析的に考える必要がある。しかし教科書を見比べて項目が多いから取り上げるという選択方法でなしに内容としてどれが大切なのかというところに重点をおきたい。参考に今出ている7つの教科書で、3つ以上にのっている人物を挙げてみると、3、4年……徳川氏、スチブソン、5、6年……豊臣秀吉、北里柴三郎、高峰博士、豊田佐吉、湯川秀樹、マゼラン、パスツール等がある。また武士時代と今とどのように変わった所があるかという事で半分以上の解答のあったものは、消費一きもの、帯刀、交通一馬、かご、通信一飛脚、教育一寺小屋、政治一藩、士農工商、というところである。しかし何を以て基礎的能力と考えるかが問題で、それは専門科学、教育哲学はもとより教育心理学等によって経験的に実証さるべき事である。そこで何が教育的に基礎能力かを劃一的、又は常識的に簡単に判ずるのは疑問がある。

県名を知っていたからといって必ずしもよい事はない。むしろ知らなかったら地図を拡げて調べるという態度が大切である。また固有名詞というものはくり返される事によって成果がある。地名というものは常識に属するものが多く、地理以前のものだと考える。しかし地理教育とは深い関係があり、特に現在批判をうけているので、地図帳を反復利用して自ら理解されるようにしたらよいと思う。そして索引をひき、地図を拡げてよむ習慣を出来るだけ培うようにしてほしい。地理は新しい学問であり、その対象は現在の姿である。その意味で従来の古い参考書は役に立たぬ場合が多い。最低知識というものは、現在に強く浮び上がってくるもの(新聞やラジオによくのるもの)を大いに考えに入れねばならぬ。10年前には基礎知識として要求されなかったものが現在必要という事もある。

なお歴史では逆行する方よりも、古い時代から学習さるべきである。

新しい地理教育は自然によって影響されているとか、たんにお互に助け合ってめでたしという消極的な事ではなく、いかに自然と斗いどのような生活をきずき、社

会をよりよく改造していつているかにある。地域がどのような生活を営んでおるか、そこにはどのような問題がふくまれているかに中心を置かねばならない。たんに地名や術語の羅列が地誌とはならない。一つのもので、それをとり上げていく時は、地域の問題点を見出していくようにすればよい。地名や術語は小学校では最少であってよい。それから日本を重点にしていきたい。世界はアジアと、欧米の文化地帯位を扱ってよいと思う。今迄のようなアジアを抜き、西洋社会を詳しく取扱った態度は好ましくないと思う。

日本の実状には山積する問題がある。これまでのようにしていくのが社会科の課題である。したがって日本の社会科教育は米国にもソ連にもない問題解決があつてしかるべきである。所に応ずる工夫をする事が社会科の本質であり、いたずらに型に入れようとするが如き考えは大きな誤りである。その場合ただ平面的にみるのではなくて、立体的に観る事が必要なのであって、歴史的観方の必要性は正にここにある。

2、政治、経済に関する単元の取扱い

問題として (イ) 学年に適した教材 (ロ) 時事問題 (取扱い方とその教育者価値) (ハ) 政治教育の目標とその特質について (ニ) 経済教育の目標とその特質についての4題が提出された。一方、附属小学校から出された「私達の生活と政治」の単元があり、先の問題を頭において、この計画を材料として折衷的に討議をする事にした。

附属側から示された3つの重点について、(イ) 武士の社会にさかのぼるか、或は貴族社会に迄さかのぼらなければならないか。(ロ) 現在どのような事が問題となっているか。この事について経済部門に關して一応分っているかどうか。(ハ) それに関連してどの程度に歴史にふれるか。この3つの問題が提出された。これに対する意見として次の事がいわれた。

社会科というものが現在の問題解決にあるとすれば、余り遠くへさかのぼって考える必要はない。今日の社会科はアメリカから入ってきたのだが、この社会科がアメリカで生れねばならなかった所以は以前には余りにアカデミックな体系的知識を子供達におしつけ過ぎたのであり、その張本人が歴史だったのだ。そこで批判が起つて、これでは生きた人間が作れない。社会科の時間にも制限がある。現在の社会科の理解、評価、総合、関係、過程、これらを捉えさすことが大切である。したがって知識とか教材とかいうものは、「学ぶべきものでなくて利用すべきものだ」こうして現在に重点をおく考え方から各科目の枠をとりはずした。しかしアメリカは用意周到で知識を軽んじない、基礎知識というものについては「アメリカ社会科委員会」というものが30年ほど前に徹底した統計的調査によってまとめたものを出版している。とにかく現在の社会科の評価、理解のためには、教師の社会観、人生観の確立ということが問題になる。子供達にはこれらの能力が乏しいから、たとえば単元のまとめには教師の人生観が大きい指導力をもつことになる。なお政治経済的方

面の教育が、もっと十分に行われなければ日本は良くならないと思う。だからこの方面の素養を得るためにお互いにもっと勉強しなければならない。経済史が大切と思う。従来教師はややもすると歴史、地理に力を入れて、政治、経済を軽んじてきた傾向がある。20世紀の人類は形式的なものから、実質的なものへと目指して進んでいるのである。

きのうの年代史と問題史の問題に於ても現在の問題解決という立場から言えばどこ迄さかのぼる事が必要かと言う事である。それは時代史的なものを中心とすれば、場合によって原始時代或は上古に迄さかのぼってもいいであろう。現在の問題解決という必要のためならば、事項にもよるがせいぜいで室町末期頃から入れればよいといえる。この事は2年前の此の会合でも出た意見があるが、この意見は今でも変わっていない。要するに民主主義の対立物は何か、ということである。現代社会が封建的なものを含み、また封建制度の完成は江戸時代の社会であったのだから日本に求むるもっとも典型的な封建制度の成立から大体眺めればよいと思うのである。社会科の主たるねらいは現代生活であることは言う迄もない事である。それが社会科というものである。次に政治と経済の関係についてである。現代は経済が中心だというのは確かに事実だが、然し政治はその経済の目的を行う為には是非通らなければならない過程であって、この経済生活が政治過程として展開されて行っている所に現代生活の姿があると考ええる。

アメリカは中世がない国であるから、せいぜい300年位さかのぼれば大いの問題は解決する事ができる。それが日本との相違とも思われる。だから具体的な単元にしたがってそのさかのぼり方も決められるべきものであって、或る一律の線を引く事は困難である。要するに学年に応じた、発達に応じた取り上げ方によればよいと思う。

次に時事問題について（たとえば内灘問題や松川事件等を如何に取扱うべきか）
事実は教えるが批判はしない。問題のとり上げ方によって生徒に違った印象を与える事になる。教育の中立性という事が望ましい。子供の理解の程度に応じてそれに適する資料を選択する事、及び筋道を教えるだけで結論を出す事を急がぬ事が大切である。

しかし時には教育という面から全く遮断してしまう事も必要である。問題としてとりあげる事が果して学級の中において、更に国民全体に対して切実さを持っているかという事の為に、問題を限定すべきである。学級全体としてその問題が浮び上って来た時は教師のしっかりした認識が必要となる。

小学校において時事問題として取り上げられる時は、やはり年令に応じた教育をするのが本当であろう。高等学校ではカリキュラムに時事問題という独立科目があるが、時事問題に対する批判力はどの程度にならないと芽生えて来ないわけである。その点から社会の雑踏から或る場合は、かばってやるという心づかいも必要かと思う。

社会教育や社会改造はむしろ学級の内にそれを見出していき、学級内に問題が生じた場合にそれを社会的に考え合わすというようにして社会科を育てるべきであろう。

3、教科書の取扱い

ここでは、(イ)社会科という時間に、教科書がなくても差支えないか。(ロ)学習活動の流れの中に教科書を効果的にみていく場合の利用法(ハ)これと関連して教科書の内容の問題(ニ)学習活動の中に教科書の問題がまだ外にならうか。の4問が提出された。

教科書は資料として利用していく。それ故に教科書の選定には資料が豊富に取り揃えてあって、よく利用されるものを選ぶ。また各種の教科書を揃えて資料とする方法がある。

教科書には社会科の本質として執筆者の世界観がおり込まれている。したがって単に統計とか図表という資料を利用するにとどまらず、もっとつっこんで、編集者の観方を教え理解させる事にも教科書の使命があると思う。しかしこの場合、子供に対しての利害という事も考えねばならず、また教科書を子供が批判できるという事も望ましい。故に教科書の選定には非常に大切な問題が含まれている。要は教科書の選択にもっと話し合う機会をもつ事が必要である。

問題意識 目 標 学 習 内 容 資 料 学 習 活 動 時

今金沢市にとってどんなことが大きな問題になっているか
 ○地方公共団体の役割は地方の住民のために仕事をすることである
 3

水害救助、復旧作業はどのように行われているか
 ○政治の上のあらゆる施設や制度の役割は社会生活を合理化しすべての人を幸福にするにある
 8

金沢市役所はどのような仕事をするのか
 ○昔は国の政治が一部の人の意見で行われ一般民衆は参与できなかった
 15

国の仕事はどのような行われるか
 ○身分に区別があつて人々の自由な活動が妨げられていた
 15

武士の世の中であつたか
 ○人々はみな幸福になれる権利をもつて進んでいる
 15

明治の世の中になつたか
 ○社会が進歩するにつれて政治の仕方はだんだん民主的になつた
 8

現在の政治のしくみはどのようなに進んできたか
 ○政治の上のあらゆる施設や制度の役割は社会生活を合理化しすべての人を幸福にするにある
 8

自分たちの町や市でどんなことが問題になっているか
 ○政治の上の組織はよりよい政治のため必要である
 4

学校生活をよりよくするために考えられねばならぬ
 ○私たちは絶えず自分の生活を改善して意義のあるものにするよう努めなくてはならない
 4

(発展) 終 末 展 開 導 入

導入	開	展	終	(展発)
問題意識	目 標 (理解)	学 習 内 容	資 料	学 習 活 動
<p>○私たちの着物は外国にならなくていく</p> <p>○なぜ外国にならなくていくのか</p> <p>○せまい工業はどのように発達してきたか</p> <p>○大量生産のためにはどんなことがたいせつな</p> <p>○大量生産をどうにか</p> <p>○工業をさかんにするにはどんなことに努力したらよい</p> <p>○工業はどんな土地におこりやす</p>	<p>×工業の発達によって衣服の様式が変化してきた</p> <p>×工業の発達には、気候、地勢、資源などの自然資源にまつ所が大きい</p> <p>×工業の方法は科学の発達によって著しく改良されてきた</p> <p>×機械生産の発達には動力の大きい利用のしかたに負う所が大きい</p> <p>×分業が進むほど生活は能率にたなり、他に対する責任も大きくなる</p> <p>×機械生産を活用すれば、人々は厚生慰安や文化活動の余裕をもつようになる</p> <p>×小工場の多い日本の工業には、むずかしい問題がある</p> <p>×工業の発達は、土地の特殊条件により促進されてきた</p>	<p>日本の衣服におよぼしている外国文明の影響</p> <p>日本の風土とせまい資源</p> <p>工業におよぼしている戦争の影響</p> <p>世界のせまい工業における日本の地位</p> <p>工業におよぼしている発明者の力</p> <p>科学の発達と近代工業との関係 (産業革命のあらまし)</p> <p>動力の発達とせまい工業の特色と注意すべきこと</p> <p>厚生慰安に対する工場の努力</p> <p>郷土における大工場と小工場の数及び生産高の割合</p> <p>大工場と小工場とのちがいと問題点</p> <p>日本の工業資源と動力資源</p> <p>日本の主な工業地帯と動力資源</p> <p>日本の主な工業地帯と動力資源</p> <p>日本の主な工業地帯と動力資源</p>	<p>△作文「私たちの着物」</p> <p>△衣服の発達絵図</p> <p>△教科書 (上) P 28 ~ P 46</p> <p>△少年朝日年鑑</p> <p>△社会科地図帳</p> <p>△発明発見物語 (ワット・カートライト・豊田佐吉)</p> <p>△教科書 (中) P 21 ~ P 29</p> <p>△スライド「昔の工業」</p> <p>△教科書 (中) P 50 ~ P 64</p> <p>△産業年表 (資料集)</p> <p>△実物幻燈「紡績工程」</p> <p>△丸益毛織物工場</p> <p>△労働基準法</p> <p>△教科書 (中) P 71 ~ P 81</p> <p>△石川県工業調査表 (県統計課)</p> <p>△市内の織物小工場</p> <p>△既習の諸資料</p> <p>△教科書 (中) P 82 ~ P 89</p> <p>△教科書 (中) P 643 ~ P 7049</p> <p>△社会科地図帳</p> <p>△尾小屋鉱山</p>	<p>1 作文「私たちの着物」を読み合</p> <p>2 日本のせまい工業について調べる (グループ研究)</p> <p>3 日本のせまい原料の着物のうつり変り</p> <p>4 戦前と戦後のせまい生産</p> <p>5 日本と世界のせまい生産</p> <p>6 織機の進歩と発明者の苦心</p> <p>7 せまい工業の発展について本を</p> <p>8 せまい工業と外国との発達をくらべ</p> <p>9 動力の発達についてまとめる</p> <p>10 織物工場を見学する</p> <p>11 流れ作業や働く人の態度を見</p> <p>12 工場の施設について聞く</p> <p>13 見学の感想文を書いて読み合</p> <p>14 大工場と小工場について話し合</p> <p>15 大工場と小工場の割合を見る</p> <p>16 小工場を見学する (グループで分拍してまとめる)</p> <p>17 大工場と小工場との実態を比べる</p> <p>18 せまい工業と日本の将来について話し合う</p> <p>19 日本の工業地図を作る</p>
3	20	6	10	8

◆七番目の目標は特設、他は指導要領から ◆教科書は日本書籍 ◆学習の流れはせまい工業で一貫するように計画した

算 数 科 部 会

1、問題解決の学習について

イ、生活の中の問題解決について

ロ、書かれた問題の解決について

2、教具について

イ、時間・時刻・分数計算・測定・図形などの教材について

1、問題解決についての学習

・提 案 理 由

○第一回（一昨年）には現場からの希望を調査し希望の多い題目について討議したが、今年は学力低下や学習指導要領改訂の問題を検討した結果、重点的な問題として問題解決及び教具の二問題について協議することになった。問題解決の学習については、問題とは何か、またこれの現在の段階に於ける解決策は何か等について(イ)(ロ)の二面から協議して戴きたい。教具については現場の体験を通して考案側や活用側を発表討議して戴き明日の算数教育を前進させたい。

第一日 午前

(イ) 生活の中の問題解決について

・研究授業の中から

★単元「防火週間」防火週間に協力するという意味とグラフによる整理を主な目標として取り上げた。導入には火災の時期、原因、損害について話し合いを行った。資料は子供達が集めたものである。グラフを作成させると棒グラフと折線グラフが多く、面積グラフが現われなかった。これは社会科等で用いられているのになぜ現われなかったかを考えると、面積グラフの意味や良さがはつきりつかまれていることによる。この点を中心として指導を進めた。以上は本時の指導のねらいであるが、単元全体としては資料の集め方、整理の仕方、見方、書き方を指導の中心とした。教科書では国税の調査となっているが、これでは児童の問題意識がうすいと思われたので取り上げなかった。

・整理系統と生活経験について

○生活の中の問題はどのようにして選んだらよいか。生活の中の数理的関係を数理解の道具として用いるのか。生活の為に数理かどうか。これには生活学習なるものをはつきりさせねばならない。

○生活が中心目標となるべきである。現今これが数理解の道具に用いられてい

る傾きが強い。子供の経験の中に数理を織り込んだ生活単元を設定すべきである。

•問題のえらび方

- 数理的なものを中心として選び無駄のないように努める。
- 選ばれた問題が果して子供の問題であるかどうか。教師の問題乃至一部の子供の問題でなからうか、よく考える必要がある。
- 子供の生活もやはり社会に直結している。この意味からも経験や社会の様相を分析し類型的なものを得たい。そして学習内容の無駄を整理したい。
- 子供の生活は算数のみでは解決されない。算数を通して生活を指導して行くところに目的がある。この意味で単元設定には他の教科との関連を考えることが必要である。また問題と数理系を明らかにして一步一步向上を図るべきだ。
- 高学年に於ては生活の意味を広くして間接経験によるものも問題として取りあげるべきだと思う。
- 自主性の養える問題が望ましい。初めは資料を集めたり整理したりする限られた自主性の中より高い自主性をめざしたい。

•教科書

- 生活問題といわれるものに無理やこじつけの問題がないだろうか。二位数の割り算に88株を8人で分担して植えるというのが教科書にのっている。これでは足の踏み場も無いであろう。
- あまり教科書にとらわれ過ぎてはいけない。
- 子供の身近にあるものを如何に生かし、活動して行くかという事だ。
- 別の例で、三位数÷一位数の計算指導に人通りという単元があるが田舎であったためにどうしても二位数しか集まらなかった。

•他教科との関連について

- 社会科で人口という問題を解決する為にどうしても数理が必要となつて算数へ結びついた経験をもっているか。
- 五年生では学校行事や社会のでき事が割合に多く取り入れ得ると思う。
- 数理単元であっても生活から出発することだ。分数、小数の指導でもやはりこのように考えたほうがよい。
- 問題を生む問題を取り扱いたい。即ち内容的に豊富な問題を選び分析して、あるものは理科へ、あるものは社会へもっていき解決したい。
- 遠足という問題を取りあげた時も同じような事が言える。地理的なものは社会科へゆすり、時間とか距離とかを取り扱う。
- 他の教科からも問題をもって来るということは大切だ。単元の構成や展開の時に常に考えなければならぬことで、このためには教育全般の見透しを常につけておくことだ。

・問題意識

- 低学年には問題意識がうすい。興味ある遊戯を主にして教師が意図的に導いて行き満足感を与えることが大切だ。
- 低学年では遊びの場をうまく考えて指導することが大切であり、高学年では遠足、図書館、学校新聞等と結びつけて問題意識を高めて行くことが大切だ。

・ごっこ指導

- ごっこ遊びでたとえばそのねらいが教師の側からは引き算の指導であっても、児童のねらいはそのものではない。引き算をしなければならない場を与えて体験させ、その処理法をえとくさせていく。
- 導入としてごっこ遊びが用いられるが、ごっこ遊びそのもののの中に問題を見出し解決して行くことが望ましい。
- 1年～3年とごっこ遊びが繰返されていてもその内容が高まっていくなのである。
- 1年のお店ごっこは10以下の数の合成分解がねらいではなくして50以下の数の書き方、大小の区別にある。教材の意図するところをはっきり摘んで指導することが大切だ。
- 興味だけでなく必要感を与えて望ましい方向に指導することが大切である。

・問題を持つ子供

- 子供達はあまり問題を持たない。問題を持つ子供に育てなければならない。これには低学年のときから心して指導していく事が大切だ。
- たとえつまらぬ事でも興味を持たせ満足感を与えることによって問題を持つ子供ができる。
- 問題の持たせ方であるが、問題になる問題を選び出させることも大切である。つまらぬ事を問題にしている児童は指導すべきである。

・まとめ

以上で大体悩みの焦点がはっきりして来たし、解決の鍵も見出されたと思う。目を歴史に向けてみたい。数理が生れ、今日の系統が成立するまでに長い期間を要した。それだけに洗練された高い程度の処理法であるわけだ。反面子供達の心的発達過程はかかる数理系統の発達段階に及び難い。けれどもそれが教育であるが故に彼等の生活経験を高めて行くものとして、先人が残してくれた立派な処理法を獲得させねばならない。そのためには児童の立場に立って児等の処理法を見極め、一步一步着実に指導されねばならない。生活指導という生活も学年に応じ、能力に応じて向上するものであり、いつまでも本来の生活にとどまっている事を許されない。ここで問題がはっきりと意識されたのであるが、これが解決策はこの方法論としては現場の教師の尊い努力であることは論を俟たないところである。

第一日 午後

(四) 書かれた問題の解決について

・研究報告

* 書かれた問題解決の実態と指導

金沢十一屋町小学校 堀田 信吉

* 診断テストから見た一考察

金沢味噌蔵町小学校 中蔵 悦郎

・研究発表の中から

発表要項

書かれた問題解決の実態と指導

児童の実態は高学年に進むにつれて、男子の方が考え方が進んでくる。反面女子は徹密な考え方をするようになる。時間、時刻や測定値の問題の成績がよくない。これは主として立式ができないところにある。

対策としては、事実問題の場をはっきりつかませて、条件を整理し、数的に処理する場へつなぐところに重点を置いている。

診断テストから見た一考察

教科書の事実問題をテストした結果からいろいろの収穫があった。名数のついた問題とついていなかった問題では名数のついた問題が成績がよかった。一段階の問題より二段階の問題が成績が良くないのは当然であるが、ここに問題がひそんでいることを具体的につかむことができた。また解答がいろいろに考えられる問題では個々の子供の考え方がうかがわれた。以上をもとにして更に書かれた問題解決の指導にせまりたい。

・名数の処理について

○名数をつけて計算させるかどうかは非常に難かしいが、或る時期までつけさせ後につけさせない方がいい。

○子供が名数を理解してしまった後は $5\text{円} \times 8$ も $5(\text{円}) \times 8$ でも $8 \times 5(\text{円})$ でもよからう。

○三年の九九の指導の折には必ずつけさせるが四、五年ではつけさせていない。

○一人一人の子供の理解の度合いによって名数をつけて指導すべきか否かがきまらと思う。

○ 5×8 と 8×5 の場合は理解の程度の差がいちじるしいと思う。やはり正しい仕方では指導すべきである。

・立式の指導

○ $8 \times 5(\text{円})$ は立式のときは誤りとし、計算のときは 5×8 でも 8×5 でも良いとして指導している。立式にあたっては考え方を順序立てる意味からも $5(\text{円}) \times 8$ を取りたい。

○式は理解を知るものとしてゆるがせにすべきでない。

- 書かれた問題の根本的な指導は立式にあると思う。この意味で立式前の指導は非常に大切である。
- 条件のそろった問題ばかりでなく、条件の多すぎる問題や、条件の不足している問題を与えて考えさせることが大切だ。
- 構造的な図解指導も必要である。
- 低学年では具体物を用いた方が好ましい。

問題の把握

- 同一解法による問題でも数値が大きくなると処理できない場合が多い。これは子供達は経験的なものが主である為数が大きくて抵抗を感じるものだと思う。
- 小松市の調査によると
 - ① 文章が読めないために
 - ② 知識がたりないために
 - ③ 算数の用語、単位等の理解がないために問題の把握が困難になっている。

出題にあたって

- 数の大小、文章表現等による抵抗は案外に大きいものであるから注意すべきである。
- 教師は評価目標にしたがって価値ある問題を選ばねばならない。
- 用語の理解を深めて置かねばならない。「残り」は必ずしも引き算を意味しない。また学年相応の用語を用いるべきである。
- 子供の経験世界に少ない問題でも大人の生活面に現われる問題はやはり指導すべきであろう。
- しかしできるだけ子供の生活に関係あるものが望ましい。
- 書かれた問題と計算について
 - 三、四年の書かれた問題の指導が失敗しやすい原因として低学年に於ける指導の不充分さが考えられる。
 - 書かれた問題が解決されにくいのは、計算に比して指導が少いためではなからうか。
 - 計算に時間をかけ過ぎているように思う。
 - $\frac{1}{8} + \frac{1}{8} = \frac{2}{8}$ という計算が内容的に理解されていない場合は、この種の計算を必要とする書かれた問題はできない。即ち理解されていない計算の単なる反覆練習は意味がない。
 - 計算の意味の理解があってこそ問題解決の場に活かして行けると思う。またこの活かし方の指導が大切である。
 - そのためには単に数を数として指導するのみならず、量的なもの、図的なものに置きかえる思考力を養わねばならない。
 - 問題を言葉として、口頭で表現させてみる事も一つの方法だと思う。また○×

○=△というように数を用いない方法も意義がある。おきかえてみることの修練、用語、約束等の理解とか、解法についての形式的な指導法についても研究すべきである。

- ・問題を理解させる場合、算数的に考えながら読む指導が必要だと思う。
- ・問題を類型化する場合に従来の第一段階、第二段階の問題という分け方で良いであろうか。その他にまだどんな方法があるか。
- ・評価に関して、多方面に渡って指導しても評価の対象としてのテスト問題は素直な問題が望ましいと思う。

・ま と め

書かれた問題を解決する第一の手がかりは、その文章にある。その文章を読みとる力を養わねばならない。それと同時に教師は学年相応の表現に留意しなければならないと同時に数理的思考をより良くするような文章表現に目をむけてほしい。このようにして文章によく馴れさせ、書かれた問題の場から数理の働く場へと子供を導く仕方を研究しなければならない。この底に先人が永い期間を経て作り上げた数学的な処理法の原理がかくされていることを注意しておきたい。ここに合理的なものの見方がある。かかる処理法を児童に味得させるところに算数教育のねらいがあり問題解決学習の真の意味がある。これは単に分数計算をするといった事ではないのである。更にまたかかる処理法を見極めることによって生きたねらいが生じ、生きた問題が生れて来ると思う。単に目の前に現われた問題解決のみが問題解決学習を意義あらしめるものではないのである。

第二日 午前

2、教 具 に つ い て

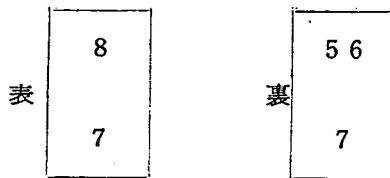
時間と時刻、分数計算、測定、図形等の教材について

・練習のための教具

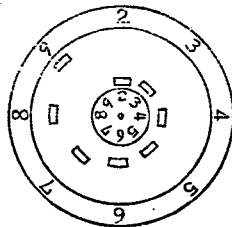
(イ) カード

13—11	25—12	34—23	31—21
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮

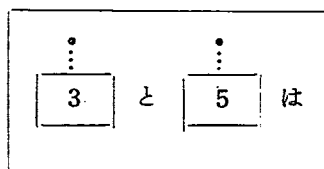
- ・上図のようなカードを、分析した306段階の計算段階に応じて各1枚製作し、これに類似の問題を4枚プリントして各児童に渡しドリル用並びに評価用として活用している。要した費用は10万円内外、ドリルは食後行っているが児等は自主的にやっている。益々改善して行きたい。



- これは岡山の某校で用いられているもので児童二人が向いあって、一方がこれを示し他方に答を言わせる。間違っ た場合はカードの端にチェックしておき、児童の反省、教師の評価に活用する。なおこれで九九の練習も8回で習熟の域に達したそうである。
- 広島大学附属の村井氏は1から9までの数字を書いたカードを数通り作り、この中から二枚をえらび出させては子供達が問題を作り計算練習するように指導している。引き算、割り算練習の場合は教師が指示して無理な問題を除くようにする。
- 山梨県教育委員の矢津氏は穴のあいたケースを作り、その中に数字を書いたカードを入れ、このカードを移動させることによって穴に表われた数字によって計算練習させている。これは計算を教師が指定すれば、加え算にも、引き算にも、掛け算、割り算にも活用され、更に動的操作による興味も加わって効果が上ると思う。
- アメリカのイリノイ大学の研究室で行われているカード学習は徹底した個人指導であって、学校のコースをくずし、問題を分類したカードを作ってその一枚一枚を児童各人が自室で学習し、合格する毎に次の段落のカードを貰って所定のカードを修了すると単位を貰うのである。このカードの特徴は問題の数字を書くところが穴になっていてそこへ任意の数字をあてはめて練習する。テストも教師がその穴へ適当な数字をあてはめて行われるのである。



- 九九の練習教具として次のような大小二枚の円板を組み合せたものを作り、児童各人に製作させて使っているが効果的である。



・上図のように小黒板に釘を打ってそれにカードを掛け、中の文字を変えることによっていろいろの計算練習をさせている。

・カード学習について

・できる子供よりもできない子供が比較的興味を持ってやる。したがって効果的である。

・答を知る工夫としては透明紙を利用するのがよい。重ね合せてすぐ知れるから。

・教具の工夫とともにその使い方が重要である。この生かし方によって練習のための教具でも理解のための教具となることがある。なおまた教具は教師自らが考え、児童と共に作製して行くのが望ましい。どんな簡単な教具でも使い方によってすばらしい効果をあげることができる。更にまた単に図解とか教師のみの教具ではなしに子供達に作らせて製作の場でいろいろ考えさせると理解のために非常に効果的な場合が多い。

・理解は段階的であるから、どの辺でどんな教具を使ったらよいかを考えねばならない。教具を固定すると子供の考え方も固定し、かたよることがある。この故に教具は段階的な動きの広いものを選ぶべきである。

(ロ) 練習帳

* 計算練習帳 長町小学校 宮崎外喜雄

発表要項——

計算を適用する問題解決の場合に、計算の間違いが非常に多いので作ってみた。従来のものと違って各学年でまとめることを止めて、二年～四年、五年～六年と一冊ずつにまとめ、段階を追ってまとめてみた。内容は、練習的な計算→テスト問題→反省、誤りの記入の順に各項目に渡ってまとめてみた。これによって個人的な発達過程に注目して指導法を研究している。

・学年にとじこもらずに、全体的に眺めてあるのは大変いい。このような段階的研究がなされてこそ、児童の位置づけが明確となり、次の段階への向上を約束する本当の評価がなされ得るわけである。

・理解のための教具

・理解のための教具は技能練習のための教具に比べて困難であることは前に述べたが、これはやはり「どのような教具が考えられるか」と「どのように使うか」の二面がある。

(ハ) とけいについて

・とけいは一年から出ているがよい教具がない。どうしても長針と短針が同時に動かないと理解が十分にならない。またとけいの模型は非常にこわれ易い難点をもっている。

・一分が60秒ということを理解させる場合、10進法を身につけた子供にとっては

非常に分りにくいことに思えるらしい。したがってこれがどのように考えられたかを考えさせねばならぬ。また子供達に時間の観念を与える事が比較的輕視されていまいだろうか。教室にぜひとけいをかけたいものである。即ち学習の適切な場を作ってやることが重要だ。

(ロ) 分数理解の教具

・低学年に於ける分割分数は比較的理解し易いが、単位分数の概念は高学年でも不完全である。これは全体を1と見做すこと、更には量としての1と抽象数としての1との間がぼやけているのではなからうか。数計算と量計算とのつながりが分数指導に於いて最も注意を要するところであろう。

・具体から抽象への移り方、導き方について、一定の教具によったのでは、固定化し、かたよった理解の仕方をし易い欠点がある。したがって抽象への過程に充分に理解させる事が最も大切である。この意味で教具もなるべく他のものをつながりを持ち得るものを選ぶことが大切である。

(ハ) 重さ、大いさ理解の教具

・重さ、大いさ等の感覚的なものは指導上難点が多いが、従来、測定値と感覚との指導が不足していたと思われる。もっと具体的、直覺的にとらえ得るような工夫がないだろうか。そのために

(1) 印象の強さをねらってスライドを利用する。

(2) 学習の場をもっと重さ、大いさ等に関係づける。

等により量感を養ってやらねばならない。即ち身近なものとして、たとえば「机、椅子、べんとう」等を利用する。身近かなものに基準をおく事が大切だからといって、それだけに止まってはならない。ただ素地を養うことの重要性を銘記してほしい。

(3) 尺貫法、メートル法等について単位の由来を話してやる。

このことも面白く理解させ易い。

・教具の管理について

・その教室で使う教具はその教室に置く事が最も望ましいが経済的に不可能な状態にある。そのためには子供の工作を利用する。たとえば五年生が角柱、円柱を作ったら、これを三年生位の教室へもって行き空間教材の素地として活用する等。また研究室乃至準備室等で保管するには利用し易いようにビニロンの袋にでも入れて見易くしておく。できるならば算数研究室を設けて、種々の器具を備え、これを学年別に分類して子供達が利用し易いようにしたいものである。

次回に希望の協議題目

1. 低学年の単元学習について。
2. 図形(空間)教材について。
3. 問題解決学習について。

・研究協議題目は上の御希望をもとにして、更に他のいろいろな事態を考慮して定めたものである。

理 科 部 会

-
- 1 簡易な理科実験及び観察を理科の時間に如何に取り上げるべきか。
 - 2 児童の実験及び観察をどう取り上げるべきか。
-

1、簡易な理科実験及び観察を理科の授業に如何に取り上げるべきか

協議問題提出の理由

この協議会をもつに当って、大学付小においていろいろ話し合いをくり返した結果、広く県下の実情を聞き、理科教育の振興にもっともふさわしい問題をと考えたのであるが、諸準備がおくれたため、広く意見を聞きまとめることができず、一方的に上記の如く問題を設定することにした。さて日本の教育も敗戦後ここに数年、文化国家建設の途上にあって、理科教育が益々重大視されてきたことはここに言うまでもないことである。所がややもすれば形式に流れ、観念にとらわれ、伝説にとじこもり、口先だけの理科教育に陥り易いのである。

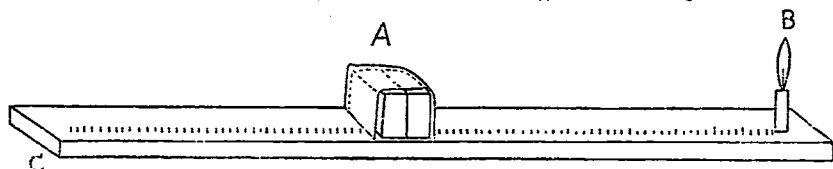
理科教育は、実験観察をもって学習の生命と考えるべきで、実験観察なくして理科教育はあり得ぬとも断言できると思う。ここに取り挙げた二つの問題も、こうした見地に立って考えられたもので、1番は教師実験（デモンストレーション）、2番は児童中心の実験観察の意味をもつものとして本協議会の協議題目として選んだわけである。

授業の反省

○ 授業を実施して

五年生単元「すみよい家」をどのような構成で児童と学習していくかという問題を持ち、すみかの場所、建物の構造、間取りの工夫、風通し、明かるさといった面から、子供なりに文化的な家にするにはどんな工夫をしたらよいかという問題をもった。もちろん「すみよい家」という単元をこうしたいくつかの学習問題に分けて考えさせてよいだろうか。分けるならばこのままでよいだろうかといった疑問が残るのであるが、学習として取りあげる以上、児童が一時間一時間はきりと学習の目標を把握しなければならないので、一応教科書等によって、以上の問題に分けて考えてみた。さて今度の学習は最後の項にあげた、「明かるさ」はどうしたらよいかという段階を学習することになった。ところが児童にとっては「明かるさ」くらい観念的なものはない。理科室は明かるい、体育室は暗いといってみたとところで明かるい暗いの問題はまとまりそうもない。いろいろ児童と話し合ってみたところ、「明かるさ」を計るものを考えてみようではないかとい

うことになり、児童一人一人が作文用紙で「明かるさを測るもの」という簡易光度計を考案した。中には光の角度、影等の問題を取りあげるのや、光と熱との関係を考えるものもあったが、「明かるさ」を計るという問題からは余りにもかけはなれていた。然し中には感光紙を使うもの、日光写真の種紙を利用するもの等立派な考えのものがあつたが、取り上げたのは、第1図のような一定の明かるさをもととして比較によって、計ってみようという結果になった。



第一図

- A スキー用の蠟を立方体にけずり二枚合わせて立てる。(赤のセロファン紙をかぶせる)
- B 蠟燭(なるべく一燭光に近いもの)
- C 目もりをつけた板

この児童が考案した、簡易光度計によると、明かるさを計りたい部屋の明かるさが、一定の明かるさを保つ蠟燭の光からの距離に置換えられるわけである。例えば理科室の中央では、蠟燭から13cmはなれた所の明かるさであり、体育室の中央は43cmもはなれた所の明かるさと等しいことがわかるのであって、一定の明かるさから距離が離れれば離れるほど暗いことがわかるわけである。授業はこの簡易実験器具を使って、理科室の明かるさ、100W、40Wの電球をつけてみた時の明かるさを実測したわけである。

○ 三つの観点

- (1) 実験には二つの目標がある。一つは傾向を見る実験であり、一つは正確に測定させる面であると思う。この実験で児童達にどこまで要求すべきかが問題になるわけである。「明かるさ」が正確に測定でき、正確なデーターが得らるべきか、明かるいか、暗いかが一応数値で表現されて、概念的に明かるさを数値で見ていくという両面があるわけである。データーの正確度を要求するならばそこに当然のこととして、実験器の精密度、取扱い方の技術の優劣が問題となってくるので、時には予備実験、または基礎実験として実験技術の練習が必要となってくる場合がある。基礎実験の指導にはまた項を別にして論ずることとして、データーの正確さを無視することは、実験の意味を半減すると思う。このためには教師は前もってデーターの正確なものを持って指導にあたることが大切である。
- (2) 児童実験はややもすると騒がしくなる。このことは理科の学習に限らず作業を伴う学習においては一般に言われることである。これは小学生を指導する先生は常々なやませられる問題であると思う。第一に児童が問題意識を喪失して

いることである。第二は各自の仕事がはっきり分担されていないため余暇があること、第三はおしつけの実験であって、実験そのものが児童に興味のないためである。その他場所がせまいとか、珍しいとか原因はいろいろに考えられると思うが他面から見ると、学習の進め方ということも問題になる。一齊に教師の号令によって実験を進めていくということも考えられるわけであるが、小学校児童を対象として考える学習では、児童の能力にも優劣があるし、一齊に「試験管を持ちなさい」、「傾けなさい」、「火をつけなさい」と号令しても、一々指示する時間が非常にかかるし、その一つ一つに指導して歩かなければならないということになりかえって学習は遅れ、興味がなくなり、騒がしい学習に終わったにしても、児童は教師の実験の手足になって使われたに過ぎず、むしろ児童が科学的な技術や考えを教えられたことでなく、まじめに教師の指示を待ったという受動的な面の指導に終わるおそれがある。

(3) 児童の発達に従って実験器具(装置)を考えるべきである。(1)項で考えられたように、実験器具はどんなものを取りあげるべきかは重大な意味をもつと思う。特に児童を対象とした場合は、実験器具(装置)の難易は、理解を深めるために大きな意味をもってくる。たまたま珍しい器具が児童の前に並べられた時の児童の異様な目の輝きを見ると、教師は喜んで学習を進めることがある。しかしこれには一考を要するものがある。なぜならば児童は年少であって世界のすべてのものを自分のものにしたいという欲求に燃えている。あるいは自己の立場も考えず、足のかからない高い所へも登ろうとするものである。こうした危険なことを児童が喜ぶからという理由で、高級な学習を進めることは可能なことであろうか。児童が喜ぶから児童の発達に適しているとか、興味があると見てとることがまちがいでなかろうか。こうした不完全な児童観察がやがて学習を進めている内に問題となって生じてくることを我々は時々経験することがある。こうした意味で学習中の実験方法、実験器具(装置)の難易は充分な考慮がはらわれなければならない。

簡易な実験及び観察法

1 低学年用水栽培器具

空瓶にニクロム線を巻き電流を通して熱し後に冷水につけて割り、底部と口の部分とに切りはなし、口の部分をさかさにして重ねる。切り口はやすりで仕上げて危険でなくすると水栽培する立派な用具に使用できる。

2 聴診器

漏斗にゴム管をつけて代用するとよい。

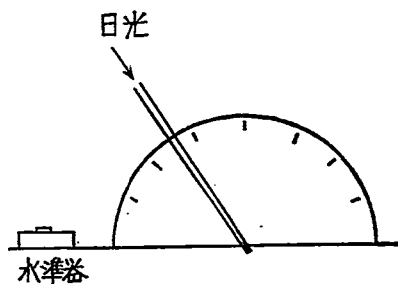
3 蒸気機関の装置

ドロップスの空罐を利用し、口を取り除きかわりにコルクをはめる。コルクにはL字形に曲げたガラス管を通しておけば、蒸気を使用することが容易にできる。

4 鏡の作り方

ガラスを重クロム酸カリ十濃硫酸で洗滌しこれを水で洗い、塩化第一銀をぬる。
凹面鏡や凸面鏡を作るには、とけい皿を利用して内面外面を鏡にするとよい。

5 高度計



オ2図

第2図のように分度器の中心に自転可能の棒をつけ、日光の投射光線に合せて動かすと高度が容易に測れる。

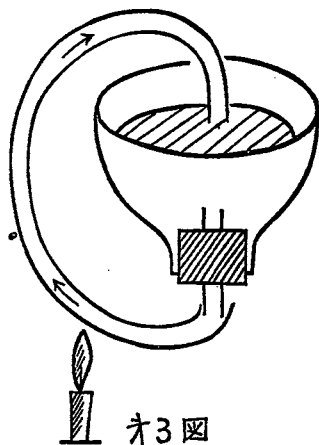
6 グライダーの原理

古いハガキに洗濯ばさみをとおりつけ飛ばしてみる。とりつけ方の位置によって、重心の意味がよくわかる。

7 ハンダづけハンダを粉末にして、塩化亜鉛にとかしておき、使用箇所にくっ

おき、静かにこてをあてるとハンダがとけて簡単にハンダがつく。

8 対流の実験



オ3図

昇汞6g、沃化カリ10g、硝酸銀10gをそれぞれ水100ccに溶かしたものを混ぜ合せ更に56倍にうすめて第3図のような容器に入れる
ガラス管の一部を熱すると熱せられた部分は色を帯びて上昇し、冷えると退色して容器にもどる。

9 簡易ビューレットゴム管の中に入れたガラス玉を指先きでもむと、液が滴下される。 (第4図)

10 メッキの整流器

第五図のような装置をつくと25Vまでは容易に整流される。

11 天体

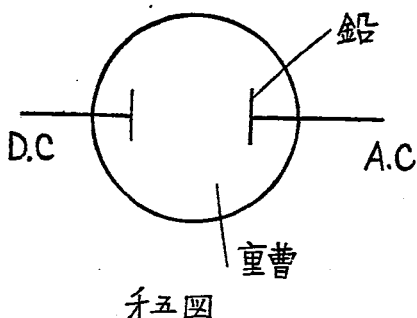
第6図のようにボール紙とピンポン球、庭球の廃品を利用すると月のみちかけのわけがよく観察理解できる。

○簡易実験器具を学習にどうとりあげるか

簡易実験器具に対して教師はどう考えるべきか。実験、観察という言葉からくる感じ方はあるいは教師によってちがうと思う。いかめしい諸準備やものものしい装置がずらりと並べられ、特定の用具が用意されて始めて実験や観察がなされるものの如く考えられ易いが、決して実験や観察という学習



オ4図



千五図

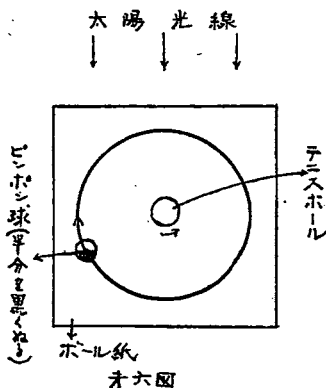
はそうではない。一本の割箸があっても
挺子や秤の原理は実験でき、解剖器がそ
ろってなくても、ナイフとぬい針だけ
でも一応解剖は実施できると思う。まし
て小学校の児童にとってはこうした生活
になじみ深い日用品がむしろ効果的な場
合が多いと思う。こうした意味で簡易実
験器具は、必ずしも方便的な代用品とい
うものでなく、むしろ幼い児童であるが

故に簡易実験器具でなければならぬことが多いと思う。前にもふれたが、実験
器具そのものにのみ関心を傾け、その実験
の本筋である原理の追及ということに身が
入らないで、ただ珍らしく喜んで騒ぎ廻る
ことが多いように見受けられる場合がある。
こうした意味で簡易実験は大いに効果的で
実験器具それ自体は児童自身には何の不思議
も疑問もないわけで、原理の追求には一
段と効を發することを考えられる。

○ 基礎実験をどう取扱うべきか

前項で考えられたように、簡易実験器具
がより効果的に理解を深める大切な学習で

あると共に簡易器具を製作することも大切な学習であると思われる。よく電気モ
ーター等の製作に原理を話し合ってから、わかりましたね。それでは作ってもら
いましょう。と製作にとりかからせることがあるが、我々が児童に模型として製
作させる意味は、電気モーターの意味をわからせるために製作作業を課すのであ
って、児童が熱意に燃え興味をもって製作を続けるならば、その結果としてモ
ーターの原理が理解されてくるのである。大人の頭が考えるように、演繹的に原理
を駆使して応用的に活動するという面が非常に乏しいのである。だから常にその
場その場において適切な指導がなされなければならないことがわかる。今基礎実
験をどう取扱うかという問題になっているが、マッチ1本をする作業、試験管を
もつ、傾けるといった基礎的な技術にしても小学校では大きな理科指導の面であ
って、これをゆるがせにして実験指導はないと思われる。根気よく毎日毎日、て
におはを指導なさっても、三年もかかる国語の助詞のことを考えると、理科にお
いても、基礎実験はもっと低学年の頃から、学習毎に注意をし、またはドリルの
に演習させることも大切なことと思う。要は低学年よりもっと用具を使わせるよ
うな学習を立案し、児童が実験に際して抵抗を感じないまでに日常化するまで指



導しなければならぬ。

設備の実態

別表の如き具体的な一案が提示されて協議された。本案は金沢市理科研究部会の資料で理科室に設備された。児童用机15脚を基準として考えられてある。

頻度とあるは、カリキュラムに依ってちがってくると思われるが、一年生から六年生まで、一年間に何度使用するかを調べ上げてあるわけで、たとえば試験管のところを見るならば、頻度17となっているのは、試験管は年間17回の使用実験観察があるということになるわけで、頻度数の多いことは使用の多いことを意味するので従って利用度が多く、破損も多く補充も考えなければならぬわけである。しかしカリキュラムに立案されていなくとも、一年生のシャボン玉の石鹸をとかして使ったり、虫取りの用器に使うというようにどしどし利用するならばもっと頻度は大となる筈である。必要数は15脚の机に座る児童4人を一グループと考え、15グループが実験するに支障のないように最低限度と思われる数字を出してあるわけで、試験管ならば200本とあるから一グループ約13本は必要であると見てあるわけである。これももっと多いにこしたことはないと思うが、あれもこれも備えたい現段階ではこの数字が一応最低の線ではないかと思われる。現在数、不足数は学校によって異なると思われるが、理科振興法も通過し、いよいよ理科学習を充実しなければならない今は、こうした具体案を各自各学校の実態に応じて立案し、年度を追う事に充実を計らなければならないと思う。勿論この中には備品として一度購入すれば半永久的に保存されるものもあり、備品であるがよく破損するものもある。むしろ消耗品的なものもあるわけで、購入にあたって、どうしたもの、どのように購入すればよいかということになると思う。そこでこの案を見て従来の理科室の設備と大いにちがう点を見い出さなければならぬと思う。たとえば望遠鏡、人体模型、映写機、気象観測機、あるいは蒸気機関の模型等といった、高価で余り利用されない、理科室のお飾りになっているような備品がないことであって、こうした考えは絶対に捨てなければならない。むしろ材料的、用具的、計量器のような絶対なくては実験観察が出来ぬと思われるものを購入すべきである。空瓶や空罐のように廃品を利用できるものは大いに利用しなければならない。また日常大いに気をつけて蒐集しておかないと、いざ必要という場合に、無駄な費用がかかる。また今まで非常に無関心に考えられていた点として、工具は一式どうしても備えておきたいものである。特に簡易実験を意としても工具のないためについ購入して多額の費用を投じなければならぬことになる。

器 具 機 械 類

[illegible]

ぬ	布ぬ	い	ば	袋り	2 3	15 60	0 60	15	ま	ま	き	尺	1	1	1	0
ね	ね	ばり	(移植)		17	30	20	10	ま	豆	球	ソケット	4	30	30	0
の	の	こ	ぎ	り	2	3	3	0	む	虫	か	ご	3	15	0	15
は	ば	け	磁	つ	11	10	10	3	む	虫	し	ね	1	1	0	1
	馬	蹄	型	石	4	15	0	15	め	メ	ートル	グ	8	15	27	0
	針	ハ	穴	板	1	15	2	15		メ	メ	ター	5	15	15	0
			マ		2	5	0	0				器	1	1	1	0
ひ	ビ	コ	カ	16	45	45	0	0	も	物	指	(30cm)	14	30	30	0
	ン	ッ	器	4	15	15	0	0		モ	ノ	コー	1	15	8	7
	光	実	験	2	1	1	0	0								
	火	消	壺	10	1	1	0	0	る	ル	ク	ス	2	1	0	1
	火	一	玉	2	15	15	0	0		る	つ	メ	1	15	5	10
	火	本	簪	10	15	15	0	0		る	つ	ぼ	1	15	10	5
	火	口	針	4	15	15	0	0	れ	れ	ん	結	3	15	15	0
	火	セ	瓶	3	15	20	0	0		レ	トル	台	4	15	15	0
	火	ッ	瓶	8	30	16	14	0	ろ	ろ	う	く	3	15	15	0
	火		ト	10	30	30	0	0	ろ	ろ	う	だ	4	15	16	0
ふ	ふ	い	ゴ	6	1	1	0	0	ろ	ろ	う	と	4	15	10	5
	ラ	ス	ム	1	15	37	9	6	わ	わ	り	箸	8	60	60	0
	分	度	計	4	15	15	0	0								
へ	べ	ン	チ	3	10	0	10	0								
	べ		ル	1	10	10	0	0								
は	捕	虫	網	5	10	5	5	0								
	方	位	磁	6	15	15	8	7								
	棒	ち	石	5	15	15	15	0								
	は	う	う	4	15	15	15	0								

音 楽 科 部 会

- 1 歌唱における発声と表現
- 2 リズム反応の実際の指導法
- 3 器楽指導の進め方

1、歌 唱 に お け る 発 声 と 表 現

1 発 声

以前の唱歌科が音楽科となり、その内容も器楽、リズム反応、鑑賞や創造的表現などという盛りたくさんになってきたが、何といっても音楽活動の大部分を占め、その中心になっているのは歌唱であり、従ってその素材である声を美しくすることは音楽をより高めるために何より大切なことである——などということは今ごろ改めていうまでもないことである。

ところが実際はこの発声はかなり大きな抵抗になって音楽の前進をはばんでいるように見える。たとえば我々の行った音楽の調査をみても、音楽が嫌いだという児童の過半数が発声の困難を訴えているありさまである。もちろんこの中には生れつき美しい声や高い声の出ないものもあるだろうが、我々指導する者の立場からみると、これはあっさり見のがしてはしまえない数といわねばなるまい。更に、毎年こうした調査をくり返していくと、発声が原因で音楽がいやになったという児童の数は年によって多少の差はあるけれども、概していうならばそれは決して減少しつつあるとはいえないことに気づくのである。つまり、我々の発声指導はあまり効果的ではないように思われるのである。もし我々がこの点により適切な指導を加えて発声の困難を取りのぞくことができたならば、歌を楽しみ、音楽を愛好する児童は今よりももっともっと多くなっていくのではないだろうか。

またやや特殊な場面であるが、毎年行われる県下の小学校唱歌コンクールについて考えてみると、ともかくもせいぜい一ぱいの表現であるにもかかわらず、批評には必ず発声の問題が大きく取り上げられるのが常である。ここにもやはり発声指導のむずかしさがにじみ出ているようである。このように発声指導は一般的にみてもよく訓練された児童についてみてもむずかしいことなのである。

一頃よく弱声指導ということがいわれたが、これなども小学校では弱声で指導しなければならないという考えの一方には、あんなに小さな声は子供の自然の声といえるだろうか。第一、活気がない。子供の声はもっといきいきしたものだという意見もあって、実際には必ずしも一致していなかったようである。

ここで指導要領をみると、指導要領は一年生から六年生まで全部が「軽い頭声」

ということばで貫かれているが、この「軽い頭声」という声は決して子供の遊びの中にみられるような、所謂元気のいい声ではない筈である。それではさきの弱声のことかということそうでもない。地声であっても小さく出るだろうし、また裏声も弱声の中に入るのではないかといえる。弱声即ち軽い頭声であるとは決していえないのである。

この裏声と頭声は大へん区別がむずかしくて、我々指導の立場にあるものはよほどしっかりとこの二つを理解していないと、十分な発声指導はむずかしいのではないかと思われるし、逆にこれをのみこんだ場合は非常にりっぱな指導をすることができるようである。その実際の場合をたずねてみると、たとえば金沢市の某校などでは全体の児童の発声の向上をねらい、指導に当っては児童に興味をもたせることに気をつけて、特に

- 1 どなり声を出させないこと。
- 2 はじめは裏声を出させて次第にそれに共鳴をつけさせること。わけても男子にはこの点を強調すること。
- 3 先生や美しい発声をする児童の声の出し方をまねさせること。

などに注意して練習をかさね、十一月に実態調査を行ったが、その結果を四月当初の調査と比べてみると、声が出るようになったので音楽がおもしろくなったという児童が目立ってふえていたということである。また七尾市の某校からはコンクールの立場で、児童にすなおな発声をするようにいったところがまもなく平たく硬い声になってしまったので、また裏声に入ってそこから出なおした。軽い頭声というのはどういう声なのか実際の児童に当てみるとなかなかむずかしく、指導者が裏声と頭声の境界をどのように考えているかが問題であるという苦心談の発表があった。

この二つの指導例は我々に大きな方向を示しているように思われる。つまり、両者ともまず裏声から入り、それに共鳴をつけていくという考えのもとに指導して、両者ともに大きな効果をおさめている点である。このような実際の例をきいた上で、新しく出された音楽指導書の中に「便宜的に小さな裏声でうたわせ、これを手がかりとして頭声を体得させることは効果ある指導法である。」と示され、「一（裏声と頭声は区別すべきものであるが）一裏声は訓練によって殆ど頭声と区別し難いまでにすることができる。」と記されてあるのを見ると、なるほどと納得できるのである。が、さてこの「区別すべき」頭声と裏声とはそれぞれどんな声なのだろうか。

解剖学的には裏声とは遊離縁に空気が当って出るものをいうので、遊離縁が振動して出るのが頭声であると定義づけられるという。平たくいうならば頭声とは共鳴が上部にある声のことである。つまり、頭声と裏声はその共鳴によって区別されるということができよう。ただし、このような定義は人によって多少の違いがあるのは仕方がないし、またそこで大人と子供は同じではない。子供の場合は裏声即ち頭

声と考えてもいいではないかという意見も行われるのである。もともと発声の問題に関する議論というものはこういうものかもしれない。

しかしながら頭声や裏声を定義づけたり、それを説明したりできるということ、頭声が出せる、あるいは裏声と区別してききとり、指導することができるということとは全く別のことである。我々としては言葉の詮索よりもまず実際の児童の発声をきいて、それを手がかりとして本当の頭声というものを耳から学びとり、子供の頭声というものを十分に認識することが何よりも大切なのである。

協議会では発声問題に割当てられた時間の大半を実際の児童の声を批判検討することに費したが、これは紙の上に書き現わし難いので一切省略させて頂く。児童の数は男女各四名にすぎなかったが胸声から裏声を経て頭声に至るいろいろの段階にわたっており、甚だ実際の討議であった。

2 表 現

一曲に担当された三乃至五時間がすんでいよいよ次の曲に入ろうというとき、我々は指導したあとをふりかえるといつも「これでいいのだろうか。」と思わされる。取り上げた歌は遠足の歌であってもなつかしの故郷であっても、子供たちのうたいぶりはどれもこれも同じようになってしまいやすいからである。

表現という言葉は随分広い意味をもっているけれども、結局我々はこれを自己表現と解すべきではなからうか。元来表現と鑑賞とは裏表の関係にあるが、表現が自己表現となるとそのつながりは一そう密接になってくる。心に感じないものは味わうことができないし、また、十分に感じ、味わったものこそ十分に表現することができる道理である。

このように児童の想像力をたかめ、美しさに感ずる心をのばし、更に感じた所を表現する力をつけていくという点から歌唱をながめてみる時、どのようにして感じとらせるか、表現指導はどのようにしたらよいかなど、その取扱いについていろいろ考えねばならない問題があるように思われる。

このような立場から、まず歌詞の取り扱いがあげられよう。その指導に当っては、歌詞の内容を話し合い、その情景を想像し、感情を味わって、それをうたいあらわしていくようにするのが効果的であるように考えられる。

この場合に問題になるのは児童がその歌詞をどのように解釈したかということであろう。もっと極端にいうと、作曲者によってその曲につけられた表情記号などは、児童の解釈によってどのようにおきかえられても一向にさしつかえないものにならねばならないのである。

このような考えに対立するものは、実際に行われている毎日の授業では忠実な楽譜第一主義がとらなければならない。創造はまず模倣することから生れるのではないかという考え方である。けれどもこの考えは児童の興味を軽視する欠点があるというので先の意見から、形の上の模倣は大した意義はないと反撥される。

更に、歌詞を取り上げていく先の考えに曲そのものを取り上げるという考えが対

している。つまり、「春の小川はさらさらいくよ」ということばをきかせなくとも、春の小川の曲には春の小川らしい感じが盛られている筈で、これを取り上げて曲自体の味わいを感じとらせねばならないというのである。曲をきかせてその感じを形や色や線、動作、あるいは詩や文にあらわすやり方は今までにも行われてきたが、たとえばこういったものをそのまま歌へもってこようというのである。

もともと詞と曲は両方とも同じテーマのもとにまとめられたものであるから、所詮は同じところへおちつく道理であるが、この場合考えられるのは日本で作られた歌詞をもっている外国曲である。こういう場合は必ずしも詞と曲が同じテーマを持っているとはいえないだろうし、実際に今の教科書には外国曲が非常に多く、しかもそれにつけられた歌詞は本によっていろいろさまざまで、詞と一致していない曲もまたあるようである。こういう場合にはどのように解釈したらよいかというのがこの考えのなやみである。

こうしたいろいろの考え方に対して、もう一つの意見がある。それは、「児童は歌詞も曲も大ていのみこむだろうが、問題はそれをどのようにして、どのくらいにまで深めるかということにある。音楽のよさ、おもしろさは忠実にうたっていくあの緊張感のころよさ、発想技術の完成のたのしみ、そういったところにあるのではなからうか。「表現」というものはいろいろな技術の一つ一つ習得していく、その中から取り上げられるべきものであろう。」というのが学部教官の意見であった。

2 リズム反応の実際の指導法

1 リズム反応についての話し合い

昭和二十六年、小学校音楽科の学習活動面に、新しい項目として「リズム反応」ということばが、かかげられてから早や足掛三年、私達は、この間この活動面を如何に認識し、実際にどのように指導して来ているか。

教育の現場に立つ者の力は、実際の指導法の研究如何による。この協議題が取り上げられたことは、三年間の歩みの反省として、まだまだ工夫し研究されなくてはならぬものである点、意義のあることであった。

音楽学習に於けるリズム反応を取り上げて研究するとき、他の学習活動と切り離して、これを考えることはできないが、リズムやリズム教育の必要性等、どうしてもその前提となっているものが問題となる。これはこの前の協議会でも話し合われたことであるが、一応具体的な指導例の研究に入る前に、この点を明らかにしておいた方がよいと思う。

先ずリズムについて指導要項を見ると、「ある区分をもった時間の流れの中で秩序ある運動をくりかえすものがリズムである」といわれている。私達は生活の中にいろいろのリズムを感じる。たとえば雨の音や風の音等の自然現象や、また動物の生理現象等にも、あるいは人工的な機械の音にも、動かぬ建築にまでもリズムを感じる。これは人間が精神的にも肉体的にもリズムを感じる本能を持っている証拠だ

と思う。この強弱や長短や音の高低に関係のあるリズムは、私達に自然と美しさを感じさせる。明かるい生き生きとした楽しい生活は、「このリズムに乗ること、リズムを生かしていくことから生れる」という言葉は正しいと思う。人間には元々リズムに対する感覚があるが、よりよい人間の育成には、これを疎かにすることなく、よりよく助成する必要がある。音楽は音を素材とした時間的な芸術であるといわれているが、リズムによって生命を与えられるこの音楽の教育に於いて、リズム感の指導は当然基本的なものである。このリズムの教育は、いろいろの感覚を通して行われるものであるから、音楽科のみでなく、他教科の中に於いて、また日常生活の中に於いて養うよう努めなくてはならないが、特に聴覚に訴える場合は音楽であり、運動感覚に多く待つ場合は体育となり、この二つが、リズム感の指導の主なものと考え、体育と音楽の深い関連を感じずにはおられない。特に幼児や小学校低学年に於いては、これを分けて考えることができない。

では音楽科でいうリズム反応とは何か。これはリズムに対する感覚を練るための学習経験である。これが主として身体的反応の性質をより多分に帯びているためにこのように呼ばれるのであり、これは決して単一に取り上げられるものでなく、他の音楽経験、即ち歌唱・器楽・鑑賞・創作・知的理解の中に於いて考えられ行われるものである。あくまでも音楽的に強調し、拡大し、発展させて行くのが、音楽経験の中に新しく取り上げられたリズム反応である。いいかえると、聴覚を通して、あるいは視覚等を通して慣らされるいろいろなリズムを知覚し、また身体的なリズムミカルな運動としてあらわされる音楽経験のすべてをさすものである。これらはリズム反応ということばでは呼ばれなかったが、以前から既に考えられ、工夫され、指導されていたことである。これが小学校に於いて特に取り上げられたのは、リズム感の指導は幼児や小学校教育に於いて児童に体得させるべきものであるということの強調、再認識にすぎない。

この指導のねらいとしては次の四つが上げられている。

- 一 よい音楽を聞いた時に、湧き起る感情のリズム活動での表現
- 二 リズム型の感得表現能力
- 三 リズム楽器合奏の能力
- 四 音楽技能の習得

このねらいを培うためには、児童の発達段階に応じて、また個性を考え合せた上で、いろいろ工夫すべきである。概して、低学年では身体的な表現が主となり、中学年や高学年に進むにつれて、音楽的な表現の理解体得となってくる。即ち低学年の身振りや動作は、高学年では体育の分野に吸収されて行き、リズム反応は、歌唱・器楽・指導法等、音楽のより高い活動と一体となるものでなくてはならない。

ここで私達は、音楽教育に於ける初歩的な段階にある小学校教育に於いて、リズム感を理解体得させる基礎を養うべき重任を感じる。

そして具体的な指導法の研究を、音楽活動全般を見通しながら進めて行かねばならないと思う。

2 具体的指導法についての話し合い

協議会の研究授業（金大付属小学校八十田教育指導の二年生の音楽学習）にもられた歌唱指導に於けるリズム反応や器楽指導（木琴とリズム楽器）及び楽譜指導等を話し合いの糸口として、特に低学年に於ける活動例が話された。

歌曲に合せて身体表現をさせることは、児童の喜びと興味の中に、曲への親しみも倍加するものであり、この場合、歌詞のみに捉われずに、曲の感じを自由に身体表現させることもよい。また曲に合せてリズム楽器を打つことにより、拍子感を体得させ、児童が興味をもっているこの楽器指導によって、リズム感を伸ばすことができるのである。

ここでリズム型の選択が問題となるが、基礎的なリズムから複雑なリズムへと、児童の心身の発達や学習課程をよく見つめて、よき教材の中からより系統的に抽出して与えて行かねばならない。低学年では音符あそびや電信打ち等というドリル的な遊びも喜ばれ、いろいろ工夫するとおもしろいと思う。

正しい音程の把握と共にこのリズム感の体得によって生き生きとした歌唱が生れる。知的な理解と共に筋肉運動が自由になされるようになると、器楽演奏の技能が進歩する。高学年に於いては、視覚を通して総譜に反応し、聴覚を通してより深く鑑賞させ、又単なる表現のみでなく、精神的な知識も増し、各活動を深めねばならぬ。それには学級の音楽の時間のみでなく、表現会や映画鑑賞等、日常生活の中に美しい音楽をよりよく与えてやるのが大切である。

いろいろなリズム経験の指導法として、文部省から新しく発行された小学校学習指導書音楽編に述べられたものを紹介し、これについて討議した。

- 1、基本リズム
- 2、リズム感の基礎指導（速度感・強弱感・拍子感・節奏感）
- 3、ものまね遊び
- 4、歌あそび
- 5、自由表現
- 6、ダンス
- 7、リズム型
- 8、リズム譜・楽譜・総譜及びリズムバンド

（この八つの指導法については、昭和二十八年十月二十六日発行の指導書にくわしく説明されている。）

リズムは何といっても感覚指導であるから聴覚と視覚との両面を通して、身体的表現の課程を経て、感覚的に体得させ、そして知らず知らずの中に理解体得させねばならない。

それを可能にするよき環境・設備を、私達は工夫し築いてやる必要がある。

以上この問題の協議では、具体的な指導法についての話し合いを期待したのであったが、話は断片的で、実際の指導法に落ち着かず、比較的抽象的な話に終止した感がする。

今後、もっと具体的な実際の経験が、どんどん発表されるように、研究的な指導

経験を積んで行かねばならぬと思う。

3 器 楽 指 導 の 進 め 方

。器楽指導の反省

音楽教育における学習活動の分野が広げられてから、豊富な内容のもとにそれぞれの面から現在行われつつあるわけだが、その中で、最も華やかに実施されたのは器楽教育であろう。それだけにいろいろな難問題にぶつかっているが、今ここで批判を加えたり反省したりすることは有意義なことであると思う。

たしかに器楽教育の進展は目ざましいものがあり、音楽教育における機関車だとまでいわれ、今迄音楽を嫌いだといって振り返ってもみなかった子供達でも、楽器を与えたことによって好きになったという例など、随分聞かされもし、また自分達も感じさせられているが、その他の点についてみても、リズム感の把握、読符指導の点、或は協力して行うことなど、有機的なつながりを持ち、その価値が充分認識されているのである。

その反面いろいろな障害があつて、思うように指導することができないという声も、あちこちから耳にするようになっている。

楽器を揃えることができない。修理することを知らない。あるいはできない。新しく補充しようと思つても経費の点でできない。等々現実に行きづまりを感じているのである。このようなことのために、手をなげだして、従来の歌唱指導のみの音楽教育に逆もどりしている傾向があるのではないかと推測されるのであるが、その価値が充分認識せられ、子供たちも喜んで楽しんで行っている器楽指導というものを、その難点を究明して大いに持続させ発展させなければならない。

。器楽指導の難点とその打開策

器楽指導で一般的に効果をあげているといわれている学校は大抵経済的な条件に、めぐまれているわけで、勿論先生の指導や熱意の点もあるが、反対に条件の悪い、恵まれない学校では、全然手のつけようがなく、器楽指導なるものが行われていない。その差があまりにもあり過ぎるということは考えなければならない問題である。

当日参会された先生方の学校における器楽教育について調べてみたところ、音楽の時間に器楽を取り入れて授業している学校が五〇パーセントで全然していないというのが同じく五〇パーセントであつたが、これらは、すべて資金難のためにできないのである。

また無理をして揃えることのできた木琴や笛、打楽器等、その品質の粗悪なためすぐいたんで使えなくなってしまう。こんな点文部省などでは、もっと厳重に査定して良いものが出るようにしなければ、いつまでたっても心配は去らない。ことに木琴は簡易楽器の中でも最も親しみ易く、価格もてごろであり、またどの児童にも使用させることができるので、結構なものであるが、音がすぐに狂うのと、ばらばらに分解してしまうのが難である。音感を養う上において、このようなことは最も

考えてみなければならない点であろう。

そこでこのような楽器を個人持ちにすべしという意見と、仕方がないが、一応学校に一学級分ぐらひは備えておくべきだとするものとあるが、何れにしても如何にしたら器楽教育を発展させていくことができるかという点で全く一致している。個人持ちは、自分のものであるから勿論大切に扱い、使用時間も共有のものに比べ少いために、いくらか前記の欠点を補える。

けれどもどの児童にも持たせるというわけには経済的な問題でできないので、どうしても学校で備えつけておかなければならない。

けれども学用品として個人持ちとするのが理想的なのである。

田舎のある学校の例をあげてみると、勿論この学校も農村の片田舎で楽器等あるはずもなく、学校備品として少しばかりあったが、ハーモニカは共有にするわけにはいかないので、何とかよい方法がないものかと思案したあげく積立式の貯金をはじめて個人持ちの楽器を買う計画をたてた。毎日本円か二円位の金を学校へもってきて貯金し、半年もするうちに、少数ではあるがハーモニカを買うことのできる児童ができたはじめ、今では三分の二ぐらゐる児童が自分の楽器を持つことができるようになったということである。もちろん持っていない児童には充分な認識をもって当るべきは当然であるが、これなども一つの方法として面白いと思う。

以上のように器楽教育に於ては教育以前の問題がまず解決されねば実施できないという大きな障害がある。したがって教師自身の熱意でもって障害を打破し、子供たちの喜ぶ器楽指導を特定の児童や学級のみでなく、全体の子供達の立場に立って進めていきたい。

・具体的な指導法

器楽の指導には、二つの面が考えられる。一つは週二時間の音楽の時間における指導と、それ以外の時に、特に放課後や課外に行うクラブ的な器楽指導である。

全体の児童を対象として正規の音楽の時間に器楽指導を如何にとり入れていくかという問題がまっさきに考えられなければならない。

器楽教育則合奏という考え方はあやまりで高学年等で一つの器楽曲を立派に合奏してみようとする時には実に大変な時間と労力とを必要とし、また週二時間の授業時間を全部これに当ててもなお追いつかないことが多いのである。

器楽教育は音楽教育の一部分に過ぎないのに、このようなことばかりしておれば他の面の活動ができなくなるのは当然であり、器楽指導をどの程度に重要視すればよいのかはつきりさせておかなければならない。結局我々は音楽の指導を行うのであり一般人も児童も音楽を楽しむのである。したがって一つのものを実際に行う時には、それをいろいろな活動の面から眺めそれらを常にかみ合せていかなければならないのである。音楽の本当の力のつかなかった過去のことを思う時、いろいろな楽器を使用して視野も拡大し今迄あげられなかった効果をより一層あげ学習意欲を増進させ自分でわかるような子供を期待するのである。他の学習活動との関連にお

いて器楽指導をなすという単純なことであるが行うに難いこのことを今一度念願にきざみつけなければいけない。

楽器の揃っている学校や環境のめぐまれた学校の児童たちがよくコンクール等で優勝する。演奏曲目も随分と思われるような難曲を撰択してあるので他の学校の教師は益々器楽教育というものをむずかしく考える。しかし週二時間の授業時間では絶対そんな高度のものができるはずもなく、それらはすべてがクラブ的な活動なのである。それでは授業時間の器楽指導は、どの程度にすればよいのかが問題になるが、一応文部省の評価基準を考慮におき、各学校や個人に応じたものを学校ごとに持つことが必要である。

大体の限度としては低学年（一、二年）ではどこまでもリズムを主体的にとらえさせる意味に於て打楽器、リズム楽器を主としリズム譜などを上手に演奏できるようにする。中学年（三、四年）では、低学年の基礎の上に立ってハーモニカ、木琴等の旋律楽器の指導を加える。高学年（五・六年）では以上の外に、各自持っている楽器を有効に使用し、アコーディオンやバイオリンなど、あるものなら大いに使用する。こうして教師自身或は児童たちの編曲になる歌唱教材の変奏曲形式位のを演奏できるようになればよいと思う。そして一カ年に二・三曲位合奏する程度が最も普通に考えられるところである。

結局あくまで基礎教育なのであり専門的な考え方は排すべきで、教科書にあるものを広く理解させ、余裕があれば更に進めていけばよいのである。

その他器楽指導を行い易くするためには読譜力をまず養成することが最も大切でありこれなくては折角の器楽もいきづまりになること。この読譜力は有機的総合的順次的に行わなければならないことが大切である。その上楽器に対する態度と、しっかりした基礎を最初に十分に教えないければならないこと、小学校の児童に適する旋律楽器がもっとないものであろうか、代用楽器の考案もしてみなければならぬ、等々痛切な問題が数多く出されたが、これらはみな今後共大いに研究し実験してみなければならぬ問題である。

・今後の進め方は如何にあるべきか

器楽教育を盛んにするにはまず他の先生方全体の理解と協力がなければできないのであるから先生方の関心を高めることが大切な点である。ある学校では先生方のみの合奏の会をもって大いに音楽している処もあると聞いているが、これなど大変結構なことである。

また音楽の会合になると男教師の出席はいつも数える程であるが、これなども県下のレベルの低い原因にも考えられるが、この点男教師がもっと出てほしいと考えるが、それに合せて女教師自身もっと積極的に頑張らなければならない。この問題に関連して、教員養成の教育学部で石川県下の将来を考えて大いに音楽のできる教師を数多く送り出してもらわなければならない。

文部省から今度新しい合奏の本一・二・三・四と四巻刊行されたが、従来の教科書のみでは器楽指導においては何かと不便でもあり、また曲目も少いので、先生方の要求もあり出されたものと聞いているが、これなど大変結構なことであるが、現実において、この合奏の本を使用できる学校がどれくらいあるだろうかということを考えてみると、それ以前の問題で何とかしなければならない点があるのではないかと考える。したがってそれぞれの学校の事情において取りあげてみたいと思う。こだわる必要はないと思うが、クラブ活動などでどしどし演奏してみることなど望ましいことであろう。

他県の音楽教育の実情と本県のそれとを比較してみる時予算の面、あるいは人事の面などで随分おくらしているということがわかる。この点教育委員会の中にも音楽に理解をもち協力を惜しまない人が是非必要である。音楽方面の指導主事をおくことも大いに考えてもらわなければならない。京都では声楽の方面と器楽の方とにそれぞれ一人あて指導主事があると聞いている。この点我々は音楽教育の最低の基準を示して上位にある人達の啓蒙につとめねばならない。

以上のように器楽教育のみを論じてみても実に多くの難問が山積しているのである。たゆまぬ教師の意志と熱とそれに併せて周囲の人達の理解ある協力によって益々よりよき方向へ発展させていかなければならない。

図 工 科 部 会

- 1 美術教育と生活指導について
- 2 美術教育における構成をどう考え、どのような指導をしたらよいか
- 3 立体表現活動の不振の原因とその対策

1 美術教育と生活指導について

・問題の意味

現在の教育は知識や技能を教えるだけでなく、児童の人間全体としての発達をたすけ、育てることを目的としている。つまり、身体的にも、知的にも、感情的にも子供のもっている全人格的な素質や能力と正しくのびして、立派な社会生活ができるような人間を育てようとする。子供が絵をかくことを通してこのようなガイダンスの立場からどんな役割が与えられるであろうか。

“絵は子供の心をのぞくめがねである”といわれる。もし、子供が自由な状態におかれ、その心が解放されているとすれば、その絵には、子供の知能、性格などの精神の状態や、環境の影響が自然に表現される筈である。新しい心理学である精神分析学では、子供の絵を通してその心の状態をしらべ、正しい方向に導くために役だたせている。

子供の絵の教育では、描き方だ構図だ形だ色だという前に教育の立場からは、ガイダンスの対象としてとりあげることが今後研究されねばならない新しいみちだといわれるようになってきている。

“何故子供はこんな絵をかくか”——新しい立場から子供の絵に正しい理解を与えそこから正しい指導の立場を求めていかなければならない。このような立場から話し合いがすすめられた。

一、新しい立場からみた子供の絵

——実際作品による——

×絵にあらわれる子供の感情

1 尻をたたかれた子（五才）

母親から何かのことでひどく叱責された後にかいた絵、感情の興奮のままに荒々しいストロークで異様な感じのものを表現している。それをかいた後に再びかいた絵は同一人とは思われない平静な感じの絵である絵をかくことによって、感情のあらだちを解放させたとみられる。

2 母親をひき殺す絵（六才女）

道によこたわった女らしい人物、自動車が走ってきて首をきる。赤い血、更に一台の自動車がきて足を、また一台とやむことなくつぶられた絵叱る母に対する生々しい表現、子供は嫌なもの、恐ろしいものを絵の上で精神的に排除しようとする。この例は、宮武辰夫氏の「幼児の絵は生活している」にも多くのせられてある。

3 火山の爆発（特殊学級児童一四才男精神年令一〇才）

ガラスにかかれた、水えのぐの黄と赤による画面一はいの火山の爆発、荒々しいストローク、この子は最近愛してくれた父を失った。山は父をあらわしているといわれる。父を失った悲しみの爆発でもあろうか、こんな絵がすでに数枚つぶけられている。悲しみのある限りつぶけられると思われる。

4 けんかの相手を絵でやつつけた絵（特殊学級児童一四才男精神年令九才）

けんかをして相手になかされた後かいた絵、紙一ぱいに赤で相手をかき、その目から大きな涙を流させている。濃いブルシャングルーでその上をもう一度あとくりをしている。大きな手、たたかれたらしい。彼はそれをかき終えると喜びいさんで家にかえった。

×色にあらわれる環境や性格

（浅利篤氏研究による紫を中心にして）

1 先生の鼻を紫にぬつた子（六才）

夏休みが終っての登校日、朝家をでるとき、自動車のひかれそうになりはげしい衝撃をうけた、その日受持の先生をかいたが、鼻だけ紫色にべったりぬってある。つよい精神的なショックが、頭にのこっているときこれが鼻にあらわれるといわれている。浅利氏の研究にも、この事例が述べられている。

2 紫の点々（六才）

同じ学校の同じ級の子供、やはり夏休みの登校日に先生をかいて、その服に紫の点々をうってある絵、後で母親にきいたとき、その日朝身体にチクチクしたいたみを訴えて病院に行くように話していたことがわかった。紫の点々は、チクチクしたいたみをあらわしているのであろうか。

3 紫色にぬられた胸と腹（特殊学級児童一三才女精神年令一一才）

何もみないでかいたこけし人形の絵、この子は最近結核性の腎臓の疾患にかかり二カ月程入院してかえってきたばかりである。こけしの胴と腹に、不調な紫をぬったのは、その関係であろうと予想される。

4 紫の山（八才女）

すきな絵をかいた時、茶色の馬の背のような山の向うに富士山型の紫の山がかかれた。しらべてみると父が死亡している。浅利氏の山の研究における類型と全く同じい。

「色彩の心理」アルシウラ、ハットウィック共著（原本児童相談所蔵）紫の観察

の一部。

「今までの観察で、この色（紫）を最も多く固執してつかったのは、アラン、パ
アシー、スコットであった。彼等は相手にされない不幸な男の子達であった。特に
ブリアン、ルイス、ジズ等は不幸な期間だけ紫を選んだ。リチャードは、一枚の紫
の絵をかいいたが、それは重い緊張したストロークのマッスで、クレヨンでかいいた。
その絵はなんとリチャードが歯医者で痛い目にあつて帰ってきて、すぐ後でかいいた
ものであった。エルンスト・パームズは「年少者の神経病の診断の補助としての児
童美術一九四一」 という論文の中で、「紫は意気銷沈した患者の選ぶ色である」と
述べている。これらのいろいろな観察から考えて、紫は制限され、不幸な気分とな
んらかの関係があることがわかる。」

その他、茶、赤、黄、青などを使った子供の絵や、又、線、形、スペースなどと
性格など子供の絵は、その個性的な意欲や無意識的な感情の表現であることを実証
するいろいろな例があげられた。ただこのような判断は専門家や確実な科学的デー
ターに基づいてなさるべきで軽卒な判断は、教育者としてつつしまなければならない
ことであろう。

二、子供の絵の理解とその指導

・ある父親の話

「電車の車がそんなに真ん中によっているものか。」「電車のまどそんなにたくさ
んわくをかいいて変だよ。などと、口やかましく子供の絵を干渉したが、後で実さ
いの電車についてたしかめてみたところ、車の真ん中によっているのも事実であ
り、窓の数が一つもまちがっていなかったことがわかって、子供の眼におそろし
くなりました。もう何もいわないことにしています。

・ある教師の話

六才の女の子、かかれる絵がいつもお花と人形ばかり、絵日記になにをかいいて
いかわからない。その原因が「そんな手がありますか。」「そんな——」「そんな
——」にあることが母親にわからない。まずそれをやめてもらうことにした。そ
してその子と一緒にらく書をはじめた。何の形ともわからないものを二回も三回
もつづけて、はじめてつかうドロドロのえのぐや、墨汁を与えた。何も教えず、
何もいわなかったが材料にひかれて、セロハン紙に何枚もかきなぐるようになった。
学校の帰り、はじめて乳牛のひかれていくのをみた日、一気にそれをかい
いた。のびのびした線、驚きそして大いにほめてやった。床屋さんの店でかりもし
ないのにのぞいていたらしかられたといって、手の長い床屋さんをかいいた。自由
にどこでも刈っていける手だ。新しい興味をもとめて、電車でかよっているのに
わざわざ歩いて学校から帰るようになった。宣伝車。洋服屋。くつや。絵日記に
は何でもその日のことがかけるようになった。

・何のために子供は絵をかくか

絵は子供の無言のおしゃべりである。誰からも教えられなくても描くこと自体に無限の喜びをもってくれるものなのである。おしゃべりを禁じて子供を成長させることはできない。またおしゃべりのし方ばかりどんなに教えても、その内容がつまらなかったり、また自分自身を偽るようなおしゃべりでは生長のために何の役にもたたない。またそのことがかえって、しゃべらないつまり自己表現をなしえない子供になってしまう。おしゃべりのし方よりも、子供がそれに対して、どれだけ意慾をもっているか、その内容はどうかの方が大切なのである。

先ず表現させて、どうすれば、自分の思っていることをよく表現することができるかを自分自身に発見させるようにヒントを与えたり、環境や材料をととのえてやったりすることが指導の方法であって、放任が指導できないことは勿論である。まず、子供の絵をかくことを楽しいものにすることが指導の出発点であろう。材料の多様化、環境の整備などともに、もっと子供の描くものを認めてやり、ほめてやり、子供自身、自由な感情で描くようにしむけたい。子供は自由な自己表現を通して人格的な発展をなしていく。もとより、発達段階による表現形式例えば、ねたくり、図式、象徴などの絵について正しい理解を、その個々の子供について理解しておくことは指導者として必要なことである。

・抑圧の解放

子供は、自由な状態におかれれば、大人がおしつけがましい干渉がなければよろこんで絵をかくことに熱中する。もし描かない子供があるとすれば、そこには描かない原因があることを知ってそれを除いてやらねばならないが、もともと人間は生れながら、いろいろな欲求、願望をもっている。それは、家庭、学校、その他の環境によって多かれ少なかれ、それがおさえられている。少なくとも、人間として当然満たされてよい欲求が不満な状態におかれているとすれば、それは正しい精神や肉体の発達が阻害されることになり、反社会的行動をとる人間になってしまう。子供にとって、そのような不満は土いじりや、絵をかくようなたやすく楽しい仕事を通して表現される。つまり抑圧のはけ口になる。子供の絵にお化けや火事や戦争などがよく描かれるが、これは無意識の日頃の抑圧の発散とみられるものが多い。性格の異状だといわれる子供や、幼児の場合に一層よくあらわれる。従来、何げなく見すごしてきた絵の中にこれらのいろいろの問題を発見し、とかく困った絵だといわれるものにも、あたたかい思いやりの眼でみてやり、抑圧から解放してやることは、正しい精神の適応を意味し、精神衛生上大切なことであることを理解しなければならない。

・生活指導の手がかりとして

子供の絵を通して、性格、感情、興味、欲求、抑圧、環境を知ることのできることは先の例でわかる。アルシウラ、ハットウィック両女史や、浅利氏の研究は、その点で興味あり価値あるものであろう。

題材やあらわし方に変わった絵がでてきたとき、その子供の他の行動なども考えあ

わせて、家庭の状態、両親、兄弟関係、友人などについて調査し、その絵について判定してみるとは、新しく開拓されねばならない面として大切なことであろう。

現在ぼつぼつ、そのような研究記録が発表されつつあるが、一般的な科学的な結論はでていないので、今後これらの調査が現場においてつかかさねられることが望ましいことであろう。こうした観察から、その子供の願望や恐れや、反感や、よるこびや愛情の問題などを知って、その面から、ガイダンスして、子供の成長をたすけることができるようにしたいものである。また絵を描こうとしない子供の原因をしらべてその子が自由に喜んで描くような方向へ指導した結果その性格が明るくなり、健康になったという事例も少なくない。

これはうまい、これはへただといひ批判の先にもっと視野広く子供の絵をみて、それを正しく理解し、正しい指導を与えていきたいものである。

2 美術教育における構成をどう考えどのような指導をしたらよいか

・美術教育における構成の意味

最近新しい構成ということが盛んにいわれるようになってきた。従来よりは構成的な方法がもっとはっきりした考えでその作品にあらわれ、構成指導の方法もいろいろをと考えられてきた。

芸術的作品は、すべて言語や文字、音声或は色や形種々な材質の構成によって生れるのだがその構成の中から無駄な装飾をできるだけ取り去って、必要なものだけで構成しそれをむきだしにして美しさを強調するというのが新しい構成の考え方になってきているようだ。

幼い子供達は、自分の知っている語彙をできるだけうまく組合わせて自分の意志を表現しようとする。片言がしゃべれるようになった或男の子が、長く椅子に坐らされて足がしびれた時、「しびれた」という言葉を知らず、「ぼく、あんよ、サイダーのんだみたいになった。」と言った。これも適切な言葉の構成であろう。

私達はいろいろな言葉を知ってそれを構成し、自分の考えを伝えたり、詩や歌をつくるのだが、言葉の並び方、組合わせ方によって意味が違ったり、はっきりしなかったり、強く表わされたり魅力あるものになったりする。したがって構成するということは、単に言葉を並べ、文章を組合せるだけのものではなく、私達の心の強い感動と表し方の形式とがびったりあっているか、またそれに使用された材料との構成はどうであろうかなどということが大切な条件になる。

図工科のような造形表現の場合に特にこのような構成の力は非常に大切なものである。絵画の場合について言えば作者の感じた心持が色や形の構成や色彩の塗り方などの表現方法にあらわれなかったら、見る人に感銘を与えることはできないし、造形の要素である形や色彩が持っている性質や性能を生かして、全く新しい作者の創造による構成ということがなかったら絵画としての意味がないということになる。

最も絵画らしい表わし方、絵でなければ表わすことのできないものということが絵画の価値のある存在の理由になるわけだから、どんな人が描いてもほんとうにその人の個性が現われた絵であって造形的にも構成がしっかりしたものだったらそれはいい作品だといえる。絵に限らず工作にしても、図案にしても配置配分にしても、このような構成の能力こそ根本的な基礎となるものであるから、最近小学校でも造形の構成力を養うことに強い関心を持つようになって来て抽象的なもので多くその指導がなされているが、これは子供の生活の実態にたった正しい考え方に基く指導でなければ、かえって児童を迷路に導き只単に目先の新しさに終って何等プラスするところがない。構成教育は抽象具象その他あらゆる素材を教材として指導するに可能なのでこのような広い視野からの構成の意味と、その図工科における位置を正しく知って指導を展開しなければならない。

・子供の生活から

子供達の遊びをみているといろいろと面白いことをやっている。一本のひもを輪にして指にかけ、次々と変った形をつくり出して遊ぶあやとり遊び、紙の上に点々をうってそれを結びながらする陣取り遊びや、地面の上に種々の大きさの抽象形をかくてその中でする鬼ごっこなど。また大工さんが木を切っている側で一心に木ぎれを拾い集めている子供達がそれを積んだりならべたりしながら汽車ごっこをしたり家を作ったり、やがては棒切れを鉄砲にしたり刀にしたりして無心に遊んでいる姿をみる時、或は木の葉のお皿や泥まんじゅうでおまごとしてしている子供達をみる時彼等が全く自然に象徴の世界に遊んでいることを知る。

また絵の具と筆を与えられた子供が、何の苦もなく大たんにアブストラクツ的表現をやっているのを見る時、彼にとって表現されたものはごくあたり前の花でありまたは蛙であることを知らされる。

何もかけない子供でも、石ころの中から象さんやうさぎさんを拾いだすことはできるのであり、たくさん石ころから、子供の奥にねむっていた空想がひっぱりだされたり又おぼつかない形態認識で石塊が拾いあげられたり、拾いあげられた石ころの形を知っている動物と比較させたりすることによって、子供達の感覚をめざめさせ、のばしていくこともできるのである。

このように子供達の遊びの中から象徴的、抽象的なものはいくらでも見出される。そしてその事から子供達は生得的に抽象的感覚や構成的要素を持っていると考えることができる。

だから私達が学校の美術教育の中で構成の指導を行う場合には、子供達が生れながらに持っている構成的要素（対称、釣合、対比、律動、反覆、従属、強調などの感覚）をいろいろな方法で刺激してそれらの力を見付だし意識づけてそれを統一的に秩序づけたり、構成作業の遊びを多くしたりして自由に遊ばせ人間としての調和をはかるように努力しなければならない。静物や人物をいくら写生していても、今

までの考え方や指導だけではのぞましい人間は形成されない。言葉をかえて言うとか構成表現は平面上の仕事だけでなく、立体や空間に対する感受性や感覚を鋭敏にするということであり、他方生理的な味覚や聴覚、嗅覚、触覚、冷温覚、力覚などというように、今までの視覚だけに頼った美術教育を改革してこれらの諸感覚の訓練を科学的に育てていくということなのである。

あくまで子供の生活から引きだされ、生みだされた構成表現でなければならない。そして教師の持っている構成学上の知識や技術を注入したり強調したり、またこのごろはやりのモダンアートの形式を模倣させることは反って子供の創造性を枯渇させるばかりであろう。

・構成の指導についての二、三

1 てたらめから発展して

構成教育の新しい試みとして、いろいろの抽象的表現の方法が紹介されるようになってくると、表面的にそれを真似させることが構成教育であるかのような錯覚におちいりやすい。そしてそんな時の仕事は子供達にとって、なんだかわけのわからないものであることが多いのではないだろうか。しかもでたらめに切ったりはったりしたものがたまたますばらしく効果的な作品になったりすることもあるので、ますますでたらめでもいいというような感じにとられ易い。しかし美術教育が子供達の表現から偶然の美を求めようとするのでない以上、でたらめを認めるわけにはいかない。子供達の生れながら備っている感覚を通して、自分自身に納得のいくような表現の工夫と努力がなかったら、その表現活動には何の意義も認められない。

先にも述べたように子供達が生れながらもつ構成的な素質を信ずるなら、その子供達の生活を深くみつめその発展として教材をとりあげ、子供の生活と遊離しないように研究されていかなければならない。

そして子供達に構成表現をさせた時、彼等自身が何らかの問題意識をもって表現に伴う抵抗を自分の力で克服しながら表現を急成していくなら、その作品及び表現活動は子供の感覚を通して生れ、行われたものとして子供自身にもそれが認められる。

指導者は子供の生活をよく知ってそれを組織づけること必要であろう。

このようなことによって子供のてたらめの問題は解決されていくのではなかろうか。又逆に子供自身のしごとの中には、でたらめと思われるものがあるにしても、その無秩序を秩序あるものに少しずつでも建設的にする歩みがあればいいともいえる。

もともと子供達のあそびは無意味にみえて決してそれは無意味なことをしているのではない筈なのだから。

2 素材の経験を多く与える

新しい機能は新しい美をうむ。

それは構成された美しさであろう。近代にすむ子供達に五感を通した近代的な感覚を養うことは図工科のもつ大きな役割といえる。新しい機能は新しい素材から生まれる。近代的産物であるいろいろな製品や、今まで省みられなかった石ころ、藁くすの中からも新しい美は生まれる。

子供達が自由にえらび出し、組合わせて表現できるようにあらゆる表現材料を用意しておきたいものである。子供と、表現する意欲の間に多くの材料素材がおかれることは子供の感覚をよりよく刺激するであろうし又表現のマンネリズムを打ち破ることにもなるのである。

よく地方の学校で、材料が揃えられないから構成的学習がやりにくいという声を聞くが、色紙や針金ばかりが構成的表現の材料ではないのであり、木の枝や板切れ、藁、石、貝がら、砂など教師のあふれる程の創意によって地域性を生かした構成教育ができるのではないだろうか。

新しい素材の経験のために、構成教育はよき方法となることも多い。構成教育が多く抽象構成になるのもそのようなことが原因するであろうが、ただ構成教育即抽象構成と考えることは危険だ。新しい素材の体験から得た感覚は、他のあらゆる造形学習に生きてこなければならぬし、また逆に具象的な表現の中にも構成的な要素の多くふくまれていることを知っていなければならない。

ただこの面の指導については今後もっと研究をつまねばならないことが多いように思われる。

3 概念くだきのこと

子供達の表現がある一つの型を持ってくるようになると、それ以上に発展しなくなってきてやがて感動のない無意欲な表現におちいりやすい。そういう弊害を破るためにも抽象的な構成表現をあらゆる機会に行うことは意味のあることである。

そして多くの異った表現材料に親しめると共にあらゆる表現材料を適格に撰んで表現する能力を養うことは表現のマンネリズムから守るためにも大きな役割を果たすと思われる。子供が内から求める感覚の世界を教師が外から構成教育として刺激し引き出してやることによって一層生々とした造形表現の世界がひらかれてくるであろう。

ただ感覚訓練として又概念くだきのためとして別々に行われるのではなく、子供の中から生まれたものとして行われるところに、構成教育の真の意義があり生命があることはもとよりである。

3 立体表現活動の不振の原因とその対策

。いつもとりあげられるが、いっこうに消えていかない問題である。何か根本的に考えなおさなければならないことがぬけていたのではなかろうか。現実の場にお

いて、どうしたらよいかを話し合ってみた。

◦不振の理由としてあげられるもの

- 技術偏重の考え方
- 素材別教材群の在り方
- 設備のこと、経済的なこと、教師のこと

子供達の真実な感激に満足を与えず、個性的な子供の心をかなしばりにして、工作が物をつくる技術的なものに終始したところに、絵画的なものから立おくれ、その進展をはばみ、現場にふさわない第一の原因があるのではないか。現代の科学、建築、工芸などが、すばらしい機能美と造形美をみせつつ、あまぐるしく発達しているのに、又そういう感覚センスやアイデアが要求されているのに、過去の素材材料だけに閉ぢこもって、新しい開拓をしていないことにもあろう。安易な組立式セットで、新しい感覚をうみ、子供の創造性を高める学習はなりたたないのではないか。素材についての近代的感覚を養えない。

◦指導するものとして

- 子供にもっと抵抗少なく、もっとやさしい技術でできうる素材を身近にあるものから、又近代的産物の中から開拓し研究していかねばならない。
- 構成的な考え方にたつ、新しい素材による教材の研究をもっとしなければならぬ。
- 子供の創造的意欲を満足させ、自己表現の自由をもっと与えはげましていく指導をしていかねばならない。
- 作品結果主義でなく、過程を重視する学習を。

以上のような話し合いであり、結論であった。

(付記)この記録は、協議会による一応の結論を、まとまった文章形式に書きあらためたものである。

家 庭 科 部 会

1 低学年の家庭生活指導内容の再検討

イ、技術指導 ロ、習慣形成

ハ、家庭との連絡

2 高学年における家庭生活指導内容と取扱い方

イ、家庭科として指導すべき内容

ロ、クラス担任と家庭科教師との関係

1 低学年の家庭生活指導内容の再検討

小学校の教育課程に家庭生活指導が取り入れられてからすでに2年6カ月を経過したので、この間の指導経験について、各方面から反省をし指導内容の充実向上を計ろうとして協議したのである。

家庭科の目標は

① 民主的な協力による家族生活を営み（家族倫理）

② 合理的能率的に家事を運営し（科学）

③ 明日のエネルギーが身心共に充分に再生産できるように休養のできる家庭生活を経営する（労働力の再生産）

自主能動のよい家庭人を育成する処にあると思われる。

いわば現在の家庭生活を改良して、より豊かな家庭生活を営む為の学習であるから、それを観念化された家庭ではなく個々の家庭に即して常に「より豊かな生活をする」と言う意識を伴った実践的な学習でなければならないから子供達はいつも「何が家庭生活をより豊かによりよくする事であるか？何が合理的な生活か？」を年齢に応じて考えながら自分の生活の中に実現して行く学習でなければならないのである。

この観点から現在迄二年半にわたる実際指導は、果して子供の能力や興味に即して適切な経験要素が重点的に入れられていたかどうかを再検討しようとしたのである。

先ず従来の問題解決学習的な八領域に代えて、より分析的系統的なスコープから家庭生活に関する教育内容を規定したいと考えたのである。それがためこの協議会に先立って、市内の新堅町小学校の児童を対象に、家庭生活に関する能力調査を実施した。それは極く部分的な項目について児童数も少数であり、この種の調査としては甚だ不十分なものではあるが、協議を進めて行く時に参照したのである。こうして生活設計、被服、食事、住居の四領域から要素を分類して児童の能力に即して

配列しようとしたが、僅か二日間に足りない協議会であった為に誠に不十分な協議に終わったが、一応の結論らしいものを得たので次に表示する事にする。印刷の都合上くわしい説明に紙面をとる事ができず省略するのは遺憾であるが、家庭科学学習の為にぜひ低学年から時間配当をする事が一同の強い要望であった。

◆家庭生活指導内容の重点

学 年		一 年	二 年	三 年
領域	重点的 領域の区分	<ul style="list-style-type: none"> 自分でできる事は自発的にする 進んで楽しく良い生活しようとする 物を大切に使用する 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭内での家族の仕事を理解し進んで手伝いをする 人と協力し又自主的に物事を判断しようとする 	<ul style="list-style-type: none"> 積極的に行動して自分の生活内容を豊かにする 対人関係をスムーズに身の廻りの物の手入れをよくする
	生活時間の計画	<ul style="list-style-type: none"> 絵日記をつける 一日の間に自分から進んでどんな仕事をしているかを絵で記入し自分の生活内容を意識する 良い遊び悪い遊びを区別し遊ぶ時は行き先を家人に言う 家庭や学校で定められた時間を守る 	<ul style="list-style-type: none"> 生活表を記入する 	<ul style="list-style-type: none"> 生活こよみを作る 仕事の実行表を記入し自分の生活内容の充実を心がける 時間を有効に使って誕生会に参加する (3.4.5年)
	経済の計画	<ul style="list-style-type: none"> 持物を大切に取扱う (1.2.3年) お金は使途を親に云う 貯金をする事の意味を理解しおねだりをしない 自分で玩具を作って遊ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> よく考えて遊び道具やその他の物を買う 	<ul style="list-style-type: none"> 買った物を記録する 身の廻りの必要品の簡単な物を製作修理する (3.4年)
	対人関係(礼儀)	<ul style="list-style-type: none"> 恥しがらずに挨拶をする 友達と仲良く遊ぶ 家庭や学校でのきまりを守る (1.2.3年) 返事(ハイ、イエエ)をはっきり言って、ぐずぐずした態度をとらない よい言葉遣いをする (1.2.3年) 室内の歩行は静かに 正しい姿勢 	<ul style="list-style-type: none"> 来客の応接や案内をする (2.3年) 物の貸借の仕方を正しく (2.3年) 	<ul style="list-style-type: none"> 友達を尊敬し礼儀正しくする (3.4年) 他人の話を冷静に聞く (3.4年)
	事故	<ul style="list-style-type: none"> 事故を知った時は適当な人に訴える 健康増進——歯みがき 手洗い 入浴 爪切り 等 清潔に注意する 危険防止——遊び場交通 簡単な応急処置は自分でする 避難場所を知っておく 		<ul style="list-style-type: none"> 応急処置は自分でできる (3.4年) 盗難予防——戸じまり夜遊びに注意 (3.4年)
被服	衣服の手入れ	<ul style="list-style-type: none"> 服の脱ぎ着と後仕末 ボタンをかける ブラシがけ 汚れをふく 汚れた物を出す たたみつけ (1.2.3年) ハンケチを洗う 	<ul style="list-style-type: none"> 正しい服のたたみ方ができる 下着を洗う 	<ul style="list-style-type: none"> ねおしをする 簡単なしみ抜き(水ですく洗い流す程度のもの) 血泥など
	衣生活の設計	<ul style="list-style-type: none"> 自分の下着類の整理 自分で出し入れ みださない 数をしらべる (シャツ パンツ 靴 下 ハンカチ類 (1.2年)) 	<ul style="list-style-type: none"> 絵日記を書く 洗ってもらった日 きがえた日 入浴した日 新調してもらった日をそれぞれ異なる色丸で記入する (2.3年) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の衣類の保管 下着のみでなく上着 間着にも及ぶ

		四 年	五 年	六 年
生 活 設 計	重点的目標	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやっている事に理論的な裏付けをして生活内容を反省し正しい方法を考へて改良する 	<ul style="list-style-type: none"> 責任の分野を広げて建設的に自分の生活を打ち立てて行く 知識を豊かにして家庭生活に必要な基礎技術を随身に身につける 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭や社会への愛情をもって奉仕する喜びを知る 知識を一層深めて計画を立て能率的に生活をするように工夫する
	生活時間の計画	<ul style="list-style-type: none"> 仕事の実行表によってした事を検討し改善工夫を計る 	<ul style="list-style-type: none"> 日課表（生活時間表）により生活時間の活用を計る（休養 学習 労力遊びの配分） 仕事の分担……計画実行 一家揃って楽しいレクリエーションを工夫する 	<ul style="list-style-type: none"> 作業の計画表を作製しそれを遂行する 行事（誕生会等）の計画反省をする 他人の時間を尊重する
	経済の計画	<ul style="list-style-type: none"> 収入と支出を分けて小遣帖をつけ使い方を反省する 	<ul style="list-style-type: none"> 小遣帖は支出内容を分類して記帖する 自分の生活に必要な物はできるだけ自分で選択して買う 	<ul style="list-style-type: none"> 小遣いは収入も支出も予算に従って合理化するように工夫する 必要品の購入は計画を立ててする
	対人関係	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶や謝礼や接待がよくでき 手紙でもそれらの事が表現できる（4.5年） 	<ul style="list-style-type: none"> ユーモアを生活の中にとり入れる（5.6年） 老人や弟妹に正しい態度を取る（5.6） 	<ul style="list-style-type: none"> いつも容儀をととのえて人に不快な感じを与えないようにする
	事故	<ul style="list-style-type: none"> 初歩的な看護ができる 	<ul style="list-style-type: none"> 看護（脈博体温氷嚢の取扱い 茶を吞ます等） 家庭常備薬の知識を得る 	<ul style="list-style-type: none"> 看護用具の用い方 病人の扱い方
被 服	被服の手入れ	<ul style="list-style-type: none"> 正しい洗い方（4.5年）洗濯用器具洗濯操作について考え 正しい方法を見つける 簡単なアイロンがけハンカチ 運動服 	<ul style="list-style-type: none"> 洗剤の種類 用量 用法の理解 しみ抜き 油 インク 墨 	<ul style="list-style-type: none"> 季節による洗濯物の量や洗濯の入用量を知る 洗濯屋に出す物 家庭でする物の区別 簡単な漂白ができる晒粉（クロールカルキ）ハイドロサルファイト過マンガン酸カリ
	衣生活の設計	<ul style="list-style-type: none"> 着られなくなった衣類しらべ 小さくなった物 いたんだもの 取扱いが悪くて着られなくなった物 	<ul style="list-style-type: none"> 持ち物の過不足を知る 年に入用な物を知る 繊維の知識 	<ul style="list-style-type: none"> 計画的 総合的な保管をする 衣服の経済 一年間の衣服費を知る どんな物を買ったらよいか どれだけの物が更生できるか知る 私達の衣服への反省
		一 年	二 年	三 年
服	裁	<ul style="list-style-type: none"> 縫い取り遊び糸を通す 玉どめをする ダーニングステッチ クロスステッチ（1.2年） 	<ul style="list-style-type: none"> 縫い取り遊び アウトラインステッチ フレンチナット ボタンをつける ふきん作り せみとり袋作り 人形の服作り 	<ul style="list-style-type: none"> ほころび縫いし 応急処置としての程度 雑巾作り 簡単なビニールの小物 なわとび用なわ作り
	縫	<ul style="list-style-type: none"> 着せかえ遊び（色紙の着物で）着物の色や形に注意 	<ul style="list-style-type: none"> 鉤針の使い方 目の作り方 ひも作り 	<ul style="list-style-type: none"> 木の葉染め（日本紙と染料を用いて）

	衣服と健康	<ul style="list-style-type: none"> 衣服の調節をする 汗が出たらふく 寒さ暑さによる脱ぎ着 厚着をしない ねまきに着かえる 	<ul style="list-style-type: none"> 仕事の時の身なりに気をつける 不衛生にならない（ほこりに対してマスクをする） 服が汚れないようにする 働きよいようにする（仕事の時上履いや三角巾を用いる事を知る） 	
食	食事の仕方	<ul style="list-style-type: none"> 食事前後の挨拶（1.2年） 箸の持ち方 食事時のだんらん（1.2年） 	<ul style="list-style-type: none"> お客様ごっこ等でお茶お菓子果物の出し方や食べ方をする 姿勢・落着 姿勢を正しく落着いて正しい食事作法を行う 食器の扱い方（丁寧に清潔に等） 	
	食事衛生	<ul style="list-style-type: none"> 食事前に手を洗う（1年） 食後に口をすすぐ（1.2年） 間食のとり方（1.2年） 	<ul style="list-style-type: none"> 食器の清潔 生野菜と寄生虫 生野菜に寄生虫卵の附着している事を知り寄生虫の害を知る 	
	食物と栄養	<ul style="list-style-type: none"> 偏食の矯正 偏食の害を知り何でも食べる 日常食品の名称 毎日食べている物の名前を知る 	<ul style="list-style-type: none"> 季節と食品 季節に出廻る食品を知る 	
事	食事用意（食事の手伝い）	<ul style="list-style-type: none"> 茶わんを並べる 飯台をふき 茶わんを集める（流しまで持つ程度） 自分の弁当箱の仕末（きめられた所迄持つて行く） 	<ul style="list-style-type: none"> 食器を洗う（2.3年） 果物の皮むき 果ナイフで果物の皮をむき芯をとる 	
			<ul style="list-style-type: none"> 火たき 火起し 湯わかし ゆで卵 鍋洗い（早く火を起す方法 起した火で湯をわかしゆで卵をする）（3.4年） 簡単なおやつ作り（蒸しもち 茶巾しぼり） ようかん（寒天を使う） ジャム等（3.4年） 切り漬をする（3.4年） （野菜をきれいに洗い、小口切 せん切りにし塩と共に漬け圧石をし食べる） 	
		四 年	五 年	六 年
被	裁	<ul style="list-style-type: none"> 正しい縫い方 ソロバン袋を縫う クレヨン染 	<ul style="list-style-type: none"> ミシンの操作（あれば） ギャザースカート作成 アイロンの修理 しぼり染 平縫い引きしめ 巻き上げ 柳しぼり 板じめ スザーキー手袋（ミトン）の作成 	<ul style="list-style-type: none"> 運動服か簡単なブラウス作成（女子） えもんかけ作成（男子） 簡単な捺染（仕上げ及び作品としても完成させる）
	縫	<ul style="list-style-type: none"> 二本棒針編みの基礎 		<ul style="list-style-type: none"> 靴下編み（女子） 火針敷きの作成（男子）
服	衣服と健康	<ul style="list-style-type: none"> 健康な着方をする 働きやすい服装 しめつけない服装 	<ul style="list-style-type: none"> 季節に適した服装を工夫する 冬の衣服 夏の衣服 	<ul style="list-style-type: none"> 仕事の能率を増進させるような衣服の工夫 野良着 運動服 家庭着（かっぽろ着など）

食 事	食事の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ◦食事の反省 自分の食事の仕方が正しいか考える ◦食事時の話題 食事時にふさわしい適当な話題について考える 		
	食事衛生	<ul style="list-style-type: none"> ◦食物と伝染病 伝染病にどうしてかかるか知る 食物との関係 予防を知る ◦調理と衛生 ふきんの清潔 調理器具 調理人の清潔 		<ul style="list-style-type: none"> ◦台所の清潔 台所が清潔でなければならぬ事を知る清潔にする為にはどうすればよいか考えて実行する
	食物と栄養		<ul style="list-style-type: none"> ◦食品の組合せ (毎日の食事はどんな食品をみ組合せたらよいか考える一六食素 三食素) ◦食品と消化 消化の良い食物と悪い食物を知る 老人 病人 乳幼児の食事はどうでなければならないか考える 	<ul style="list-style-type: none"> ◦食品の組合せ 五年で学んだ事を基にしてそれを実際の生活に応用する 自分の家の食事の組合せ等
	食事用意(食事の手伝い)	<ul style="list-style-type: none"> ◦日常の簡単な調理 (味噌汁 いり卵 青菜のひたし いため物 オムレツ 野菜の煮物 野菜の和え物 御飯たき等) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦台所用具の配置 台所が能率のよいものである為の条件を知る 台所の三要素(流し 調理台 コンロの組み合わせ方や用具の配列順について) ◦献立を立てて日常食を調理する(家族の為に良い食事を自分で計画し実行する) ◦病人食 乳児食の調理 (おかゆ 半熟卵 マッシュポテト等) 	
住 居		一 年	二 年	三 年
	整理整頓	<ul style="list-style-type: none"> ◦持物の仕末をする (机の中 椅子 履物 雨具 遊び道具 給食 用具の正しい仕末) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦持物を使う時の便を考えて仕末する 	<ul style="list-style-type: none"> ◦教室の清掃をする (順序 方法を考えてする 道具の後片付けを丁寧に)
	美化	<ul style="list-style-type: none"> ◦美しい教室 (教室の装飾 壁の展示物はずれをなおす 紙くず拾い 足を洗う 内履 外履の区別 鏡) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦すっきりした教室 (簡単な清掃 展示物のはり方を工夫 学級文庫の手入れ) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦明るい教室 (教室や部屋の置物の取扱 換気と採光 カーテンのよい開閉)
	使用	<ul style="list-style-type: none"> ◦便所や廊下教室を汚さないで使う 教室や部屋の出入り戸 障子の開閉を静かに ◦足洗場 水含場の使用 	<ul style="list-style-type: none"> ◦水道栓の開閉 水の出し方を正しくする 	<ul style="list-style-type: none"> ◦ポンプの使い方
	保健安全	<ul style="list-style-type: none"> ◦火の用心 ストーブ 火鉢について注意する 	<ul style="list-style-type: none"> ◦火の用心 ストーブの廻りで遊ばない ◦ポスター書き 	<ul style="list-style-type: none"> ◦戸締りを正しくする

	設計製作	<ul style="list-style-type: none"> ◦積木で家を作る ◦家や教室のようすを絵に書く 	<ul style="list-style-type: none"> ◦いたんだ所を早くなおしてもらおう ◦ガラス 椅子 戸 など ◦机 椅子等の出た釘をうつ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦白墨入れ掃除用具の簡単なものを自分でなおす
	飼育栽培	<ul style="list-style-type: none"> ◦生き物を可愛がる ◦草花の手入れ ◦水やり 草とり ◦むやみに切らぬ 	<ul style="list-style-type: none"> ◦犬ねこ等生き物に食べ物を与える ◦庭を掃除して好きな草花を植え雑草をとる 	<ul style="list-style-type: none"> ◦長くつづけて世話をする(家畜や草花の観察日誌)
		四 年	五 年	六 年
住	整理整頓	教室や部屋の清掃をする 正しく速くする方法を考え実行する	<ul style="list-style-type: none"> ◦合理的な清掃整理整頓を工夫する (運動場 下水の清掃 除草や整地) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦合理的な整理整頓清掃の指導 (家族や低学年の指示 家屋内外学校内外の掃除)
	美化	<ul style="list-style-type: none"> ◦住み心地よい教室 部屋 (家具 置物の位置の変化 部屋の装飾の工夫 簡単な生花 教室の展示を自主的に) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦簡素な教室 (美化と費用について 塗装と色彩について) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦美化の範囲を広く 学校全体の掲示 美化に積極的実践と指導を行う
	使用	<ul style="list-style-type: none"> ◦機械物は丁寧に使う(ラジオ電着) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦掃除用具の合理的な使用 手入れを考える ◦科学的な清掃用具の良否 適否を見る ◦塗装物の使用と手入れ ◦モデルスクールや家屋の見学 	<ul style="list-style-type: none"> ◦家具の手入れ ◦家屋や学校の簡単な修理をし長く使う工夫をする
	保健安全	<ul style="list-style-type: none"> ◦石油コンロ ガス 電気 の使い方 	<ul style="list-style-type: none"> ◦地震 大風 大水の処置 ◦災害保険について知る ◦ガスメーター 電気のメーターのよみ方 	<ul style="list-style-type: none"> ◦災害その他の時の消毒 (家屋 家具 道具の消毒剤 伝染病 便所 台所の消毒)
居	設計製作	<ul style="list-style-type: none"> ◦掃除用具の工夫 ◦小物の製作 	<ul style="list-style-type: none"> ◦掃除用具の製作修理 ◦テーブル掛け 本箱のカーテン等の製作 	<ul style="list-style-type: none"> ◦合理的な設計製作をする(理想の教室部屋) 簡単な障子 ふすまの修理 ◦カーテン 暗幕の修理
	飼育栽培	<ul style="list-style-type: none"> ◦長く育て研究する(養兔栽培の飼育記録 草花の見本絵集め) 	<ul style="list-style-type: none"> ◦豚鶏牛馬を養い手入れ飼育運動する(5・6年) ◦四季の草花を植える 	<ul style="list-style-type: none"> ◦学校園の計画

体 育 科 部 会

- 1 学校と体育指導との連関をどう考えるか
- 2 雨天時及び冬期における各学級の体育室の活用法
- 3 リズム運動の創作についての段階的指導法

1 学校生活と体育指導との連関をどう考えるか

下の項目について特に次の三点が討議された。

I 体育と他教科との連関

今度改正された指導要領にも体育は健康保持と増進が強調されており、他教科とも深い連関性があることは当然である。

そこで社会科、理科、家庭科等各教科との連関をちくいち考えないで体育の特質面から他教科との連関を考えると他教科は知的な教育で、それを実践を通じて習慣づけるところに体育科の特質がある。

そうした考えの中に他教科をみて行く。

ところがどのように実践に移して行くか、その方法が問題であり、対人関係についても社会科の理論を実践を通して練って行くのが研究の狙いであるが非常にむずかしい。

その指導方法は具体的には各先生方の研究によるところが多いが、教師は他教科の教育程度を知り、それを体育面に応用できる範囲に全部応用させて行くのが効果的であり、かつ望ましい。

たとえば社会科の「汽車ごっこ」を体育の時間に実施したとすれば両者に密接な連関性があり、体育と社会科の各々の目標達成できるばかりでなく子供たちにとっても好ましい全人的な教育がなされる訳である。そうしたところに生活カリキュラムの大きなねらいがある。

他教科との連関がうまく行っていない。その原因の多くは各教科とも教科カリキュラムの行き方をして全人教育の新教育方針を忘れているからである。

次に問題になったのは体育と他教科の主体性についてであるが、体育は他学科とことなり行動によって習慣づける実践的教育であり、その特質から考えると体育は社会科、理科等と同列のものではなくて全教科を包含した教科であるから別に主体性の問題で他教科と争う必要はないと言う結論を得た。

II 学校行事と正課体育のつながり

学校行事は年間通じて行われるが、これと体育とのつながり、たとえば運動会、遠足、学芸会、修学旅行とのつながりについてどのようになされるべきか。

最初に行事のための行事と言った学校行事を整理すべきであり、臨時の行事の為に特に体育の授業を提供することのないようにすべきである。

年間計画を立案する時に各教科に行事のための時間数を加算しておくこともまた望ましいことである。

運動会、遠足は直接体育とつながりを持つ行事であるが、運動会のために特別練習をするのではなくて正課時のカリキュラムをそのように組むべきであり、練習を要するのならば工夫をして時間を生むべきである。次に生徒の自主的な運営も正課時からの訓練によって充分に活用したいものである。

遠足、修学旅行と歩行は表裏一体のものであるが、競と秩序運動を最近おろそかにするむきもあるが、大いにこれを実施すべきであり、正しい歩き方、姿勢等日常の訓練と指導方法が大切である。特に指導方法は決して無理のないようごく自然的に取扱い誤りのないようにすべきである。

学芸会に出場できない者のために体育的遊戯をやらして機会均等をはかるのも面白い方法である。

Ⅲ 正課時体育指導と日常児童の遊び 自由時体育(学校生活)と生活体育

学校の正課時の遊戯と学外に於ける児童の遊びを如何にしたら良いかは全国的な問題となって来ており、ここで取上げて討議されることは当を得たことである。

学校外の日常児童の遊びを調査して、それを正課時体育面で取りあげうまく活かされるように指導するのが最近の方向である。

いたずらに悪い遊びだから禁止すると言っただけで他の望ましい遊びを与えなかったり、与えてもそれを指導しないのが多かったのではないか。

次に課外の児童の遊びの指導であるが、児童たちをグループ活動させ、その指導者をよく把握指導して行くのも一方法である。家庭においても遊びに対しては充分関心を持って欲しいし、その呼びかけもまた誤った考えを持った父兄を是正して行くことも必要である。

特に勉強ばかりを強制し遊びを悪いことのように考えている父兄には注意を促したい。

児童を悪くするのは社会が悪いからだと言われる、子供の遊びに関係のある社会団体にもメスを入れてみたい。

社会教育主事と学校との連絡は殆んどとられていないが、学校教育との関連をもっととってくれぬと竹に木をつぐ結果になるおそれが多い。それと同じことが公民活動と学校体育の連関でも言われるのではなからうか。

文部省でも小学校の対外試合を禁じているにもかかわらず社会団体が子供たちを先生の知らぬうちに、あるいは黙認のうちに出場させ学校体育(教育)をスポイルする面が多いことは甚だ情けない。たとえば村の祭りに小学生を相撲に出させて大人なみの賞品を与えたり、いかがわしい団体が野球試合を挙行して子供たちの監督に非教育的な取扱いをする等、これらの団体に対しても先生は積極的に加入して教

育的に指導するよう要請するか、あるいは抗議するなどして十分に監視すべきである。

もちろん子供たちは競技に興味を持っておるのであるから、学校がこれを主催し放課後、休暇等を利用して野球大会、ソフト大会、卓球大会等、教育的に取扱うことを忘れてはならない。

以上三項目に分けて標題を考えてみたが、生活カリキュラム的行き方で子供たち全人教育をするという根本方針を基礎に家庭と学校と社会がよく連関しあって教育することが大切である。

2 雨天時及び冬期における多学級の体育室の活用法

下の項目について各方面から討議が重ねられた。特に小学校に於ては体育室が充分になく、体育指導面に於て一番困難な問題となっている現状である。

このような現状では勢い多学級が同時に体育室を使用する場合、あるいは併行授業を行っているところが大部分である。

独立した体育室をもっている学校は殆んどなく、講堂兼用、また控所をこれにあてているのが実状である。大きな学校では講堂の広いものをもっているが、学級数が多いので併行授業をやっている。

また中学校と同一校舎にいる学校では中学校、小学校と日を分けて使用しているところもある。このような学校では特に中学校の特別教育活動によって使用できない場合も起りうるので、この点についてよく指導者は相互に連絡をとって一方に偏したものにしないよう注意しなければならない。

特に新設間もない運動場をもっているところでは、晴れ上っても二日ばかり戸外が使用できないので一つしかない体育館を使って困難な授業をやっているところもあり、正課体育の週三時間の最低基準をも余儀なく割っている。

一方金沢市内の児童数の多い学校では数学級合同の授業もやっていて、余り場所をとらない教材を主として実施している。徒手体操、鬼遊びなどでボール遊びなどは殆んどやらない。

以上のような現状であるが、合同の場合でも一人の教師で多人数を持つ場合と、何人かで持つ場合とでは非常に問題も違って来るが、合同授業では同性、あるいは同学年をグループとしたものでなくては効果が上らない。

同質的なものを集めることが望ましいと思われる。この点併行の場合は同じ場所で行っているだけで各々の教師が自己の指導方針に基いて指導して行くものである。

金沢市内の学校に於てもたとえば、五学級を全部別々の教材で実施することは困難であり、高学年などでは性別に男子は跳箱、女子は縄跳び等男女別に体育館を使用している。

また体育室の使用出来ない時には教室の机、椅子などを一方に片づけて行っている学校も二、三あった。

附属小学校では水曜日に全校一斉に理学部のグラウンドで体育の時間がもたれているが、広い運動場で児童達がのびのびと運動ができて非常に結構な方法だと思う。

次に問題になるのは合同授業の時に一人の先生が主体となって、他の人は補助的な立場でやって行くやり方、あるいは初め合同で後に併行授業に移行する方法、体育館を区分して使用する方法と色々考えられるが、今までの方々の話を総合すると、やはり合同案が最も良い方法と思われる。

(体育のできるすべての場所を前提として)

空室なども利用して合同授業をやっているところが多いようだった。

しかし前にも述べたように合同の場合でも特に一人の先生が主体となってやっても、他の先生がアシスタントとしてやって行くことは最も大切なことでアメリカでもこの方法がやかましく問題にされている。

次に体育の時間が問題になるが、基準では(四十五分)週三時間が最低基準とされている。これはあくまで最低であって、何とかうまく時間を見出して、できれば少しの時間でも毎日体育の時間がもてるように考えるべきだと思う。しかし児童の一日の生活の大部分が遊びであって、学校の体育の時間で子供達の要求を満足させることはできない。したがって正課には正しい遊びについてよい習慣をつけて自分達で遊ぶ時でも、それが役立つような方法で指導することが大切である。

また町内などでは子供会でラジオ体操の会などをつくって活潑にやっているところも見受けられる。

全校で一斉にラジオ体操をやるとか、何か運動をやっている学校も方々で見られた。

○施設用具の管理

施設、用具の面では現在どこの学校でも一番苦しんでいるが、少い用具で最も効果を上げるよう指導者はもちろん子供達にもよくこのことについて考えさせて行くことも体育の指導では大切なことである。

特に体育室を使用する場合には多人数のものが余り場所をとらずにやって行くのはマット、器械運動に限定されてくる。この用具なども非常に不足している現状である。

ある学校では用具施設が整っているが、巧技、器械運動の指導について先生方が余りよく知らないので十分に器具が使われていなが、県当局及び大学関係の教官もこの点について現場の現職教育及び講習についてもっと考慮して頂きたいという希望も出された。

この点は現行の免許状にもその原因があると思われる。即ち体育実技をやらなくても体育の免許状がとれることになっているので、免許法の改正でも行われるだろうから今後よくなって行くことだろう。しかし日頃先生方もよくこの点について研究指導して行くことが大切である。

施設面からも従来の考え方を変えて体育室が先ず建てられなければならないが、

まだ一般の人々にはそこまで行っていない。

この点は我々がよく啓蒙しなくてはならない。

また冬期に於てもかなり考えれば戸外で運動ができる時が多い。積極的に戸外で運動できるように考えるべきである。

この一方法としてコンクリートの広場を作っておくことが望ましい。

雨が上ればすぐ使用できるので、将来このような施設が特に北陸地方の学校では是非考えるべき問題だと思う。

冬期に於ては子供達の運動する機会も少くなるので指導者としてはよく注意して、できるだけ機会をとらえて運動させるように指導することが大切である。

3 リズム運動の創作についての段階的指導法

一 低学年から高学年に至るリズム運動の創作的表現の流れ

二 低中高学年における基本歩法、参考作品の取扱い

表記の題につき出題者より現場にある者の悩みとして創作表現のこなせない児童をいかに導き、どこ迄やればよいか、などにつき御指導戴きたいと、具体的な問題を提出され、出席者〇〇名によって話し合いされたものを要点だけ抜き書きすることにする。

1 従前の文部省の講習から汲みとられるものは、何となくむずかしく手がつけられなかった。理論としてわかったものを、いかに実際の場において指導するか、という指導法の研究が足りないのではないか。

2 最近では学習内容が児童中心に考えられ、言葉も平易に親しみやすく従前のダンスという考え方から、教育のためにやるという考え方によって来つつある。

3 特に低学年の模倣とか自由な表現を重んじて充分やらせる。身のまわりのものに対して注意してみる態度を養い、その表現を子供なりに工夫するよう指導法を研究する。

4 低学年のリズム遊びは、将来リズム運動やダンスのみに発展するのではなく、バスケットにもハードルにとび越しにもスキーにも必要な基礎的能力の養成にもなるのである。先生の男女の別なく研究する必要があるわけである。

5 音楽のもつリズムと、動きの持つリズムの関係について。結局リズム運動を主に考えた時は、音のリズムは動きのリズムの衝動であって、動きのリズムは音のリズムの翻訳ではない。したがって指導にあたっては、音楽があって動きが出るのではなくして、動きが出て音楽が伴奏的なものになるようにしたい。

6 創作の段階的指導を考える場合大体小学校のリズム運動の表現はどこまでいったら頂点と云え得るだろうか。たとえば低学年では音と一律に動くという生活指導等、人に迷惑をかけないという点、中学年ではリズムの変化、アクセントの変化、前後斜などの方向の練習、グループ的な構成などの点、更に高学年では直線、曲線の動きができ精神内容が現われて来る。などということから、児童心理の研究と身体発育状況から併せ考える必要がある。

7 リズム運動に限らず、体育の教材は安定性がない。種目そのものが異なり、教材と内容が異なるし、段階的取扱といっても児童相手故にいたって不明瞭である。ダンスにおける流れをくむ人も、今まで既成作品をさせていたが、今は創作ダンスをさせて、それを身体活動として、体育の教材の中へ入れている。アメリカにおいては、フォークダンス的なもの、モダンダンス的なもの、タップダンス的なものなど、一緒になったようなものを現在とりあげているのではないかと思う。

8 低学年の指導は、身振りだけで、よいのではないか。と低学年の指導に対しての問題がとり上げられ、低学年は遊びと興味が中心で、すべて素直にとれる子供にする。実際に当っては、リズムにおいては、簡単なリズムをすぐ動作にうつすことができ、表現については、思ったことを卒直に表現することができ基礎能力については、歌曲によって集ったり歩いたり、または自由の隊形に開いたりすることができる。

9 中学年においては、身体的要求面から基本的なものはいつて来る。リズムにおいては、簡単なリズムを見たり聞いたりして、それに簡単な言葉をつけ、更に表現することができ、表現については、グループを作って表現したり、物語りに於いて、筋を追って表現することが出来、基礎技能として、簡単なステップ——ウォーキング、ランニング、スキップ、ツーステップ、ギャロップ、ホップ、ポルイ、ワルツ——が理解できる。

10 高学年の指導は、美しいものを求める力が、自然に現われて来るので、この場合教師は、よき指導、よき指示を与え、他面に、よい作品にふれさせたり、話をきかせたりして、創意工夫するように仕向ける。

11 ステップについては、低学年は遊びとしてとり入れるので、基本ステップとしては無理になるが、中学年では相当、身体的能力が発揮できるので、その折にふれて、適切な指導をしていきたい。よい表現、よい創作をするためには、自分の思うように動く身体をつくっておかなければならない。

12 基本ステップの実際の指導に当っては、前進、後進、側進、斜前進、斜後進、廻転、リズムの変化、他ステップとの結合、一人で又は二人、三人とグループでなど、身体が発達につれて、適切な指導、興味ある指導をして、現在あつまっている創作なり、作品なりの価値を高め、気持よくできるよう努める。

13 現状として困難なことは、男の子へそれをどのように持って来て、どの程度にさせるか、または女子と異ったリズムの運動をさせるか。教材群のリズム遊びは低学年、中学年の男女共20パーセントから25パーセント、高学年は女子のみ15パーセントから20パーセントとなっている。したがってこれからみると、1年から4年までは男の子も、リズム運動をやり、5年以上はやらないということになる。しかし、このリズム運動を男子に5パーセント実施するという例もある。いずれにせよ、これは一応の案であって、絶対のものではないから、現場にあった教育をしなければならない。教師が引込思案になったり、男の教師が、リズム運動に関係ない

顔をしているのは、誤った考え方である。

14 4年までは男女と一緒にリズム遊びを行うことを本体とし、5、6年では自由であるとしているが、現在の我が国では、5、6年の男の子で、リズム運動を好む子供は極く少ないであろうと思うが、好む好まないとの問題は別として、

①リズム教育の立場から

②より広い体育経験を与えること

③レクリエーションとして楽しむために

などの理由により、一応させてみたいと思う。ではどう指導したらよいか。この時代の男子には、感情面を主体として表現させることでなく、動きの面を主体として、リズムカルな動きの楽しさを味わせることに重点をおき、その方針のもとに、レクリエーション的なフォークダンスなどを主体として、指導するがよい。

15 参考作品の取扱いについて、文字通りに参考作品であって、大体において既成作品を与えているが、場合によっては、既成作品でなくてもよいわけで、ある部分だけを抜き出して指導してもよく、また、その学年むきになおして指導してもよいわけである。

16 大体話し合いは、各学校におけるリズム運動の権威者の出席らしく、いずれも理想をのべているようであるが、さて現場の実情はどうであろうか。小学校の教師は他の学校の教師より多忙を極め、リズム運動のごときには手がゆかず、運動会の前や学芸会のためにやるという現状ではないだろうか。創作、創作といっても、全然「創作へのプロセス」のわからない者にとっては、どうしたらよいだろうか。最も手近なものは、よい作品によって学びつつ教えるという一面も、あってよいのではないだろうか。子供に創作させる学習は、実際、現場の先生に重荷と思うが、これの解決案はないものか。

17 音楽に歌を歌う面、器楽合奏の面、かんたんな作曲の面、いい音楽をきく面等あり、図画に描画の面、写生の面、図案の面、鑑賞の面等があると同様に、リズム運動も体育の一分野であるから、体育のねらいの基礎的能力を助長する面と、運動の文字や文法を自然に会得し、美しい精神内容を育成する参考作品にふれる面と、いろいろ自分で表現することにより、より創作的な人間になり得ると思う。かんたんな創作の面と、この三つの面を併せ考えながら、教育の一環としてのリズム運動を、より価値あらしめるよう研究されたい。